

太宰府市の文化財 第65集

太宰府・佐野地区遺跡群 15

長ヶ坪遺跡第1次調査

2002

太宰府市教育委員会
玉川文化財研究所

序

本書は、佐野地区土地区画整理事業に伴って、平成13年度から14年度にかけて実施した長ヶ坪遺跡第1次調査の報告書です。

調査地は太宰府市の南西部に位置し、周辺のカヤノ遺跡からは、大宰府が成立した頃の掘立柱建物跡が多数発見されています。今回の発掘調査でも同じような掘立柱建物跡が見つかり、太宰府市の歴史を知る上で貴重な成果を得ることができました。

本書が学術研究はもとより文化財への理解と認識を深める一助となり、広く活用されることを心より願います。

最後になりましたが、文化財調査に対してご協力頂きました皆様をはじめ、関係諸機関の皆様方に心よりお礼申し上げます。

平成14年12月

太宰府市教育委員会
教育長 關 敏治

例 言

1. 本書は長ヶ坪遺跡第1次調査の埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 調査地点は太宰府市大字大佐野461-1、465-1、467-1他に所在し、調査を平成13年11月12日から平成14年6月10日にかけて実施した。対象面積は3,017m²、調査実施面積は2,480m²である。
3. 発掘調査は、太宰府市教育委員会の指導のもとに（株）玉川文化財研究所（所長 戸田哲也）が行った。
4. 遺構の実測図作成及び写真撮影は、秋山重美、小山裕之、佐々木竜郎が行い、調査地の空中写真は（有）空中写真企画が行った。
5. 遺構実測の基準点は、国土調査法第Ⅱ座標系を基準としている。よって、報告書に示す方位はすべて座標北（G.N）を指している。なお、現地周辺の磁北は座標北から6°30′西偏する。
6. 報告書作成業務は（株）玉川文化財研究所において行った。
7. 遺物の実測図作成は土器類が木村百合子、石器類が中山 豊、唐原賢一が行い、遺物の写真撮影は赤間和重が行った。
8. 縄文時代石器実測図の縁辺に図示した矢印は、微細な剥離痕範囲を示している。
9. 本書の執筆は、戸田哲也の指導のもとに、Ⅰ～Ⅴ・Ⅶを小山裕之、Ⅴの石器と縄文時代の遺物を中山 豊、台帳類は佐々木竜郎、付属のCD-ROMデータの編集は小山裕之が行った。また、自然科学分析については、パリノ・サーヴェイ株式会社に委託し、その報告をⅥに掲載した。
10. 本書の編集は小山裕之が行った。
11. 本文・表・写真図版については付属のCD-ROMに収容している。詳細はCD-ROM内のテキストデータ「はじめにお読みください」を参照のこと。
12. 出土遺物及び図面、写真等の記録類は太宰府市教育委員会が保管し、公開・活用していく予定である。
13. 本報告書で用いた土師器・須恵器の技法・分類基準は以下の文献による。
小田富士雄 1969 「筑後における須恵器の編年」『塚ノ谷窯跡群』八女市教育委員会
小田富士雄 1979 「九州の須恵器」『世界陶磁器全集2 日本古代』
小田富士雄 1996 「九州地方の古墳時代の土器」『日本土器事典』
太宰府市教育委員会 1983 『大宰府条坊跡Ⅱ』
太宰府市教育委員会 1992 『宮ノ本遺跡Ⅱ-窯跡篇-』
山本信夫 1992 古代の土器シンポジウム『古代の土器研究-律令的土器様式の西・東-』
山村信榮 1999 古代の土器研究会主催シンポジウム『明日・白鳳の瓦と土器-年代論-』帝塚山
大学考古学研究所歴史考古学研究会

目 次

I. 位置と環境	1
II. 調査組織	2
III. 調査経緯	3
IV. 調査方法	3
V. 検出された遺構と遺物	9
1. 遺 構	9
1) 竪穴住居跡	9
2) 掘立柱建物跡	16
3) 柵列	27
4) 土坑	29
5) 溝	36
6) 陥し穴	39
7) トレンチ調査	43
2. 遺 物	49
1) 竪穴住居跡出土遺物	49
2) 掘立柱建物跡出土遺物	50
3) 土坑出土遺物	52
4) 溝出土遺物	53
5) 縄文時代出土遺物	54
VI. 長ヶ坪遺跡第1次調査に伴う自然科学分析調査	57
VII. ま と め	62
報告書抄録	巻末

I. 位置と環境

長ヶ坪遺跡の所在する福岡県太宰府市は福岡平野の南深部に位置し、福岡平野を東西に分ける三郡山地と南北に分ける背振山地との会合地点にあたる。

また、市内には鷺田川・大佐野川・御笠川が北流して山地の会合部で合流し、博多湾へ注ぐ。長ヶ坪遺跡は背振山地の東端の天拝山から北東に派生する丘陵裾部に位置し、西部には南北方向に小谷が形成され、その谷からは大佐野川が北流し、途中で北東方向に流れを変えながら、通古賀付近で御笠川に合流する。大佐野川のさらに西側には牛頸川が流れ、その対岸には買地券を出土した遺跡として著名な宮ノ本遺跡が立地する宮ノ本丘陵が存在する。

本遺跡の調査前状況は休耕地であり、南側から2段の段切り状地形に整地されていた。調査区内の調査前地表面の標高は、北側で約50～51m、南側では52～53mを測る。

考古学的環境に触れてみると、長ヶ坪遺跡第1次調査区北側に隣接する県道505号線は、谷部を大野城市牛頸に通り抜けており、調査地点は牛頸窯跡から太宰府市に入る道筋の入口部分にあたる。長ヶ坪遺跡から南方に続く谷間には須恵器窯なども見られる。

周辺の主な遺跡は、板付牛頸筑紫野線を境に北部から東部の低台地部、また、県道東側には大佐野川の東岸に沿うように展開しており、調査が行われている。

第2図に表した遺跡を東から順に追うと、東北東約900mの位置には、古墳時代の貯木場跡や、条坊外で初めて木簡が出土し、旧石器も1,300点ほど検出された脇道遺跡第1～6次調査区、同じく東北東約900mの位置には、古墳時代初めの方形区画溝をはじめ、弥生～近世までの集落跡が検出されている殿城戸遺跡第1～7次調査区、東北東約700mの位置には畑中遺跡第1次調査区、東北東約700～400mの位置には、6世紀後半頃の竪穴住居を中心とする集落遺跡である京ノ尾遺跡第1～5次調査区が存在している。加えて北西約400～700mに位置する福岡農業高校では、未調査ではあるが、中世山城の存在が推定されている。

本遺跡に最も関連した遺跡は、県道505号線を挟んで北側に展開するカヤノ遺跡第1～10次調査区である。未報告ではあるが、3・8次地点では住居跡、掘立柱建物跡などの遺構が多数検出されている。長ヶ坪遺跡とは僅かに県道幅約30mの距離を隔てた遺跡でもあり、本遺跡と同一の集落跡であるものと思われる。集落跡の全体像を考える上で、関連性が留意されよう。

II. 調査組織

太宰府市教育委員会調査組織 (平成13/2001年度)

総括	教 育 長	關 敏 治
庶務	教 育 部 長	白 石 純 一
	文 化 財 課 長	木 村 和 美
	文 化 財 保 護 係 長	和 田 敏 信
	文 化 財 調 査 係 長	神 原 稔 人
	事 務 主 査	藤 井 泰 人
	主 任 主 査	大 石 敬 介
調査	主 任 主 査	城 戸 康 利
	主 任 技 師	山 村 信 榮
		中 島 恒 次 郎
		井 上 信 正
		高 橋 学 一
		宮 崎 亮 一
	技 師 (嘱 託)	下 川 可 容 子
		森 田 レ イ 子
		佐 藤 道 文

(平成14/2002年度)

総括	教 育 長	關 敏 治
庶務	教 育 部 長	白 石 純 一
	文 化 財 課 長	木 村 和 美
	文 化 財 保 護 係 長	和 田 敏 信
	文 化 財 調 査 係 長	神 原 稔 人
	事 務 主 査	藤 井 泰 人
	主 任 主 査	大 石 敬 介
調査	主 任 主 査	城 戸 康 利
	技 術 主 査	山 村 信 榮
		中 島 恒 次 郎
		井 上 信 正
		高 橋 学 一
		宮 崎 亮 一
	技 師 (嘱 託)	下 川 可 容 子
		森 田 レ イ 子
		柳 智 子
		渡 邊 仁

(株) 玉川文化財研究所調査組織

所 長	戸 田 哲 也	日本考古学協会会員
調 査 研 究 部 長	河 合 英 夫	日本考古学協会会員
主 任 研 究 員	小 山 裕 之	日本考古学協会会員
主 任 研 究 員	秋 山 重 美	日本考古学協会会員
研 究 員	佐々木 竜 彦	

Ⅲ. 調査経緯

今回の調査は、太宰府市都市計画事業佐野土地区画整理（以下、区画整理）に伴う埋蔵文化財の事前調査であり、事業区域内に所在する長ヶ坪遺跡第1次調査として実施されたものである。

佐野地区の調査は、昭和62（1987）年度から開始され、長ヶ坪遺跡については、平成12（2000）年度に試掘調査が行われた他では、本格調査としては今回行われた調査（平成13年度）が最初の調査となる。

調査対象面積は3,017㎡、調査実施面積は2,480㎡であり、調査期間は平成13年11月12日から平成14年6月10日までの約7ヶ月間である。

Ⅳ. 調査方法

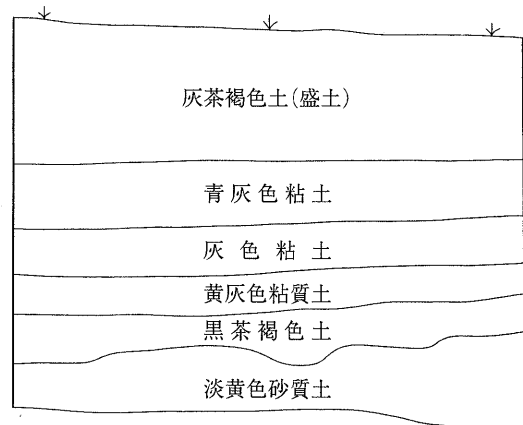
長ヶ坪遺跡第1次調査では、事業地内において排土処理を行ったことから、調査区を2分割して（以下、前期と後期）調査を行った。前期調査は、およそ調査区のNラインを境にした南側より、重機による表土剥ぎを開始し、遺構の検出作業を行った。その後、縮尺1/100の略測図を作成し、検出された遺構は順次手作業による精査・写真撮影等を行い、遺跡全測図・遺構個別図作成は手測り実測で行った。

前期調査終了後、上段部に広く認められた黄褐色土の堆積状況を知るために、1・2トレンチを設定した。その結果、黄褐色土の土層堆積は、二次堆積またはその他の自然影響力による様な複雑な様相を示しており、安定した土層堆積が認められず、遺構の存在も期待されなかったため調査を終了とした。

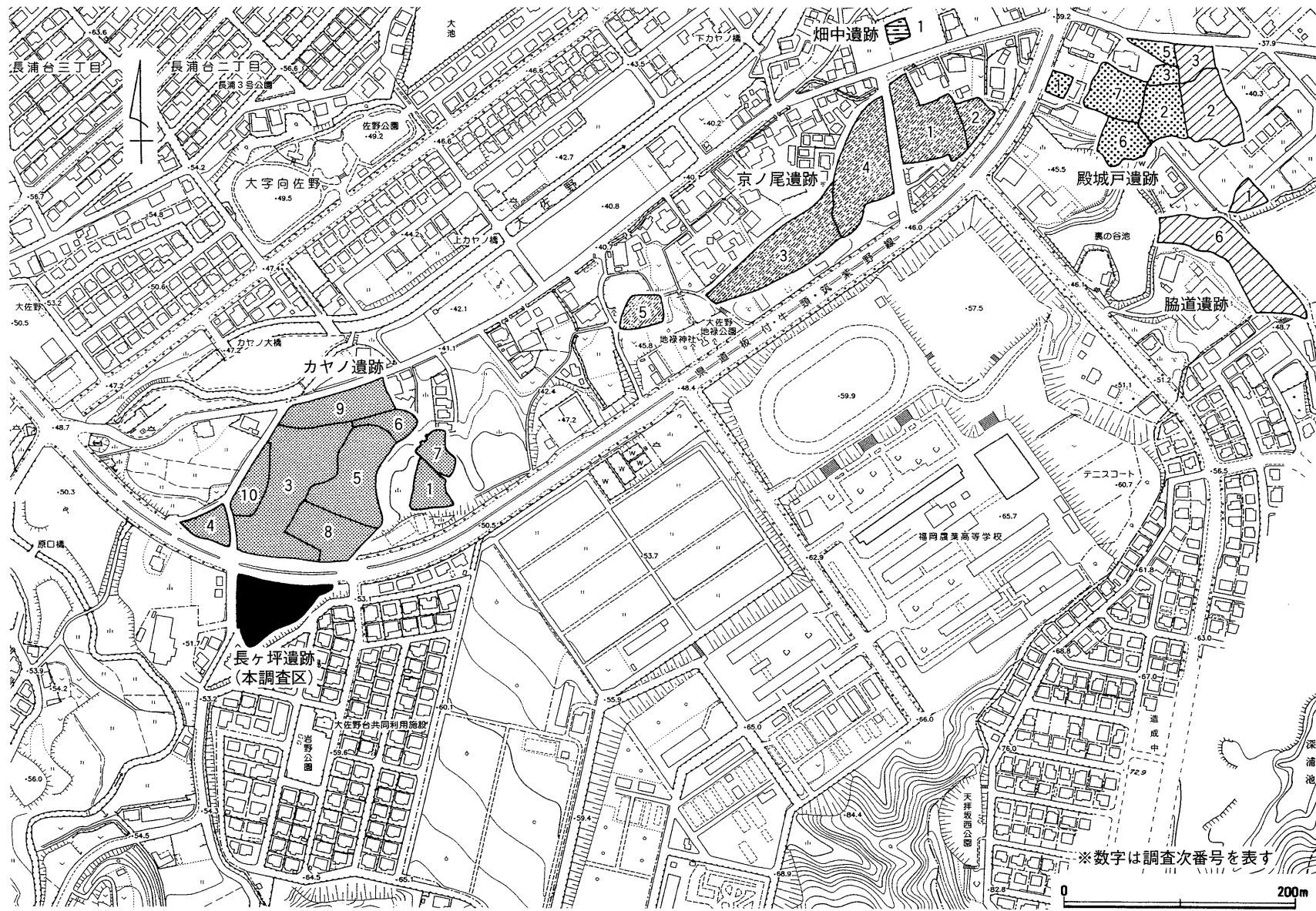
後期調査では、遺構検出面である黒褐色土中あるいは黄褐色土中から、押型文土器破片や剥片等が数点検出されたことから、古代面の調査終了後、トレンチを設定し縄文時代早期の遺構検出を対象とした調査を行った。その結果、チップ・フレーク類が検出されたが、いずれも風倒木痕や攪乱の堆積土である暗黄褐色土からの出土であり、当該期の遺構や遺物包含層は確認されなかった。なお、調査区東部では古代遺構検出面下60～80cmから干裂状地形が検出され、西部では古代検出面下約50cmでは河川堆積によると考えられる砂層が確認された。上記したトレンチ調査をもって、全調査を終了した。

基本層序 今回の調査区は丘陵の裾部に位置し、南部から北部にかけて緩斜面を形成している。したがって、標高の高い南部と低い北部での標準堆積は異なっているが、基本層序に関する記録は調査区の北壁のみ記録が成されており、下記に北壁の層序を模式的に掲載しておく。また、当地域では沖積地的な土層堆積状況や風倒木痕の影響により、各地点での土層が複雑に錯綜している状況が看取されることから、参考として古代遺構確認面での基盤層平面図も併せて図示した。以下、各土層について説明する。

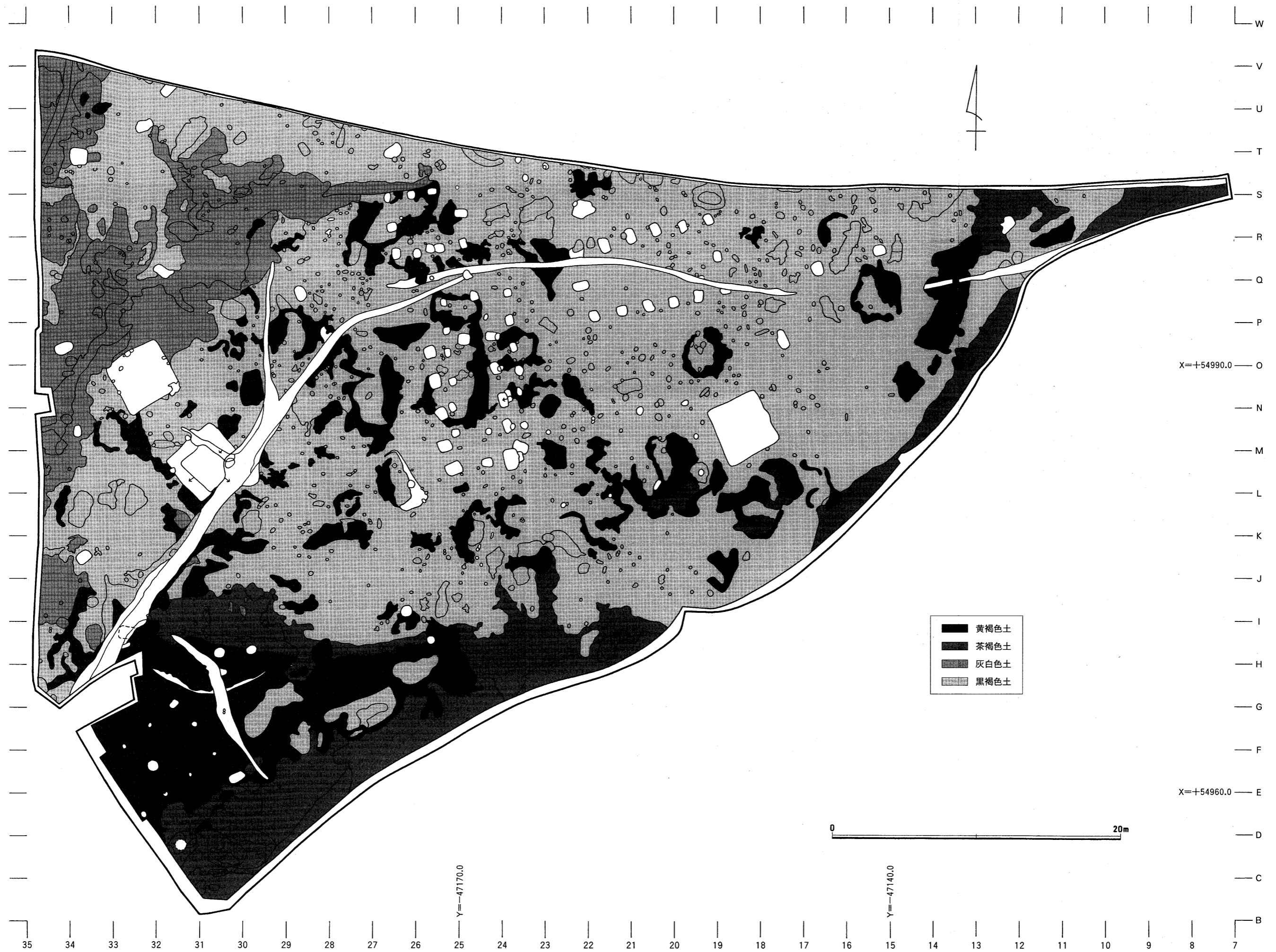
- I層 灰茶褐色土 砂利を多く含む現代の盛土層。
- II層 青灰色粘土 締まりが弱く、粘性が強い層で、水田層を形成していた層。
- III層 灰色粘土 II層に類似するが、色調が灰色がかかる層で、水田を形成していた層。
- IV層 黄灰色粘質土 II層に類似するが、粘性が若干弱い層で、水田を形成していた層。
- V層 黒茶褐色土 締まりが強く粘性が弱い。上面層界には酸化鉄集積が斑文状に広がる。
- VI層 淡黄色砂質土 締まり・粘性を欠きやや酸化気味の砂質土。本層下位層界を遺構確認面とした。



第1図 基本層位模式図



第2図 長ヶ坪遺跡第1次調査地点位置図 (1/5,000)



第3図 長ヶ坪遺跡基盤層平面図 (1/250)



第4図 長ヶ坪遺跡第1次調査遺構全体図 (1/250)

V. 検出された遺構と遺物

1. 遺 構

1) 竪穴住居跡

1SI001 (第5図、図版3)

本跡は調査区西部、発掘区ではO・N31~33区に位置する。平面形は方形を呈し、壁溝が周囲に巡る。床面は貼り床構造となるが、北東部分以外はほとんどが削平を受けていたため、掘り方に近い状況であった。柱穴は6本検出された。柱穴a~dまでの4本が支柱穴となり、他の2本は壁柱穴となる。平面形は楕円形・略円形を呈する。カマドは北西辺中央に構築されているが、遺存状況は悪い。

住居跡の規模は方4.1m、最大壁高5.5cm、壁溝規模は幅11~20cm、深さ13cm前後、柱穴規模は支柱穴aが43×36cm、深さ47cm、bが48×39cm、深さ50cm、cが48×41cm、深さ38cm、dが63×47cm、深さ53cmを測る。壁柱穴の規模は径23cm前後、深さ6cm前後を測る。主軸方位は北西辺のカマドと支柱穴間の中心に基準を求めるとS-32°-Eを指す。

カマド(第5図、図版3)一住居跡北辺の中央部に掘り込んで設けられており、燃焼部・掘り方が検出されたにすぎない。燃焼部の形状は楕円形を呈し、規模は長径68cm、短径42cm、深さ10cmを測る。覆土中には焼土・炭化物が多量に含まれていた。

1SI015 (第6図、図版4)

本跡は調査区西部、発掘区ではL・M30・31区に位置する。遺構覆土は失われており、掘り方の範囲、壁溝、カマドの痕跡から住居と判断した。平面形は方形を呈すると推定され、柱穴はa~dの支柱穴4本が検出された。

住居跡の規模は残存範囲で長軸4.0m、短軸3.2m、壁溝規模は幅17~32cm、深さ8cm、柱穴規模はaが径40cm、深さ47cm、bが65×45cm、深さ56cm、cが径63cm、深さ50cm、dが70×49cm、深さ72cmを測る。主軸方位は北西辺のカマドと支柱穴間の中心に基準を求めるとS-42°-Eである。

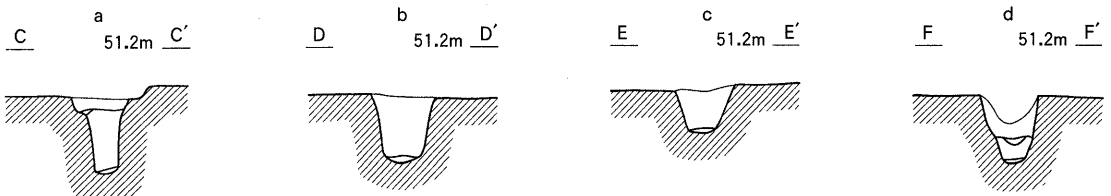
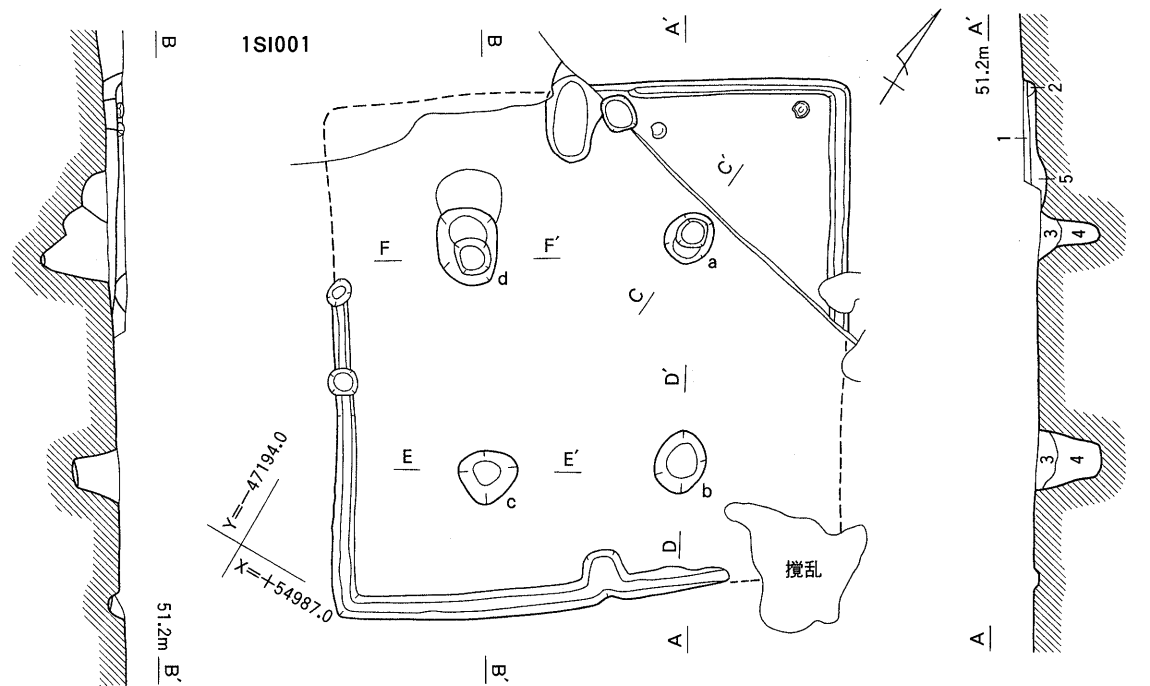
カマド(第6図)一住居跡北西辺のやや西よりに構築されており、掘り方が確認されたにすぎない。平面形は楕円形を呈し、規模は長径98cm、短径47cm、深さ14cmを測る。

1SI025 (第7図、図版4)

本跡は調査区中央部やや南寄り、発掘区ではL・M25・26区に位置する。後世の削平のため壁溝とカマド燃焼部の底面付近が僅かに遺存しているにすぎないが、残存範囲からは方形プランが推定される。柱穴はa・b2本と、周溝内から壁柱穴と思われる柱穴が4本検出されている。

住居跡の規模は残存範囲で、南北幅4.4mを測り、主軸方位はN-56°-Eを指針する。柱穴規模はaが径38cm、深さ23cm、bが径25cm、深さ31cmを測る。壁柱穴規模は径15~58cm、深さ3~25cmを測る。周溝規模は、最大幅27cm、深さ6cmを測る。

カマド(第7図)一住居跡北東辺の中央やや南寄りに約14cmほど掘り込んで設けられている。燃焼部の平面形は楕円形を呈し、残存規模は長径49cm、短径44cm、深さ6cmを測り、覆土中には焼土・炭化物が多量に含まれている。

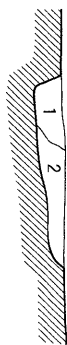


1S1001土層説明

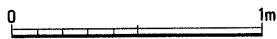
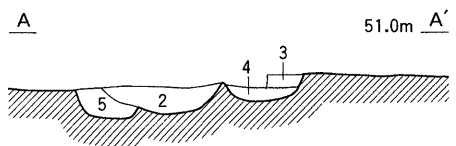
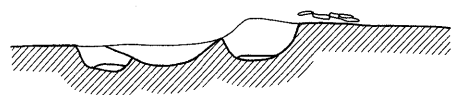
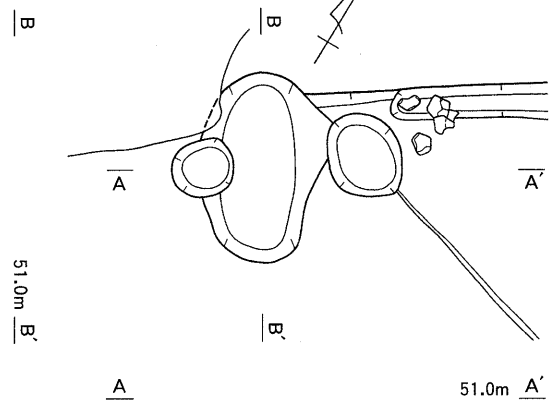
- 第1層 暗黄褐色土 締まり強く、部分的に酸化鉄を含む。
- 第2層 淡黄褐色土 締まり弱く、少量の黒色土粒子を含む。
- 第3層 黄褐色土 締まり・粘性とも強い。
- 第4層 黄色土 締まり弱く、砂粒を含む。
- 第5層 黒黄色土 締まり強く、黄色ブロックを含む(貼り床)。

カマド

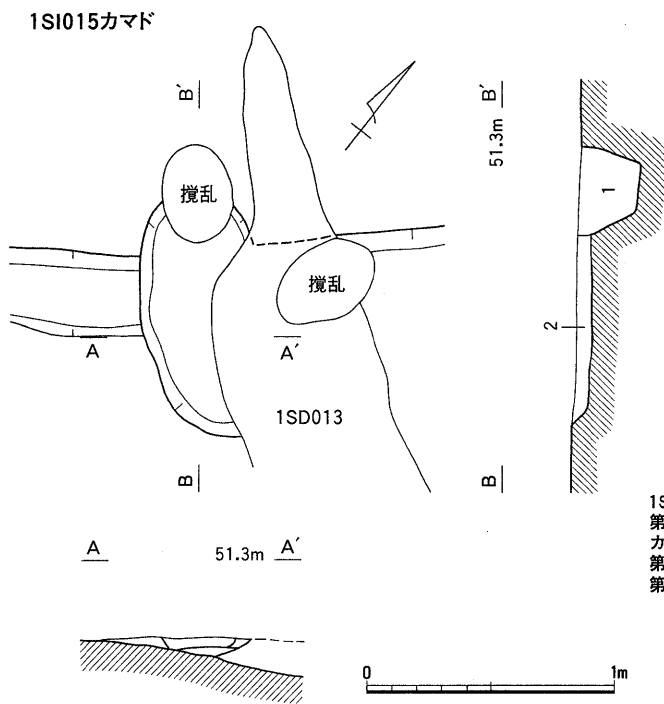
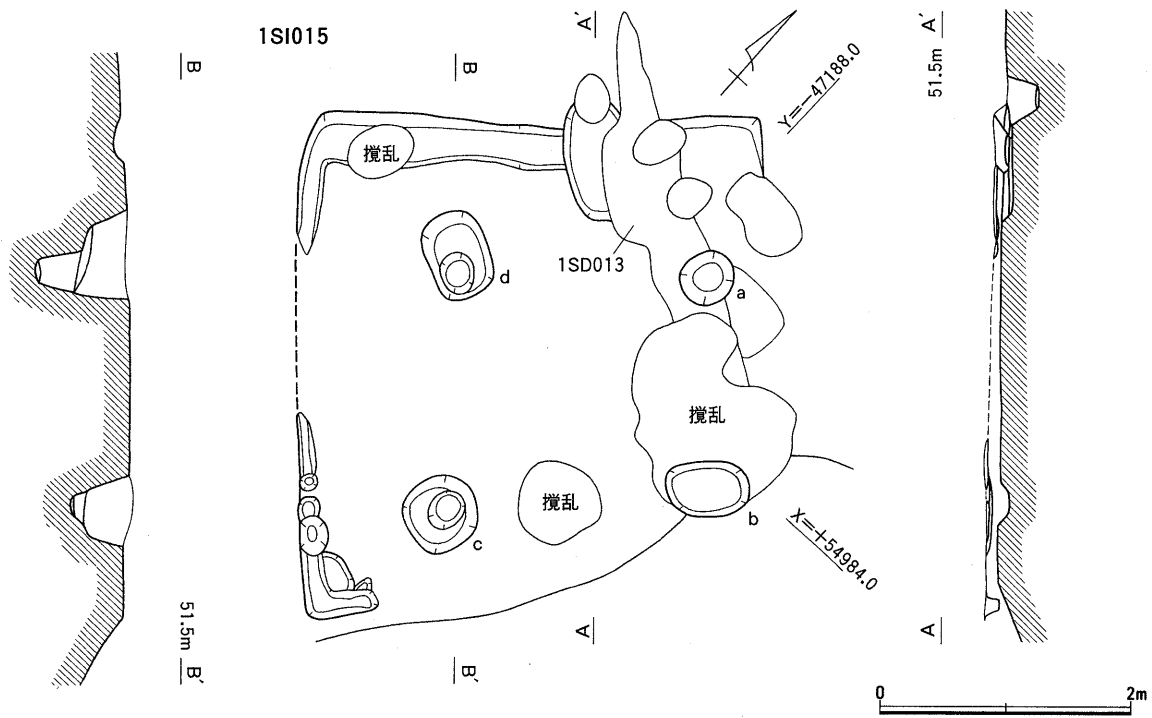
- 第1層 暗橙灰色土 灰色粘土粒子を少量含む。
- 第2層 暗橙褐色土 灰色粘土粒子・焼土粒子を微量含む。
- 第3層 暗黄褐色土 黄褐色粘土粒子を少量、焼土粒子を微量含む。
- 第4層 黄褐色土 焼土粒子を少量含む。
- 第5層 暗黄白色土 粘性が強い、カマド構築材。



1S1001カマド

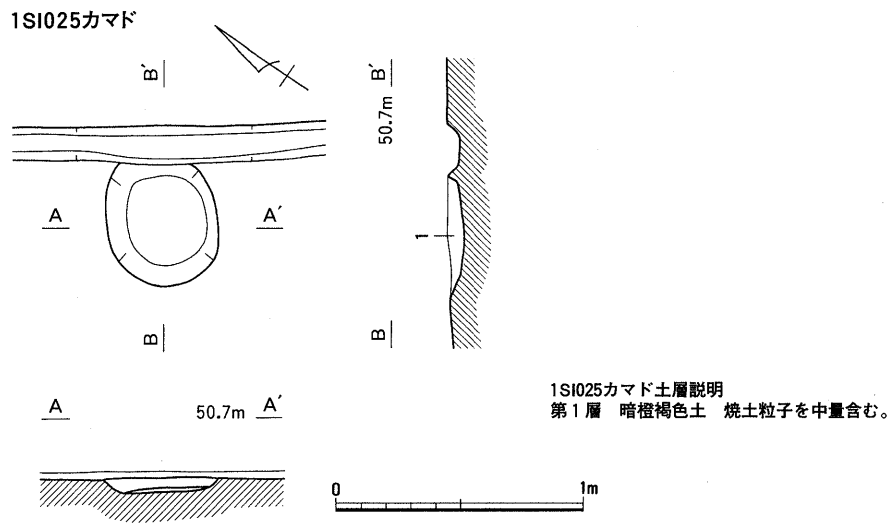
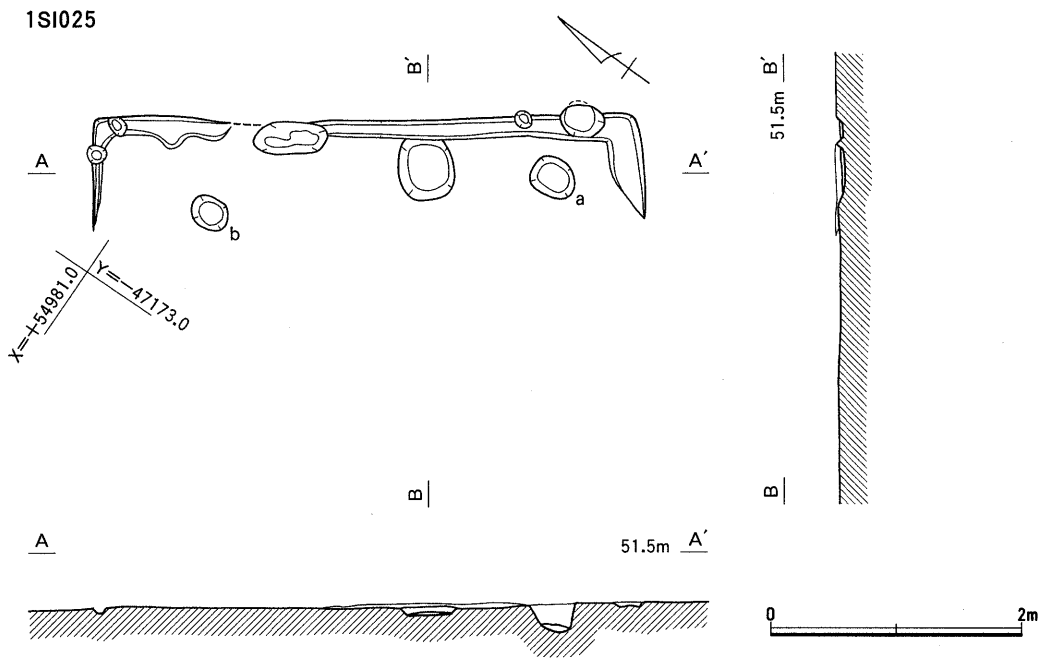


第5図 1S1001及びカマド実測図 (1/60・カマド 1/30)



1SI015土層説明
 第1層 暗橙褐色土 焼土を少量含む。
 カマド
 第1層 暗黄褐色土 締まり・粘性が高い。
 第2層 暗橙褐色土 黄色土・粘土粒子・
 焼土粒子を少量含む。

第6図 1SI015及びカマド実測図 (1/60・カマド 1/30)



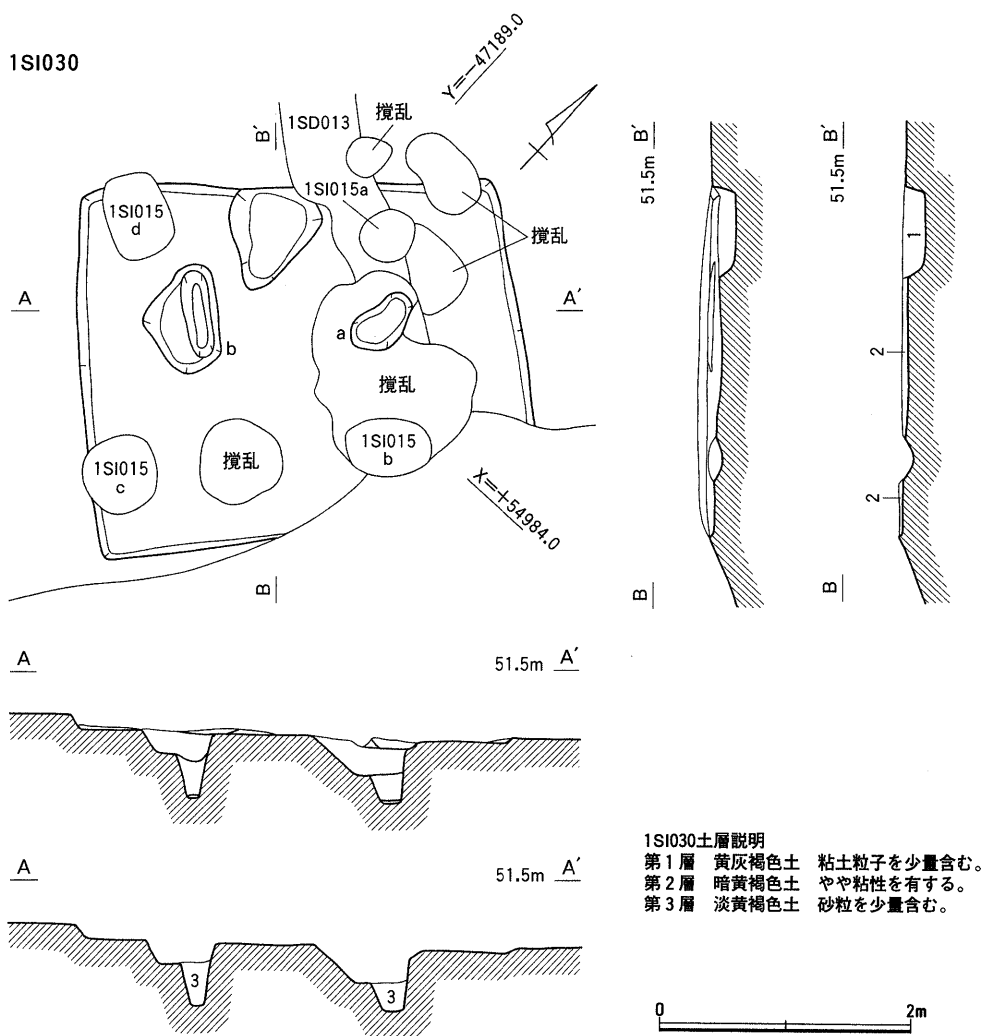
第7図 1SI025及びカマド実測図 (1/60・カマド 1/30)

1SI030 (第8図、図版4)

本跡は調査区西部、発掘区ではL・M30・31区に位置する。1SI015と入れ子状に重複することから、1SI030(古)→1SI015(新)と考えられる。柱穴はa・bが検出され2本柱造を持つものと考えられる。本跡北側部分では焼土の堆積が見られ、遺存状況の悪いカマド燃焼部と判断した。

住居跡の規模は残存範囲で長軸3.3m、短軸2.8m、柱穴規模はaが55×32cm、深さ33cm、bが82×59cm、深さ50cmを測る。主軸方位は北西辺のカマドと主柱穴間の中心に基準を求めるとS-44°-Eである。

カマド(第8図)一住居跡北西辺の中央部に約18cm掘り込んで設けられている。掘り方の平面形は不整三角形を呈し、残存規模は長径88cm、短径74cmを測り、覆土中には焼土・炭化物が多量に含まれる。



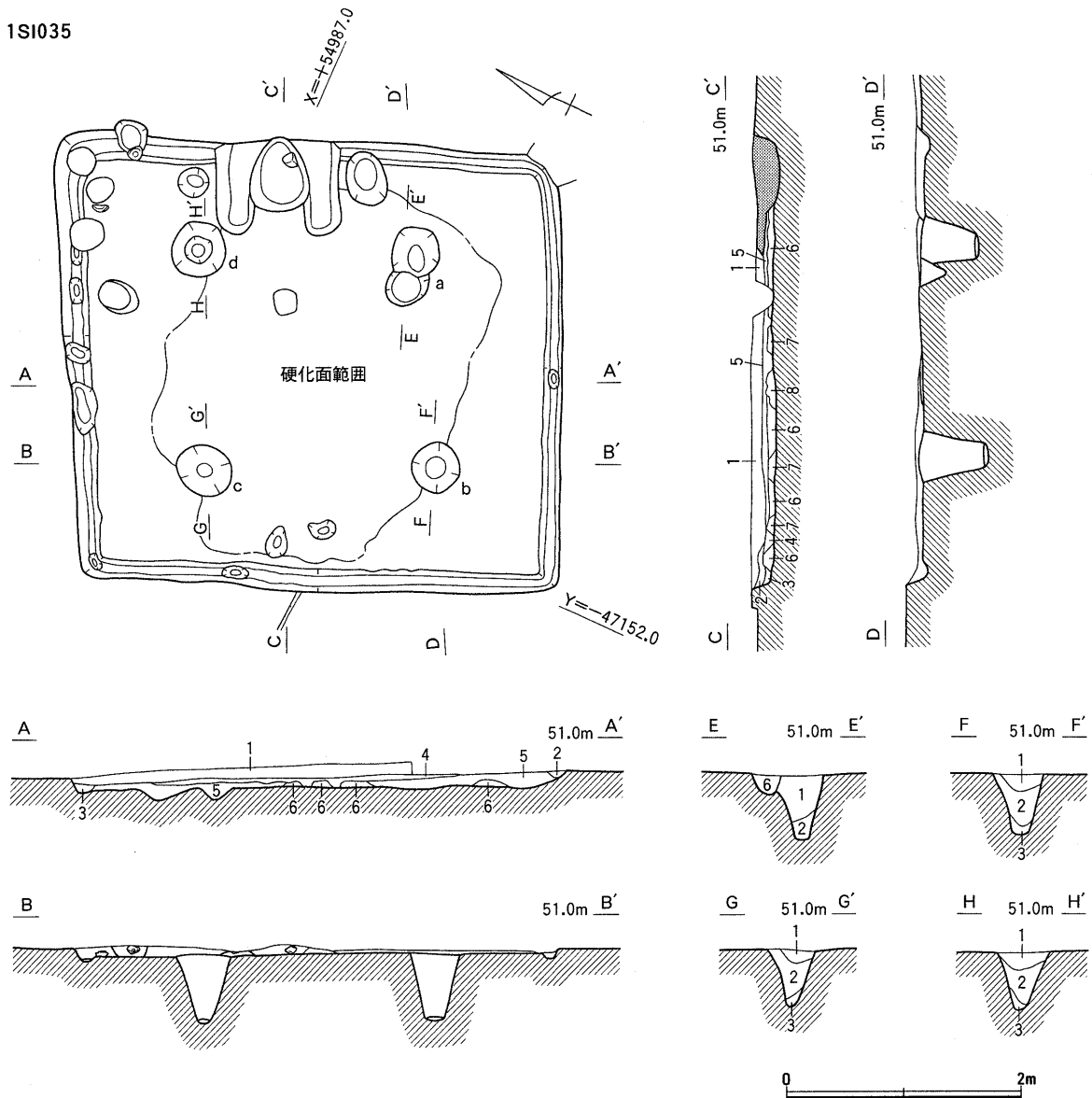
第8図 1SI030実測図(1/60)

1S1035 (第9図、図版5)

本跡は調査区東部、発掘区ではL~N17・19区に位置する。平面形は長方形を呈し、カマドは北東壁に構築され、壁溝は全周している。床面は貼り床構造をとり、カマド前及び中央部付近は硬化面が顕著で、凹凸が激しい。柱穴は16本検出され、その内a~dの4本が主柱穴と考えられ、カマド両脇にはやや大きめの補助柱穴が2本穿たれ、住居跡西辺中央には入口施設に伴うものと考えられる小柱穴2本も存在する。

住居跡の規模は長軸4.3m、短軸3.8m、最大壁高15cm、柱穴規模はaが径40cm、深さ49cm、bが径41cm、深さ58cm、cが径41cm、深さ57cm、dが径46cm、深さ58cm、カマド脇の補助柱穴規模は、北側柱穴が46×34cm、深さ35cm、南側柱穴が径27cm、深さ18cm、その他の小柱穴は径15~24cm、深さ6~15cmを

1S1035



1S1035土層説明

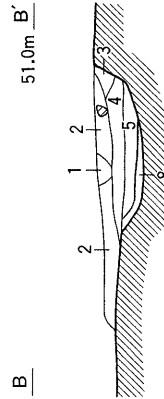
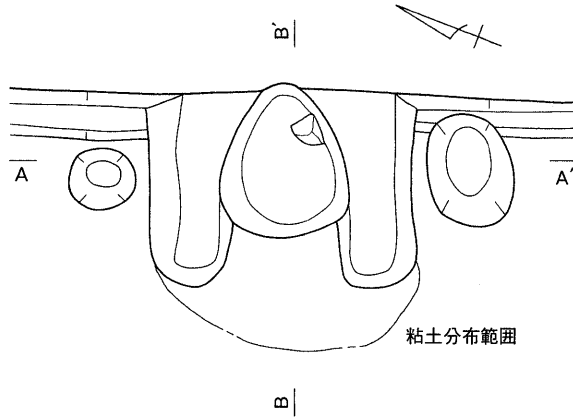
- | | |
|-------------------------------------|--------------------------------|
| 第1層 暗黄褐色土 粘性やや有り。 | 第5層 淡黄褐色土 少量の黄色粘土小塊を含む。 |
| 第2層 暗黄色土 粘性やや有り。黒褐色土小塊を少量含む。 | 第6層 淡黒褐色土 少量の黄色土粒子を含む。 |
| 第3層 黒黄色土 粘性やや有り。少量の黄褐色小塊を少量含む。 | 第7層 暗褐色土 締まり弱。 |
| 第4層 淡茶褐色土 締まり強く、黄色土小塊・粘土粒子を含む(貼り床)。 | 第8層 黒茶褐色土 締まり弱、黄色土粒子・黒色土粒子を含む。 |

第9図 1S1035実測図 (1/60)

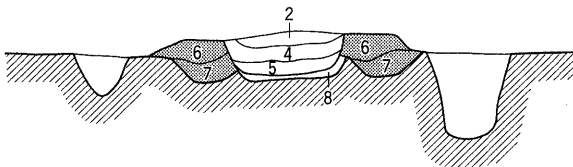
測る。主軸方位は東辺のカマドと支柱穴間の中心に基準を求めると S-69°-W である。

カマド（第10図、図版5）-住居跡東辺のほぼ中央に設けられ、カマド本体は掘り方に灰色粘土による混合土を充填・成形している。規模は燃烧部が長径61cm、短径51cm、両袖部は最大幅で32cmを測る。

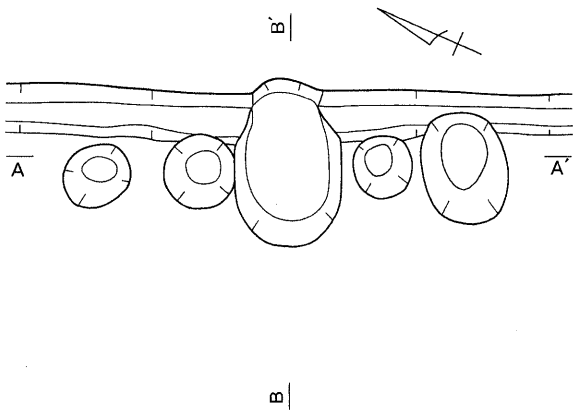
1SI035カマド



51.0m A' A



1SI035カマド掘り方



1SI035カマド土層説明

- 第1層 橙色褐色土 締まり強く、粘性に乏しい。焼土粒子を多量に含む。
- 第2層 暗灰褐色土 締まり弱。粘性を有する。粘土粒子と炭化物粒子を多量に含む。
- 第3層 暗茶褐色土 締まり、粘性を有する。少量の粘土粒子と炭化物粒子を含む。
- 第4層 暗黄灰色土 締まり弱。粘性をやや有する。粘土粒子・焼土粒子を少量含む。
- 第5層 暗橙灰色土 締まり弱。粘性を有する。焼土粒子・粘土粒子・炭化物粒子を少量含む。
- 第6層 灰褐色土 締まり弱。粘性を有する。粘土粒子を多量に含む。
- 第7層 灰色土 締まり、粘性を有する。粘土主体層で、カマド袖構築材。
- 第8層 暗褐色土 締まり、粘性を有し、粘土粒子・黄色土ブロックを少量含む。



第10図 1SI035カマド実測図 (1/30)

2) 掘立柱建物跡

掘立柱建物跡は調査区南西部で2棟、中央部から北部にかけて5棟検出されている。南西部の一群については大半が調査区外となるため、全容は把握しえないが、中央部の掘立柱建物跡群では2間×5間ないしは2間×4間の掘立柱建物跡がL字状に配置されている状況が把握できた。

以下、各遺構について説明するが、各掘立柱建物跡の柱穴規模については柱穴計測表を参照されたい。

1SB005 (第11図、図版6)

本跡は調査区南東部、発掘区ではF・G30～32区に位置する。梁行2間×桁行4間以上の東西棟の側柱建物であり、柱穴掘り方は円形または楕円形を呈する。各柱痕・柱穴間の距離は芯-芯間で、南東側桁行では柱穴a～b間が2.2m、b～c間が2.3m、c～d間が1.8m、南西側桁行では柱穴e～f間が2.3m、f～g間が2.2mを測る。梁行は柱穴g～h間が2.1m、a～h間が2.4mを測る。主軸方位は桁行き(柱穴a～d間)を基準とすると、N-50°-Eを指針する。

1SB020 (第12・13図、図版7)

本跡は調査区中央部、発掘区ではL～P23～25区に位置する。1SK096・1SA065と重複し、本跡は1SK096より古く、1SA065より新しい。建物の平面形式は桁行4間、梁行2間の南北棟の側柱建物であり、柱穴掘り方は方形または楕円形を呈する。

各柱痕・柱穴間の距離は芯-芯間で、東側桁行では柱穴a～b間が2.2m、b～c間が2.5m、c～d間が1.9m、d～e間が2.0m、西側桁行では柱穴g～h間が2.3m、h～i間が2.5m、i～j間が2.3m、j～k間が2.0mを測る。北側梁行は柱穴k～l間が2.5m、a～l間が1.9m、南側梁行きは柱穴e～f間が2.3m、f～g間が2.3mを測る。主軸方位は桁行き(柱穴a～e間)を基準とするとN-10°-Wを指針する。

1SB040 (第14・15図、図版8)

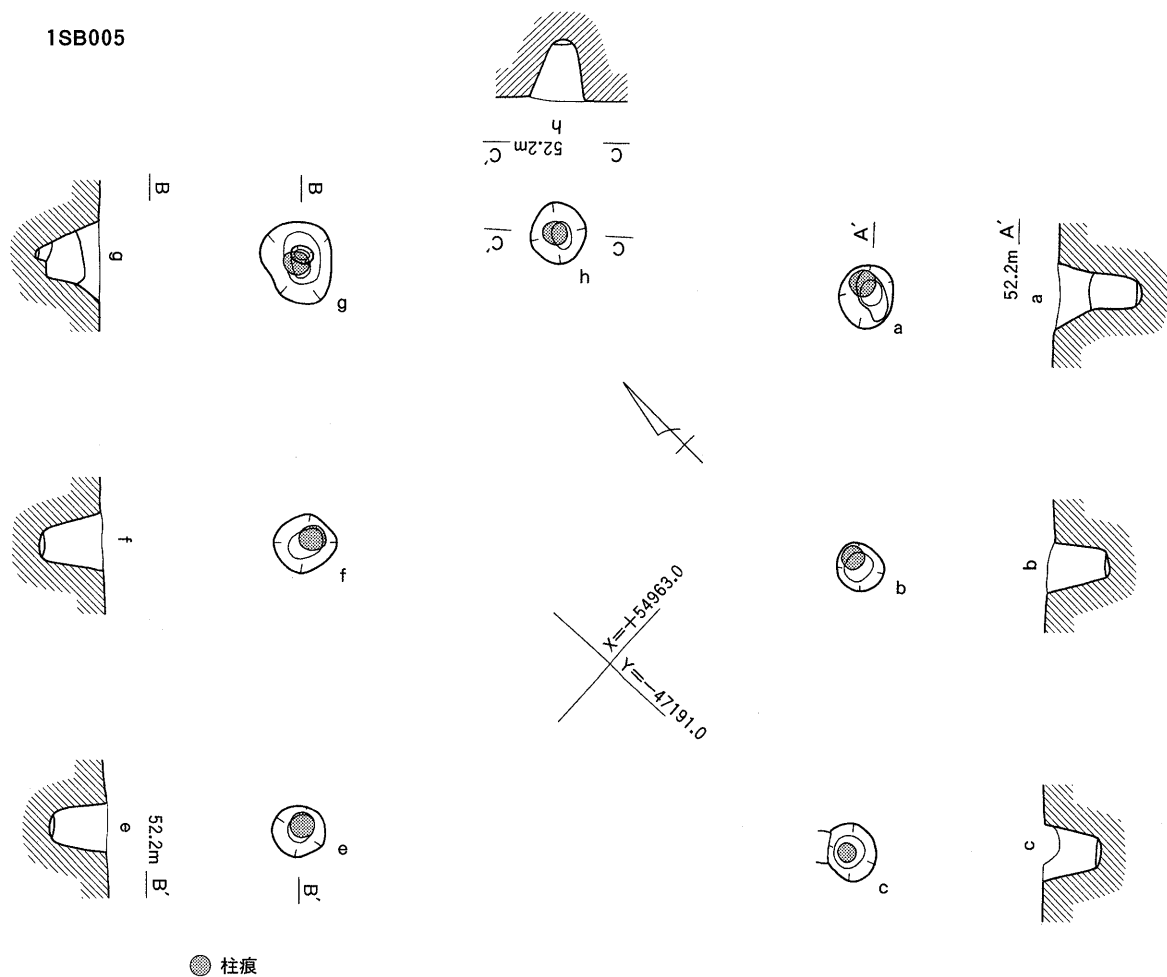
本跡は調査区中央北部、発掘区ではP～R18～22区に位置する。建物の平面形は梁行2間×桁行5間の東西棟の側柱建物である。掘り方は大半が方形を呈し、各柱痕・柱穴間の距離は芯-芯間で、南側桁行では柱穴a～b～c間が2.0m、c～d～e間が1.8m、e～f間が2.1m、北側桁行では柱穴h～i～j間が2.0m、j～k間が1.8m、k～l間が2.0m、l～m間が1.9mを測る。東側梁行は柱穴m～n間が2.5m、a～n間が2.6m、西側梁行きは柱穴h～g間が2.5m、f～g間が2.3mを測る。主軸方位は桁行き(柱穴a～f間)を基準とするとN-77°-Eを指針する。

1SB045 (第16・17図、図版7)

本跡は調査区中央部、発掘区ではM～P23・25区に位置する。建物の平面形は桁行5間×梁行2間の南北棟の側柱建物であり、掘り方は楕円形または略円形を呈し、1SB020・1SB040に比べ建物規模は大きい柱穴掘り方の規模は小さい。

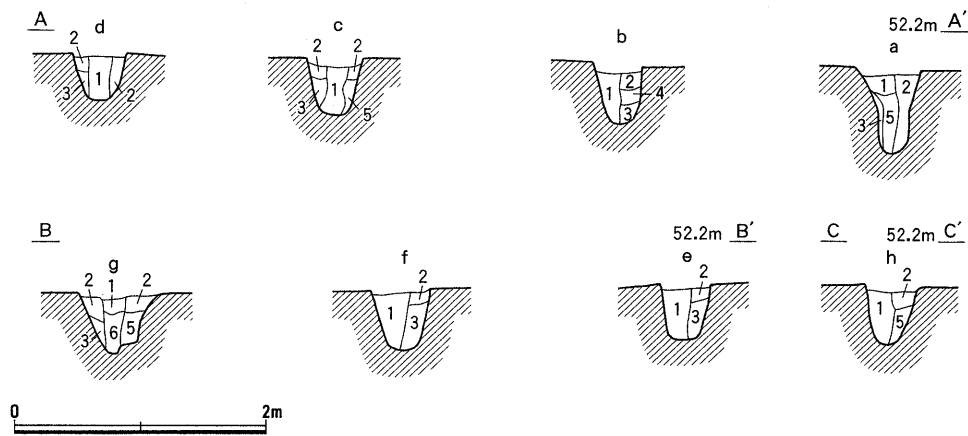
各柱痕・柱穴間の距離は芯-芯間で、東側桁行では柱穴a～b間が1.8m、b～c間が2.1m、c～d間が1.8m、d～e間が1.4m、e～f間が2.4m、西側桁行では柱穴h～i間が2.3m、i～j間が2.4m、j～k間が1.8m、k～l間が1.7m、l～m間が2.0mを測る。北側梁行は柱穴m～n間が2.4m、a～n間が2.2m、南側梁行きは柱穴h～g～f間が2.4mを測る。主軸方位は桁行き(柱穴a～f間)を基準とするとN-5°-Wを指針する。

1SB005



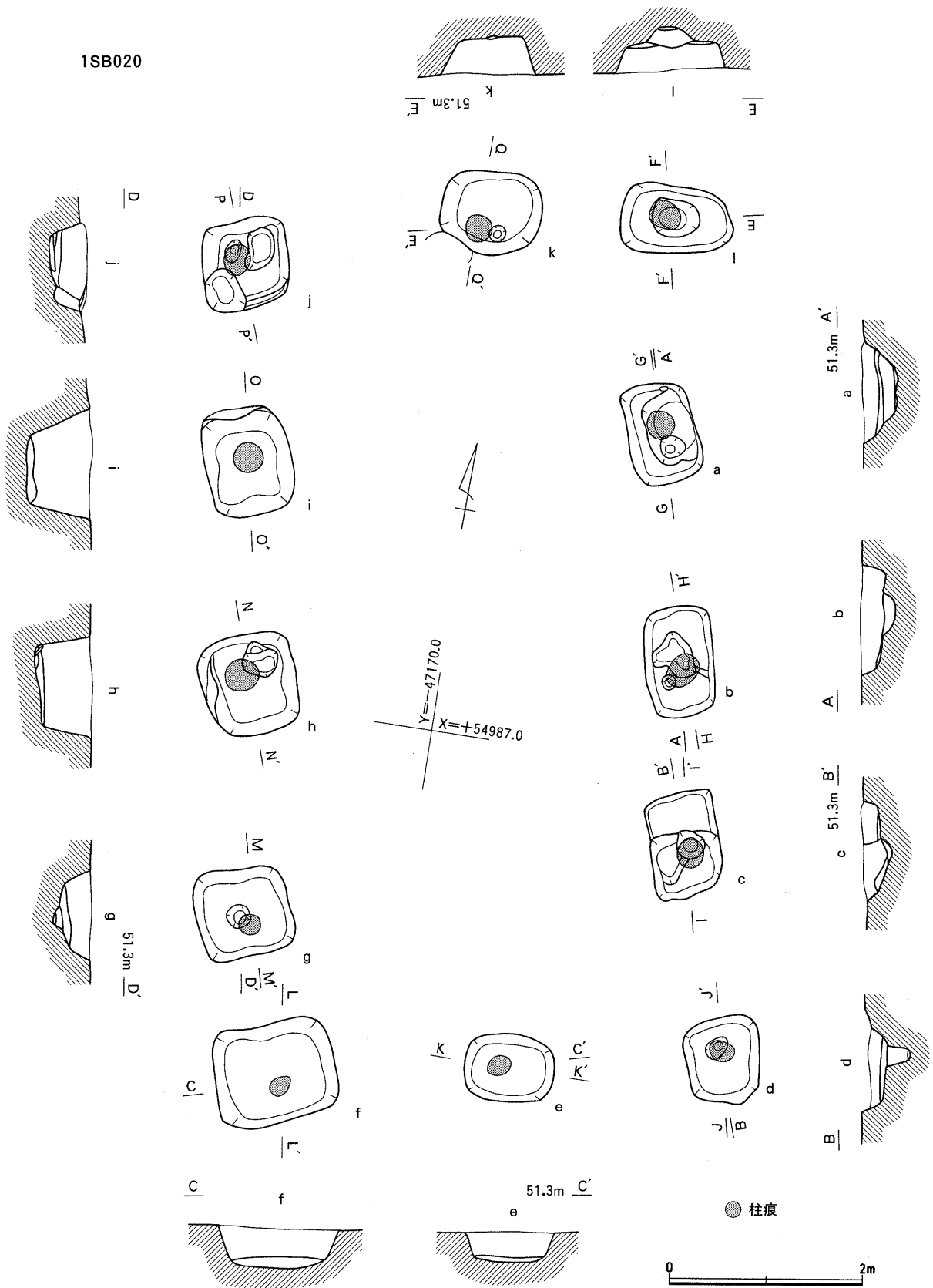
1SB005土層説明

- 第1層 暗黄褐色土 締まり弱く、砂粒を含む(柱痕)。
- 第2層 暗褐色土 締まりやや有り、黄色土小塊を微量含む。
- 第3層 暗茶褐色土 締まり有り、黄色土小塊を微量含む。
- 第4層 黒褐色土 締まり弱く、黄色土小塊を少量含む。
- 第5層 淡黄褐色土 締まり弱く、黄色土粒子を少量含む。
- 第6層 黄褐色土 1層に類似するが、色調が明るい(柱痕)。

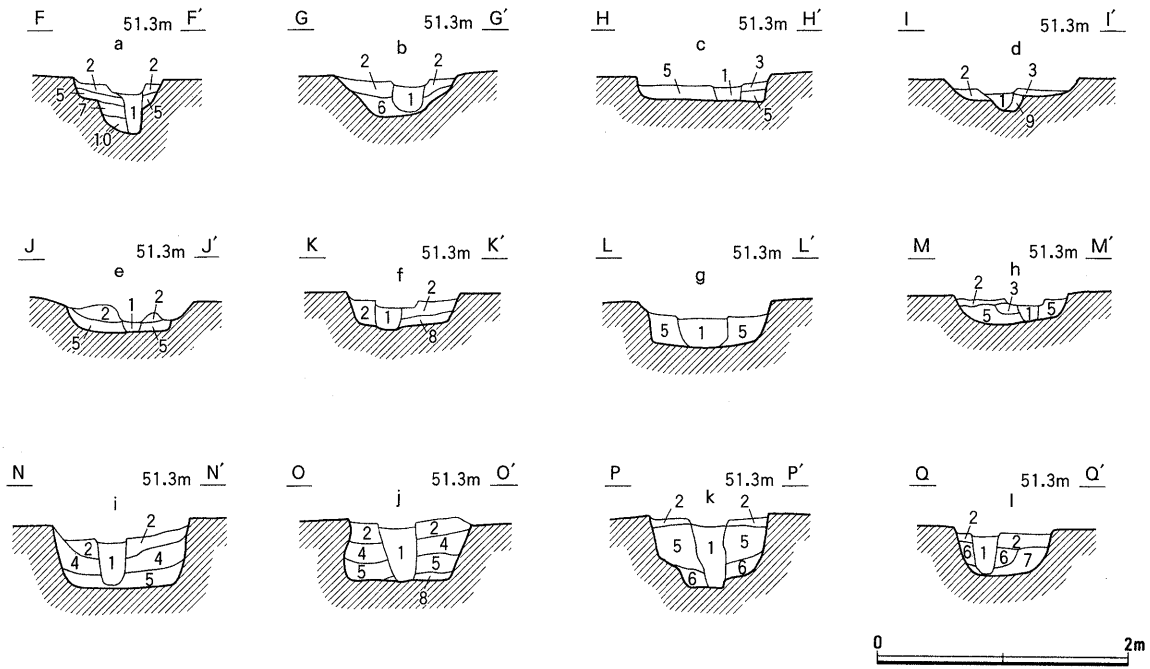


第11図 1SB005実測図 (1/60)

1SB020



第12图 1SB020实测图1 (1/60)



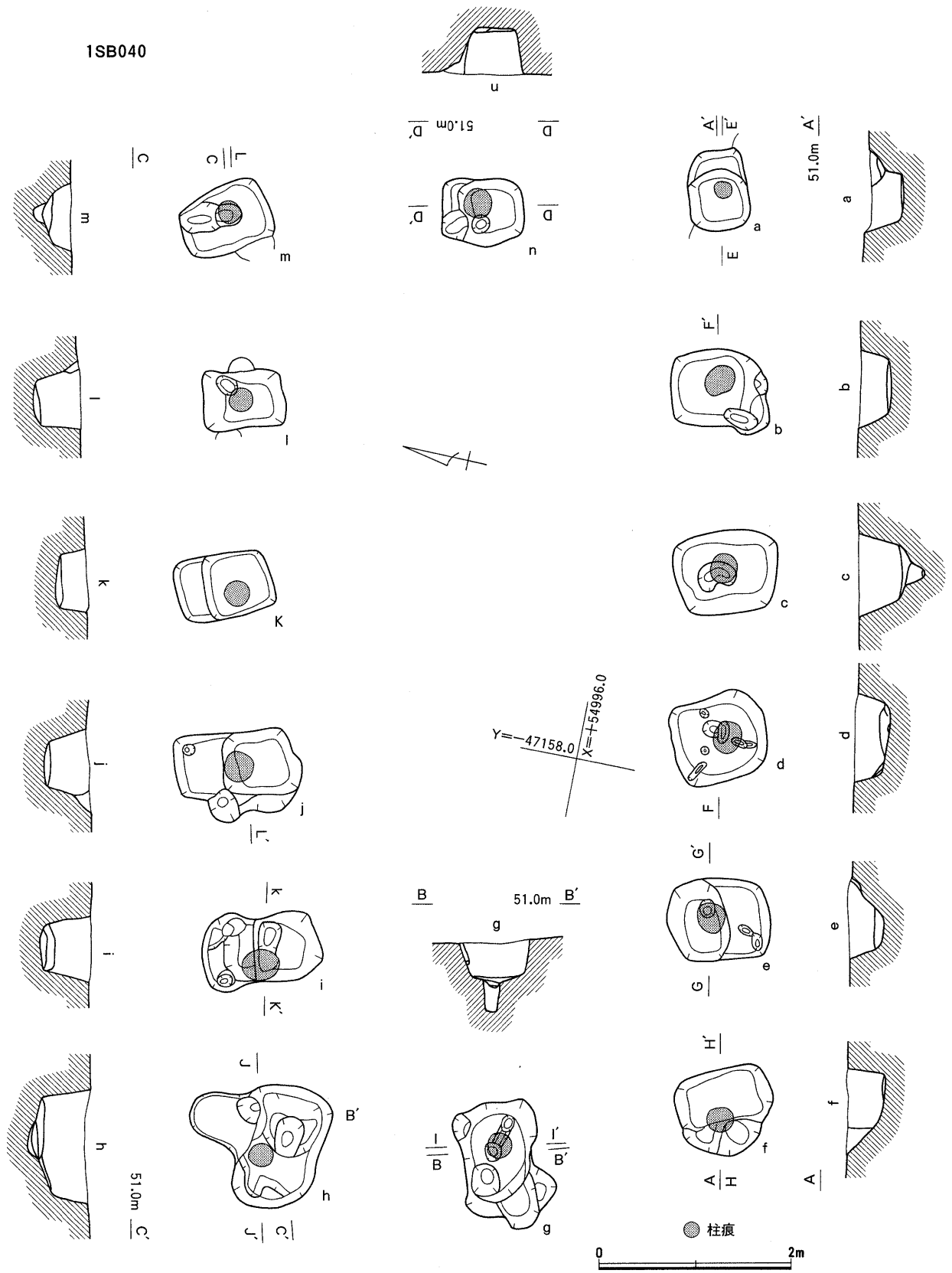
1SB020土層説明

- 第1層 淡黄褐色土 締まりが弱く、粘性を有する（柱痕）。
- 第2層 暗黄褐色土 締まり・粘性を有する。
- 第3層 黒色土 締まりを有し、少量の黄色土小塊を少量含む。
- 第4層 淡黄色土 締まり・粘性を有し、黄色土を少量含む。
- 第5層 黄褐色土 締まり・粘性が弱い。

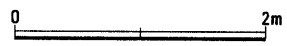
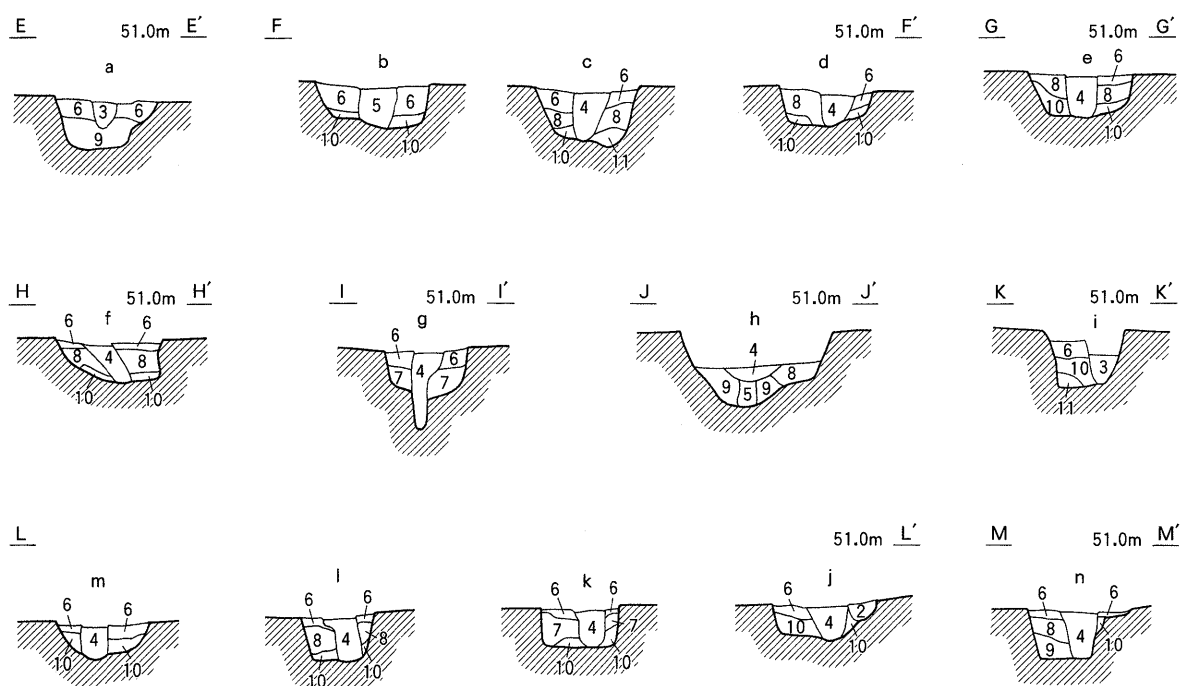
- 第6層 暗褐色土 締まりが弱く、粘性をやや有する。黄色土粒子を微量含む。
- 第7層 黒褐色土 締まり・粘性が弱い。
- 第8層 暗黄灰色土 締まりが弱く、粘性を有する。
- 第9層 暗黄色土 締まり・粘性を有し、黄色土小塊を少量含む。
- 第10層 明赤褐色土 9層に類似するが、色調が褐色化する。

第13図 1SB020実測図 2 (1/60)

1SB040



第14图 1SB040实测图1 (1/60)



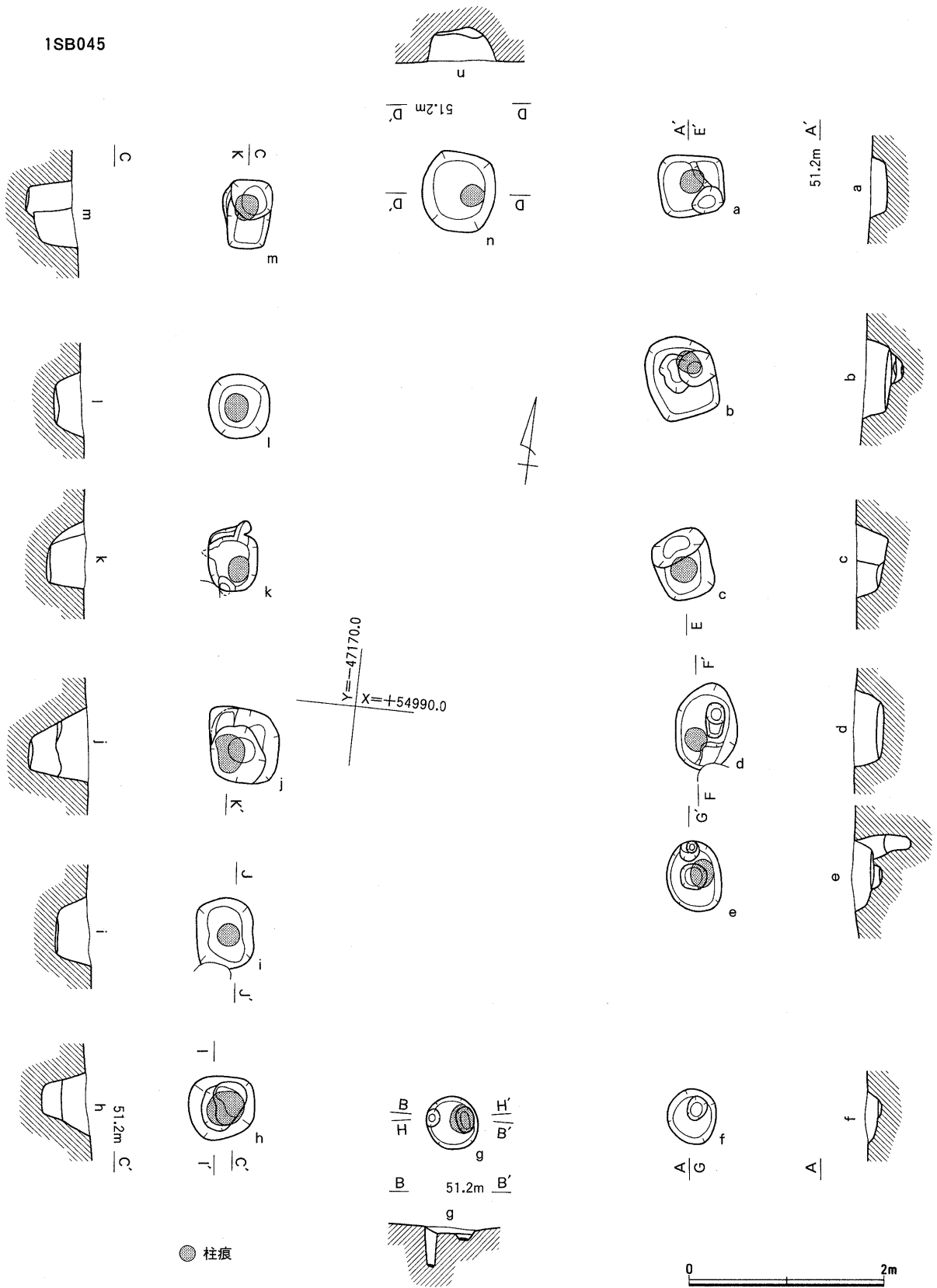
1SB040土層説明

- 第1層 青灰色粘土 締まり弱。粘性強。
- 第2層 淡青灰色粘土 締まり、粘性やや有り。
- 第3層 淡灰褐色土 締まり、粘性を有し、粘土粒子を少量含む。
- 第4層 淡黄褐色土 締まり弱。粘性強。
- 第5層 淡黄色土 4層に類似するが、色調がやや明るい。

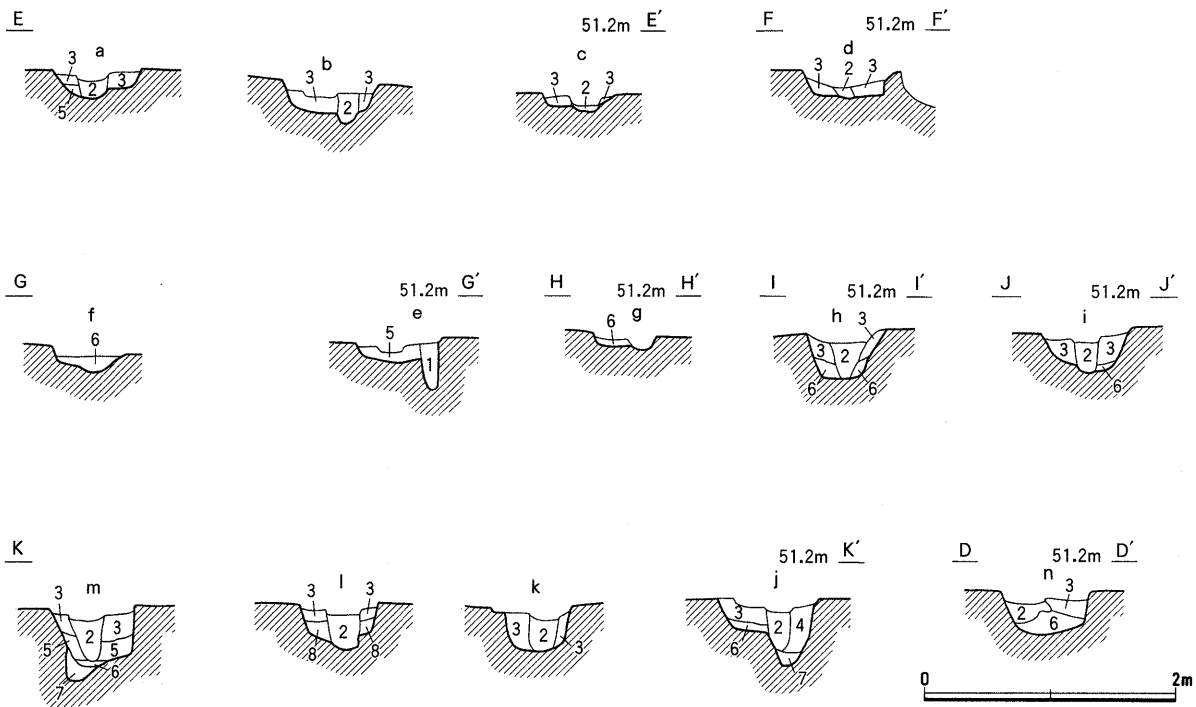
- 第6層 暗黄褐色土 締まり、粘性を有し、黄色土小塊を多く含む。
- 第7層 暗黄色土 締まり、粘性を有し、黄色土小塊を少量含む。
- 第8層 黄褐色土 締まり、粘性弱。
- 第9層 暗黄灰色土 締まり、粘性を有する。
- 第10層 黒黄色土 締まり、粘性弱。少量の黄色土粒子を含む。

第15図 1SB040実測図 2 (1/60)

1SB045



第16图 1SB045实测图1 (1/60)



1SB045土層説明

第1層 淡黄褐色土 締まりが弱く、粘性をやや有する（柱痕）。
 第2層 暗黄褐色土 締まりを有し、粘性をやや有する。
 第3層 黒色土 締まりを有し、少量の黄色土小塊を含む。
 第4層 暗黄灰色土 締まりが強く、粘性を有する。粘土粒子を含む。

第5層 暗褐色土 締まり・粘性を有し、黄色土粒子を少量含む。
 第6層 黒褐色土 締まり・粘性弱く、黄褐色土粒子を少量含む。
 第7層 灰白色粘土 締まり・粘性が強く、黒色土粒子を少量含む。
 第8層 暗黄色土 締まり・粘性をやや有し、黒色土粒子を微量含む。

第17図 1SB045実測図2 (1/60)

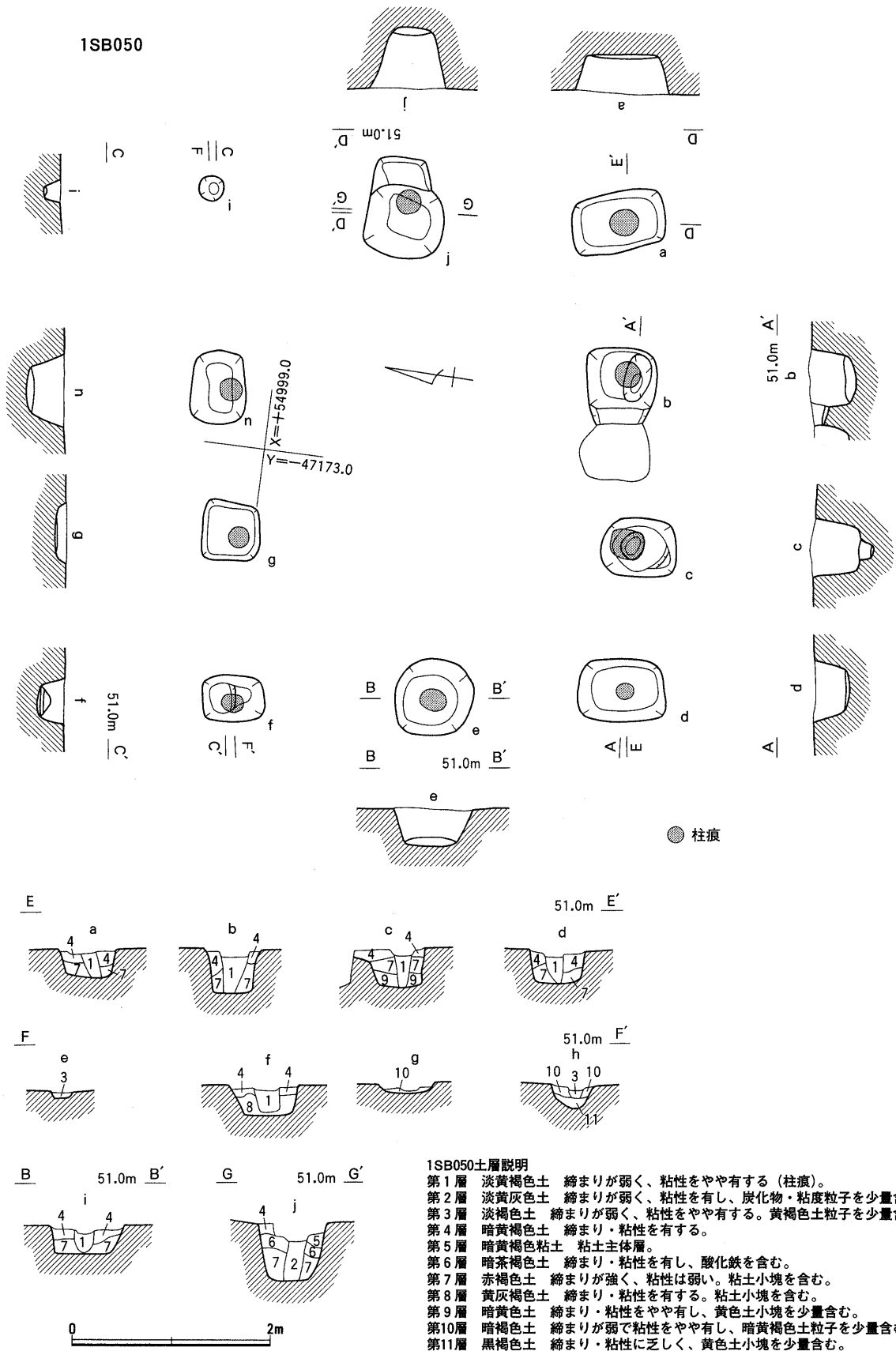
1SB050 (第18図、図版9)

本跡は調査区北部中央部、発掘区ではQ～S25・26区に位置する。建物の平面形は梁行2間×桁行3間の東西棟の側柱建物であり、柱穴掘り方は楕円形ないしは略円形を呈する。各柱痕・柱穴間の距離は芯-芯間で、南側桁行では柱穴a～b間が1.5m、b～c間が1.8m、c～d間が1.5m、北側桁行では柱穴f～g間が1.7m、g～h間が1.5m、h～i間が2.0mを測る。東側梁行は柱穴i～j間が2.0m、a～j間が2.2m、西側梁行きは柱穴f～e～d間が2.0mを測る。主軸方位は桁行き（柱穴a～d間）を基準とするとN-83°-Eを指針する。

1SB055 (第19図、図版10)

本跡は調査区北部中央部、発掘区ではS23区に位置する。調査区北側の境界部分で検出された。柱穴a～cを南西のコーナーと想定している。掘り方の平面形は略円形を呈し、各柱痕・柱穴間の距離は芯-芯間で、柱穴a～b間が1.7m、b～c間が1.4mを測る。主軸方位は柱穴a・b間を桁行きと想定した場合に、N-63°-Eを指針する。

1SB050

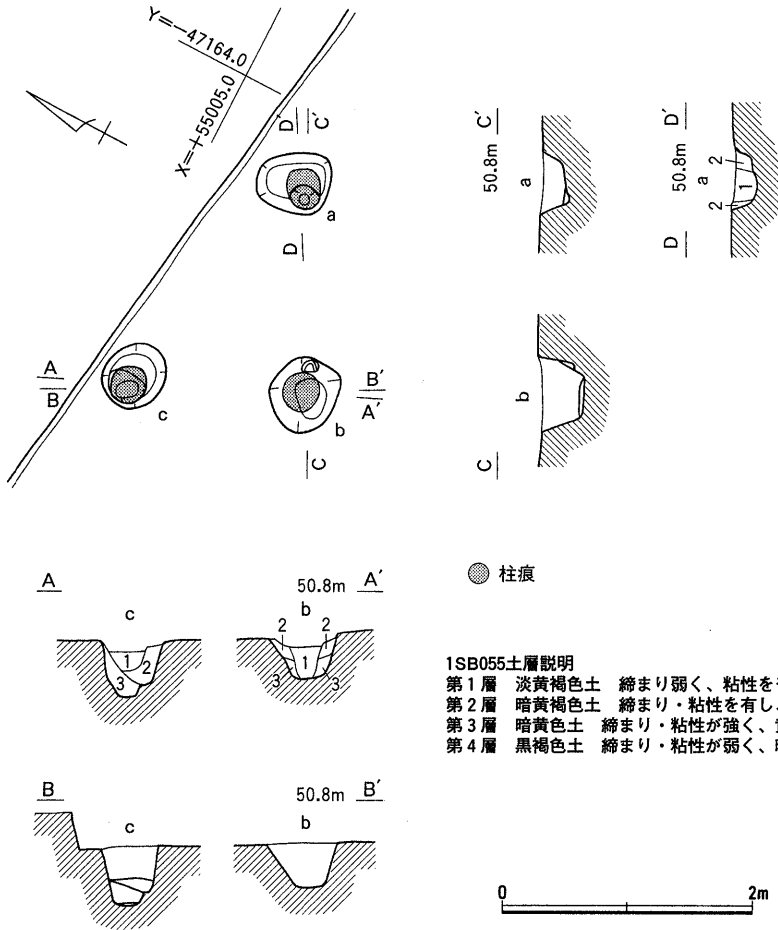


1SB050土層説明

- 第1層 淡黄褐色土 締まりが弱く、粘性をやや有する（柱痕）。
- 第2層 淡黄灰色土 締まりが弱く、粘性を有し、炭化物・粘土粒子を少量含む。
- 第3層 淡褐色土 締まりが弱く、粘性をやや有する。黄褐色土粒子を少量含む。
- 第4層 暗黄褐色粘土 締まり・粘性を有する。
- 第5層 暗黄褐色粘土 粘土主体層。
- 第6層 暗茶褐色土 締まり・粘性を有し、酸化鉄を含む。
- 第7層 赤褐色土 締まりが強く、粘性は弱い。粘土小塊を含む。
- 第8層 黄灰褐色土 締まり・粘性を有する。粘土小塊を含む。
- 第9層 暗黄色土 締まり・粘性をやや有し、黄色土小塊を少量含む。
- 第10層 暗褐色土 締まりが弱く粘性をやや有し、暗黄褐色土粒子を少量含む。
- 第11層 黒褐色土 締まり・粘性に乏しく、黄色土小塊を少量含む。

第18図 1SB050実測図 (1/60)

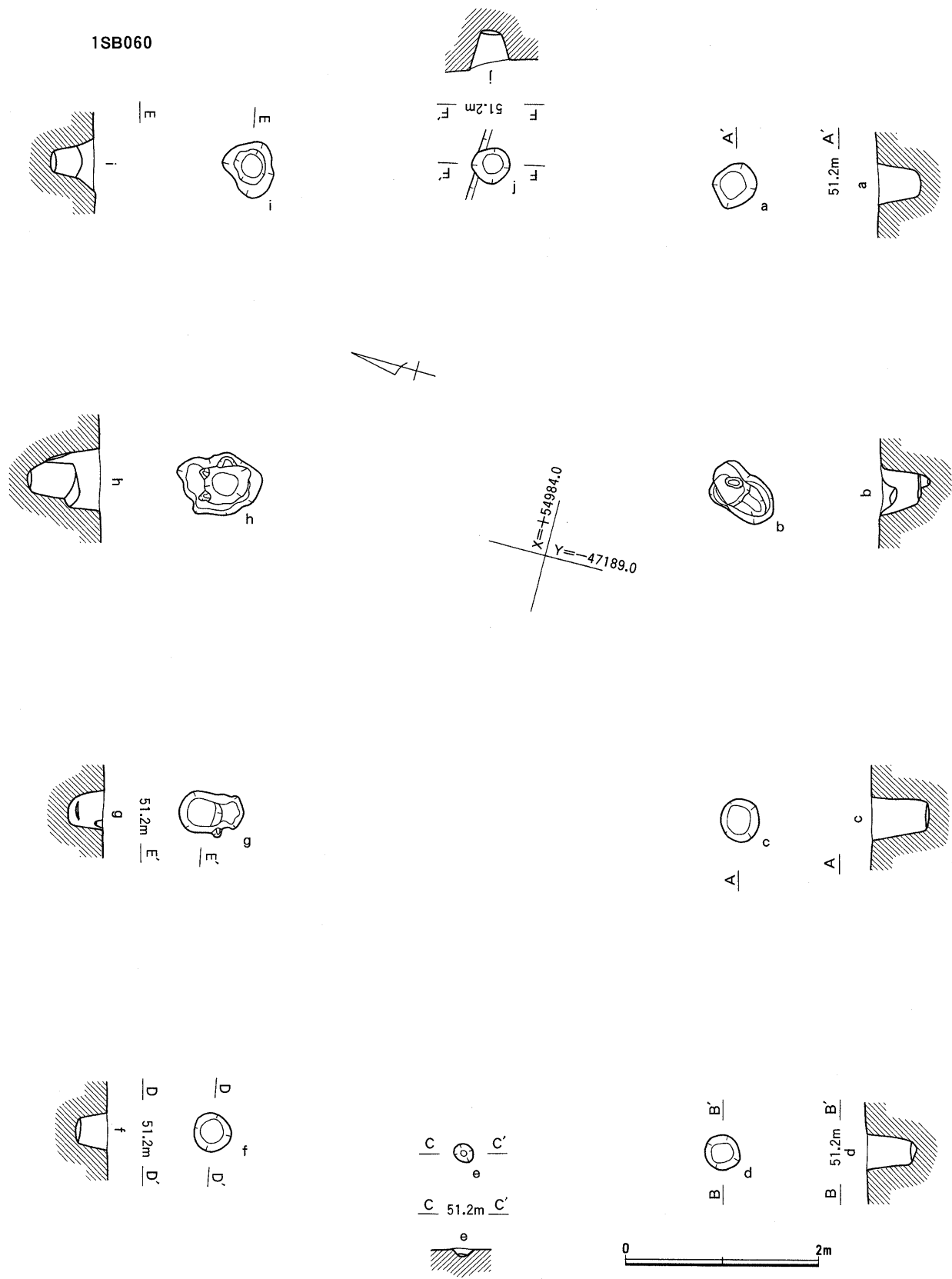
1SB055



第19図 1SB055実測図 (1/60)

1SB060 (第20図、図版11)

本跡は調査区中央部やや東寄り、発掘区ではL・N19~23区に位置する。建物の平面形は梁行2間×桁行3間の東西棟の側柱建物である。掘り方の平面形は楕円形ないしは略円形を呈し、各柱穴間の距離は芯-芯間で、南側桁行では柱穴a~b間が3.1m、b~c間が3.5m、c~d間が3.4m、北側桁行では柱穴f~g間が3.3m、g~h間が3.4m、h~i間が3.3mを測る。東側梁行は柱穴i~j~a間が2.5m、西側梁行きは柱穴f~e間が2.6m、d~e間が3.2mを測る。主軸方位は桁行き(柱穴f~i間)を基準とするとN-75°-Eを指針する。



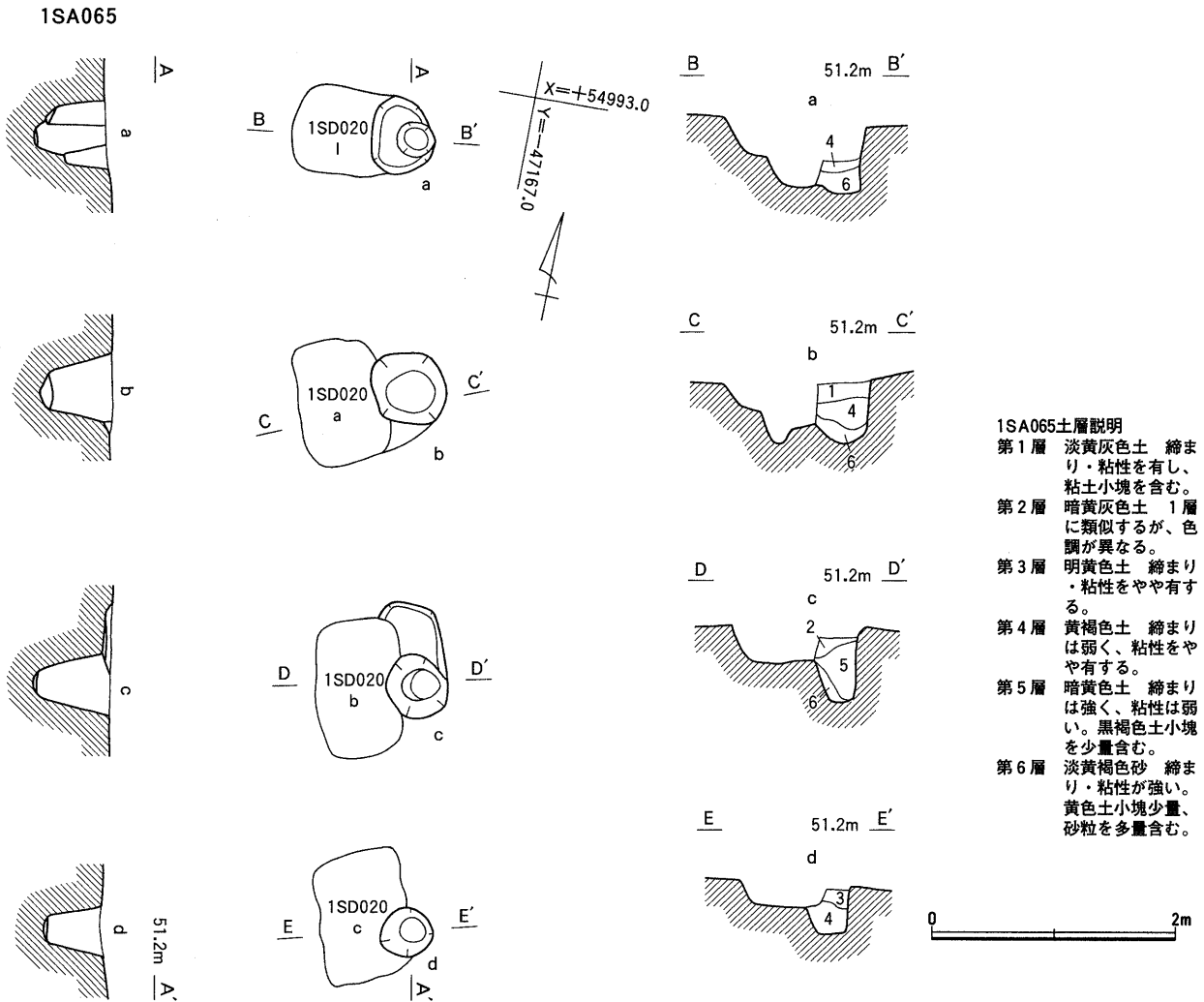
第20图 1SB060实测图 (1/60)

3) 柵列

1SA065 (第21図、図版7・11)

本跡は調査区中央部、発掘区ではM~O23・24区に位置する。南北3間分が検出されたが、それ以外は検出されていない。1SB020と重複し、本跡が古い。柱穴掘り方は略円形・楕円形を呈し、各柱穴間の距離は芯-芯間で柱穴a~b間が2.1m、b~c間が2.4m、c~d間が2.0mを測る。

なお、各柱穴規模については柱穴計測表を参照されたい。



第21図 1SA065実測図 (1/60)

第1表 掘立柱建物跡・柵列柱穴計測表

単位:cm

1SB005

柱穴No.	長径	短径	深さ	柱痕径	柱穴No.	長径	短径	深さ	柱痕径	柱穴No.	長径	短径	深さ	柱痕径
a	49	44	64	20	b	径40	—	50	18	c	45	39	47	15
d	50	32	38	18	e	径44	—	47	20	f	45	43	50	21
g	64	50	51	18	h	径50	—	50	23					

1SB020

柱穴No.	長径	短径	深さ	柱痕径	柱穴No.	長径	短径	深さ	柱痕径	柱穴No.	長径	短径	深さ	柱痕径
a	116	68	47	38	b	102	71	36	27	c	113	70	36	36
d	105	72	31	26	e	92	75	44	27	f	91	70	31	25
g	122	99	41	24	h	94	90	40	21	i	103	96	58	34
j	110	88	80	31	k	90	88	40	30	l	103	86	41	28

1SB040

柱穴No.	長径	短径	深さ	柱痕径	柱穴No.	長径	短径	深さ	柱痕径	柱穴No.	長径	短径	深さ	柱痕径
a	82	63	35	20	b	101	80	34	34	c	106	85	68	28
d	98	86	36	32	e	105	84	36	30	f	100	90	40	28
g	132	72	70	25	h	121	65	53	38	i	122	70	52	37
j	128	82	46	30	k	96	67	34	27	l	84	56	49	26
M	95	66	39	24	n	84	68	47	30					

1SB045

柱穴No.	長径	短径	深さ	柱痕径	柱穴No.	長径	短径	深さ	柱痕径	柱穴No.	長径	短径	深さ	柱痕径
a	55	50	17	26	b	85	71	39	28	c	68	59	22	26
d	84	62	30	24	e	71	56	32	27	f	55	48	17	26
g	径53	—	42	28	h	径66	—	45	38	i	72	56	35	22
j	75	70	62	28	k	63	50	40	25	l	径64	—	30	28
M	70	47	47	25	n	80	72	35	24					

1SB050

柱穴No.	長径	短径	深さ	柱痕径	柱穴No.	長径	短径	深さ	柱痕径	柱穴No.	長径	短径	深さ	柱痕径
a	89	59	40	30	b	76	70	46	26	c	74	57	63	33
d	85	63	34	19	e	径75	—	37	27	f	62	47	27	22
g	方56	—	12	21	h	78	55	48	24	i	径25	—	16	—
j	101	77	62	25										

1SB055

柱穴No.	長径	短径	深さ	柱痕径	柱穴No.	長径	短径	深さ	柱痕径	柱穴No.	長径	短径	深さ	柱痕径
a	59	48	21	24	b	59	53	34	30	c	54	49	47	28

1SB060

柱穴No.	長径	短径	深さ	柱痕径	柱穴No.	長径	短径	深さ	柱痕径	柱穴No.	長径	短径	深さ	柱痕径
a	44	40	43	—	b	73	45	50	—	c	44	40	59	—
d	径36	—	51	—	e	径19	—	10	—	f	径39	—	24	—
g	66	42	25	—	h	86	63	76	—	i	55	51	45	—
j	径36	—	40	—										

1SA065

柱穴No.	長径	短径	深さ	柱痕径	柱穴No.	長径	短径	深さ	柱痕径	柱穴No.	長径	短径	深さ	柱痕径
a	64.0	54.2	58.1	—	b	径58.5	—	60.1	—	c	55.0	50.1	64.5	—
d	44.1	40.0	46.8	—										

4) 土 坑

1SK003 (第22図、図版12)

本跡は調査区南西部、発掘区ではH29・30区に位置する。平面形は略円形を呈し、坑底は平坦である。規模は径74cm、深さ21cmを測る。

1SK007 (第22図、図版12)

本跡は調査区南東部、発掘区ではE30区に位置する。平面形は楕円形を呈し、坑底は平坦である。規模は長軸110cm、短軸70cm、深さ28cmを測る。土坑底面付近からは自然礫3点が出土した。

1SK012 (第22図、図版12)

本跡は調査区南東部、発掘区ではH30区に位置する。平面形は楕円形を呈し、坑底は平坦である。規模は長軸80cm、短軸68cm、最大深さは22cmを測る。

1SK014 (第22図、図版12)

本跡は調査区南東部、発掘区ではE32区に位置する。平面形は円形を呈し、坑底は平坦である。規模は径100cm、深さ16cmを測る。

1SK027 (第22図、図版12)

本跡は調査区南東部、発掘区ではH25区に位置する。平面形は略円形を呈し、坑底は平坦である。規模は径71cm、深さ75cmを測る。

1SK028 (第23図、図版12)

本跡は調査区南東部、発掘区ではG・H30区に位置する。1SD008と西側で重複し、本跡が古い。平面形は略円形を呈し、坑底は平坦である。規模は径66cm、深さ8cmを測る。

1SK032 (第23図、図版13)

本跡は調査区東部、発掘区ではM34区に位置する。平面形は隅丸長方形を呈し、坑底は平坦である。規模は長軸109cm、短軸70cm、深さ42cmを測る。

1SK033 (第23図、図版13)

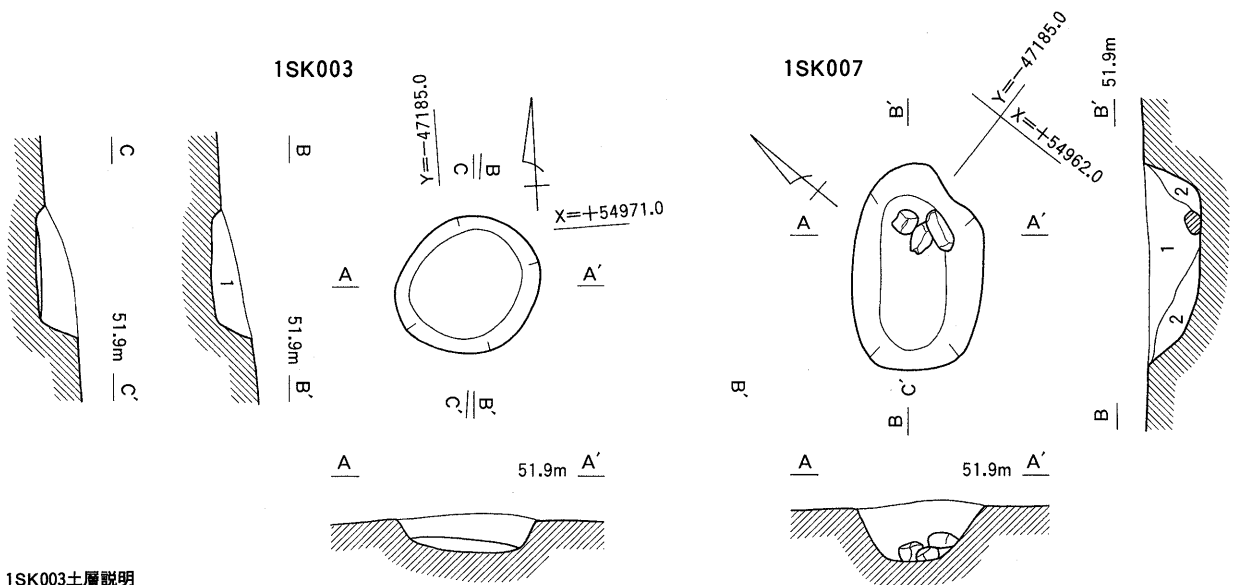
本跡は調査区南東部、発掘区ではJ33区に位置する。平面形は略円形を呈し、坑底は平坦である。規模は径89cm、深さ16cmを測る。

1SK048 (第23図、図版13)

本跡は調査区南東部、発掘区ではG32区に位置する。平面形は隅丸長方形を呈し、坑底は平坦である。規模は長軸84cm、短軸68cm、深さ11cmを測る。

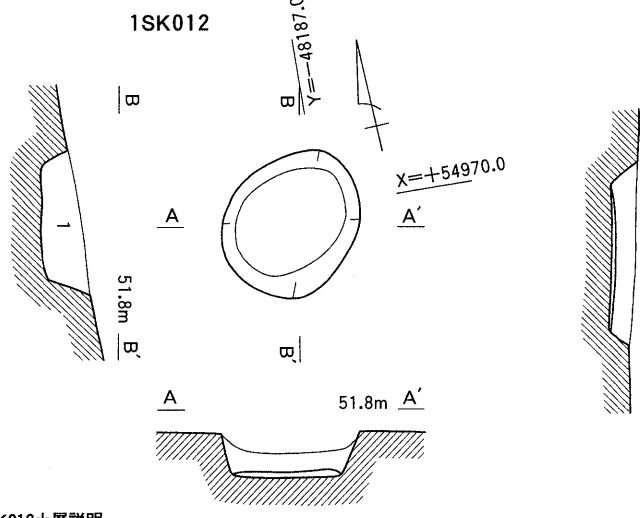
1SK059 (第23図、図版13)

本跡は調査区南東部、発掘区ではI26区に位置する。平面形は円形を呈し、坑底は平坦である。規模は径84cm、深さ11cmを測る。

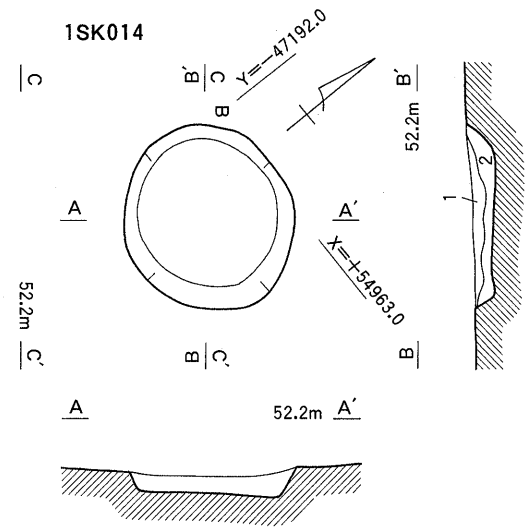


1SK003土層説明
第1層 暗褐色土 粘性弱、粘性やや有り。

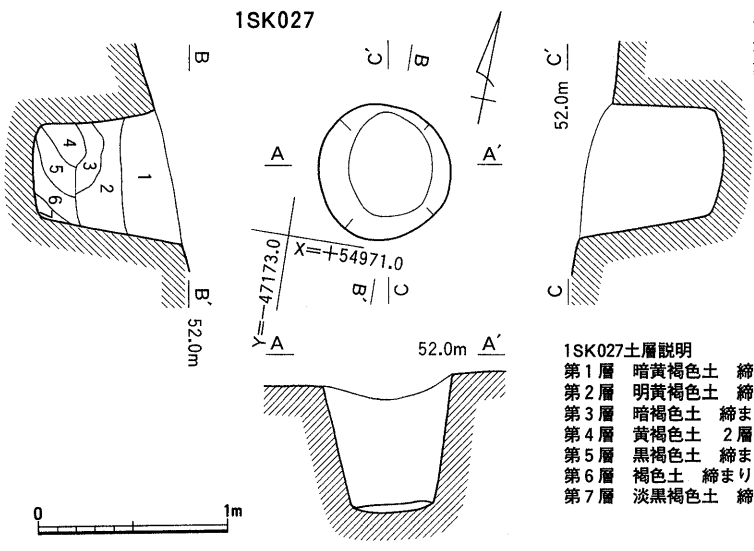
1SK007土層説明
第1層 暗褐色土 締まり・粘性弱、黒褐色土小塊を含む。
第2層 暗黄褐色土 締まり有り、花崗岩小片を含む。



1SK012土層説明
第1層 暗黄褐色土 炭化物粒子を多く含む。

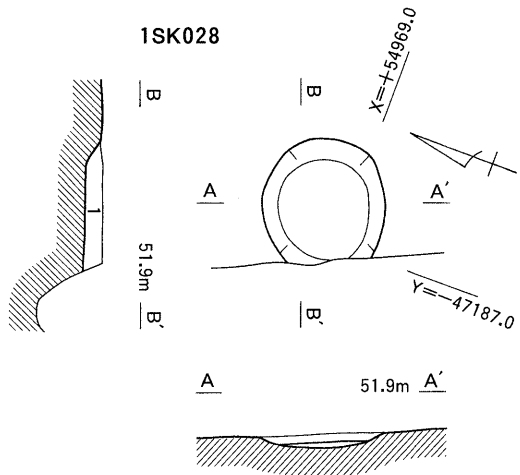


1SK014土層説明
第1層 黄褐色土 粘性締まり弱、粘性を有する。
第2層 暗黄褐色土 粘性・締まり弱、砂粒を少量含む。

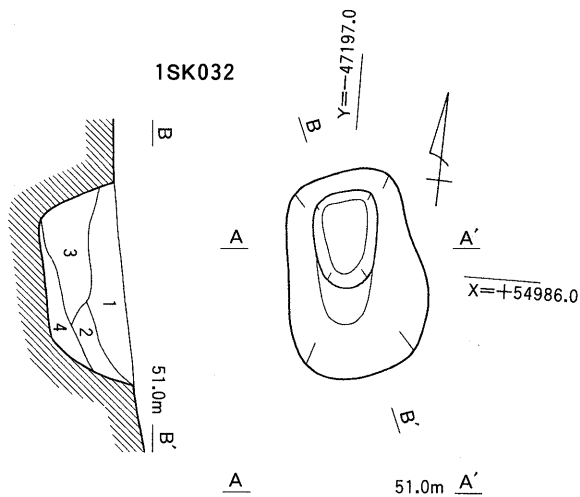


1SK027土層説明
第1層 暗黄褐色土 締まり弱、粘性やや有する。黄色土小塊を中量含む。
第2層 明黄褐色土 締まり・粘性を有する。黄色土小塊を多量に含む。
第3層 暗褐色土 締まり・粘性弱、黄色土粒子を少量含む。
第4層 黄褐色土 2層に類似するが、色調が暗い。
第5層 黒褐色土 締まりが弱く、粘性を有する。赤色粒子を微量含む。
第6層 褐色土 締まり・粘性をやや有する。黄色土小塊を少量含む。
第7層 淡黒褐色土 締まり・粘性弱。砂粒を少量含む。

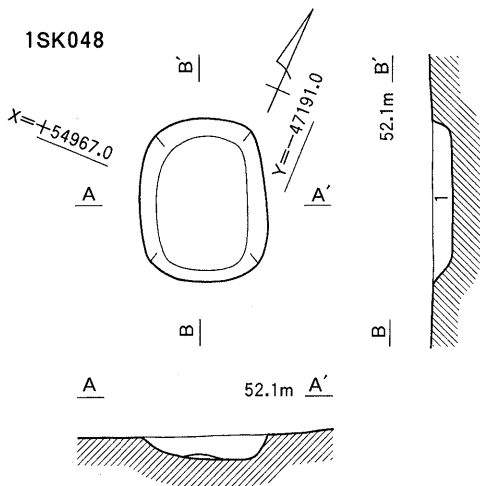
第22図 1SK003・007・012・014・027実測図 (1/40)



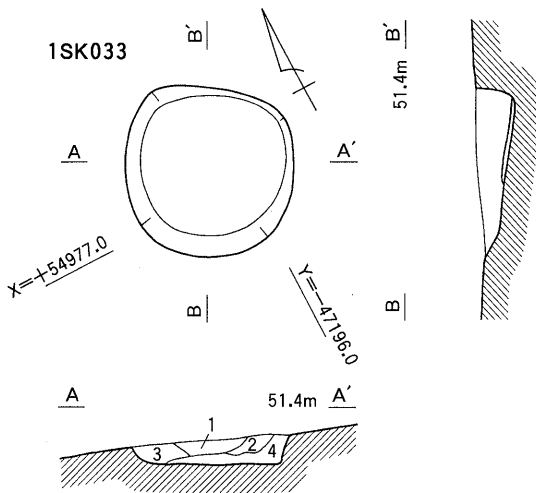
1SK028土層説明
第1層 黒褐色土 締まり弱、粘性をやや有し、砂礫・炭化物を含む。



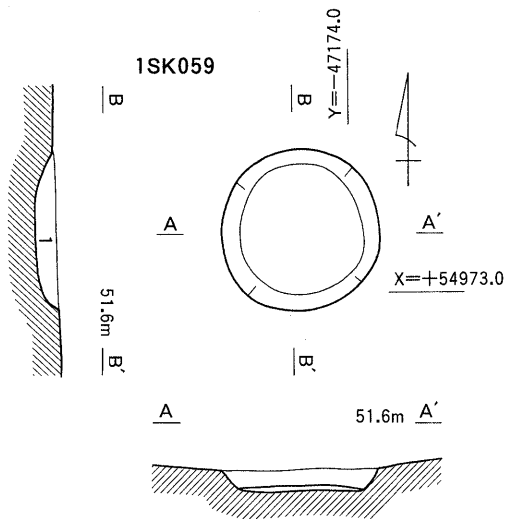
1SK032土層説明
第1層 明黄褐色土 締まり弱、粘性を有する。
第2層 黄褐色土 締まりを有し、粘性弱。
第3層 暗黄褐色土 締まりを有し、粘性弱、炭化物を微量含む。
第4層 暗褐色砂 締まり・粘性弱、暗黄褐色土小塊を含む。



1SK048土層説明
第1層 暗灰褐色土 締まり弱、粘性を有する。黄灰色土小塊を含む。



1SK033土層説明
第1層 暗灰褐色土 締まり弱、粘性を有する。黄灰色土小塊を含む。
第2層 暗黄褐色土 締まり・粘性を有する。
第3層 暗褐色土 締まり弱、粘性をやや有する。
第4層 黄褐色土 締まり・粘性を有する。砂粒を少量含む。



1SK059土層説明
第1層 暗黄褐色土 締まり・粘性をやや有する。花崗岩破片を少量含む。



第23図 1SK028・032・033・048・059実測図 (1/40)

1SK071 (第24図、図版13)

本跡は調査区西部、発掘区ではO17区に位置する。平面形は北西部がやや張る隅丸長方形を呈し、規模は長軸130cm、短軸73cm、深さ28cmを測る。また壁際では石が配石状に検出されたことから石棺墓を想定して調査を行った。土坑底面は木痕跡と考えられる攪乱を受けており、凹凸が激しい。ここでは土坑として取り扱っているが、覆土の脂肪酸分析の結果では、遺体埋納を示唆する値が示されており、本跡は石棺墓である可能性が指摘される。

1SK072 (第24図)

本跡は調査区北東部、発掘区ではQ15区に位置する。平面形は不整形を呈し、坑底部や南壁は根攪乱により乱れている。規模は方100cm、深さ31cmを測る。

1SK073 (第24図)

本跡は調査区北東部、発掘区ではQ16区に位置する。平面形は隅丸方形を呈し、底面は木痕跡の影響を受け凹凸が激しい。規模は長軸103cm、短軸89cm、深さ31cmを測る。

1SK096 (第24図、図版13)

本跡は調査区中央部、発掘区ではL・M23・24区に位置する。平面形は隅丸長方形を呈し、坑底は平坦である。規模は長軸151cm、短軸107cm、深さ11cmを測る。土坑底面付近より礫が数点検出されている。

1SK118 (第25図、図版14)

本跡は調査区北西部、発掘区ではP28区に位置し、平面形は不整楕円形を呈する。坑底は挿鉢状で、底面北側にはやや浅い窪みがある。規模は長軸107cm、短軸94cm、深さ54cmを測る。

1SK123 (第25図、図版14)

本跡は調査区北西部、発掘区ではU31区に位置し、北側約 $\frac{1}{4}$ は調査区外となる。平面形は不整楕円形を呈するが、底面は木痕による攪乱のため部分的に抉られている。検出された範囲での規模は長軸114cm、短軸84cm、深さ75cmを測る。

1SK124 (第25図、図版14)

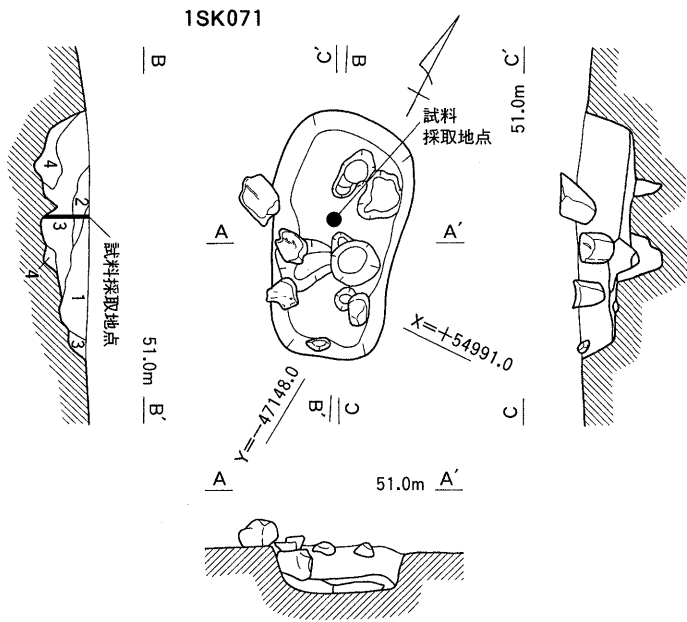
本跡は調査区北西部、発掘区ではT32区に位置し、平面形は楕円形を呈する。坑底は平坦であるが、東部が深い段状を呈する。規模は長軸152cm、短軸79cm、深さは西部が53cm、東部が66cmである。

1SK128 (第25図、図版15)

本跡は調査区北西部、発掘区ではS・T33・34区に位置する。平面形は隅丸長方形を呈し、坑底は平坦である。規模は長軸142cm、短軸129cm、深さは21cmを測る。底面では根攪乱と思われるピットが2基検出された。

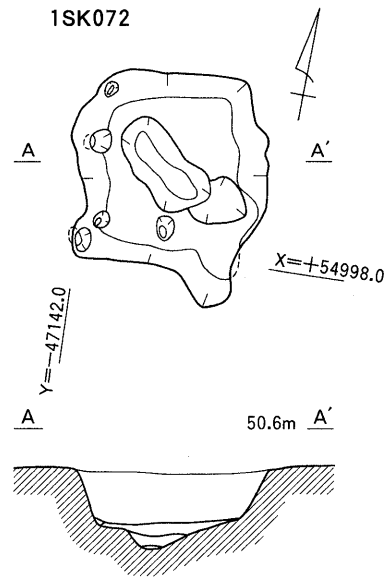
1SK134 (第26図、図版15)

本跡は調査区北部やや中央寄り、発掘区ではQ25区に位置する。平面形は隅丸長方形を呈し、坑底は平坦である。規模は長軸71cm、短軸54cm、深さ34cmを測る。



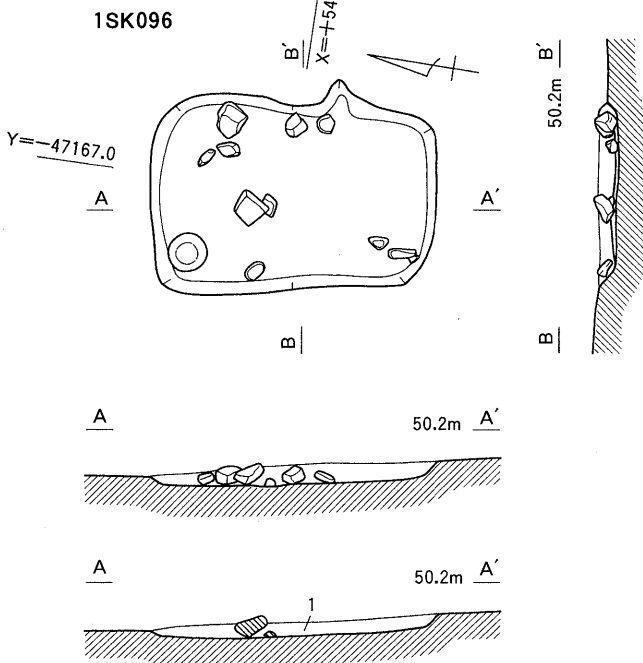
1SK071土層説明

- 第1層 暗黄灰色土 締まり弱く、粘性やや有り、黄灰色土小塊を多く含む。
- 第2層 暗黒灰色土 締まり弱く、粘性有り。炭化物粒子を多く含む。
- 第3層 淡青灰色土 締まり強、粘性有り。炭化物粒子を少量含む。
- 第4層 暗黄褐色土 締まり弱、粘性有り。炭化物を微量含む。



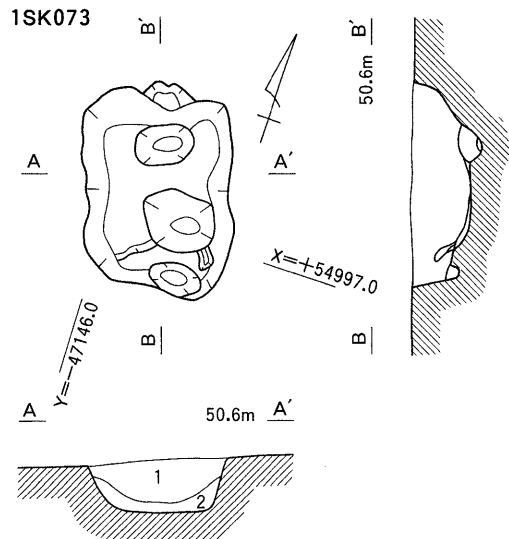
1SK072土層説明

- 第1層 暗黄褐色土 締まり・粘性を有し、炭化物を微量含む。
- 第2層 暗黄色土 締まり弱、粘性やや有り、黄色土小塊・炭化物粒子を少量含む。



1SK096土層説明

- 第1層 暗褐色土 締まり弱、粘性を有する。黄褐色小塊を含む。



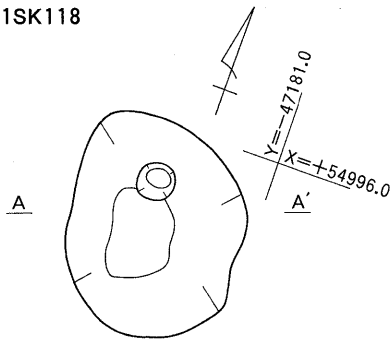
1SK073土層説明

- 第1層 暗黄褐色土 締まり・粘性を有する。
- 第2層 暗黄色土 締まり弱、粘性やや有する。

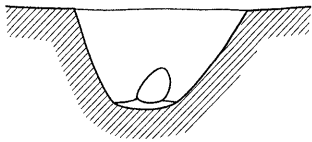


第24図 1SK071・072・073・096実測図 (1/40)

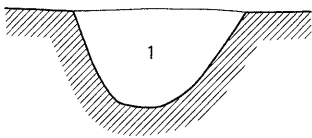
1SK118



A 51.0m A'



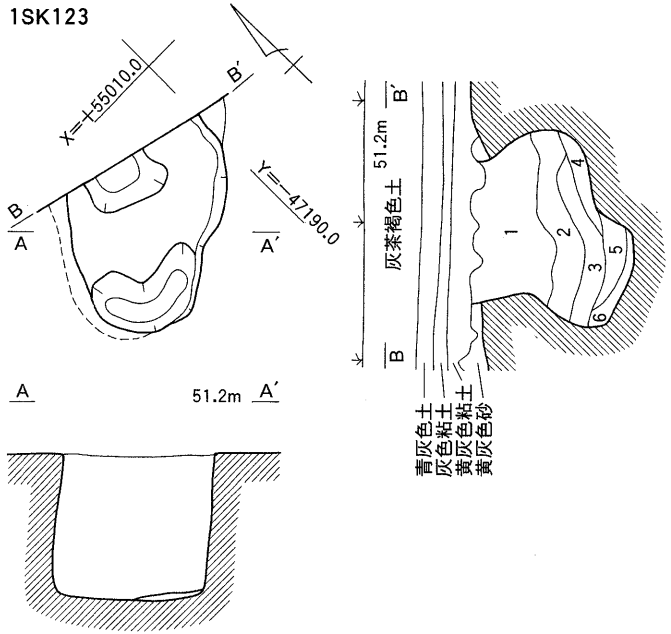
A 51.0m A'



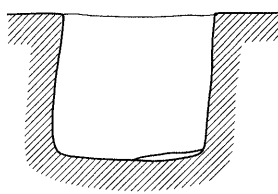
1SK118土層説明

第1層 黄褐色土 締まり・粘性弱。

1SK123



A 51.2m A'



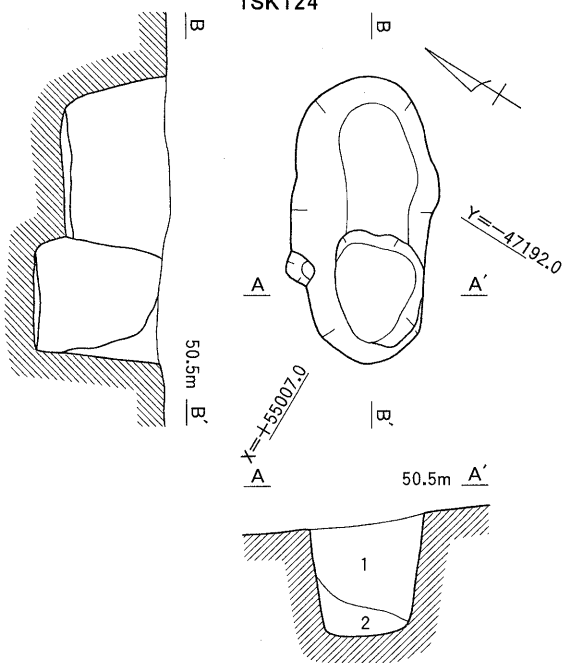
1SK123土層説明

- 第1層 明黄褐色土 締まり・粘性を有する。
- 第2層 暗褐色土 締まり弱、粘性を有する。
- 第3層 黄褐色土 締まり弱、粘性をやや有する。
- 第4層 黑褐色土 締まりを有し、粘性は弱、砂粒を含む。
- 第5層 暗黄褐色砂 締まり・粘性弱、黄褐色土小塊を含む。
- 第6層 暗灰色砂 締まり・粘性弱、暗褐色土粒子を少量含む。

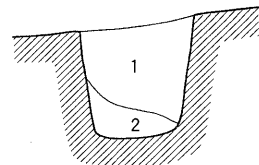
1SK124土層説明

第1層 黄褐色土 締まり・粘性弱。

1SK124



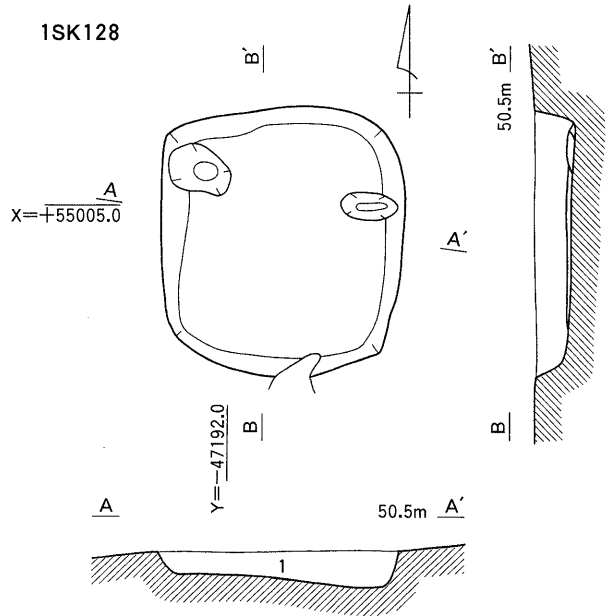
A 50.5m A'



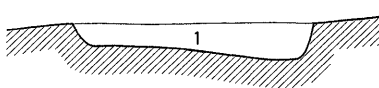
1SK124土層説明

- 第1層 明黄褐色土 締まり弱、粘性やや有り。
- 第2層 黄褐色土 締まり・粘性弱。砂粒を少量含む。

1SK128

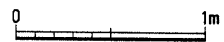


A 50.5m A'



1SK128土層説明

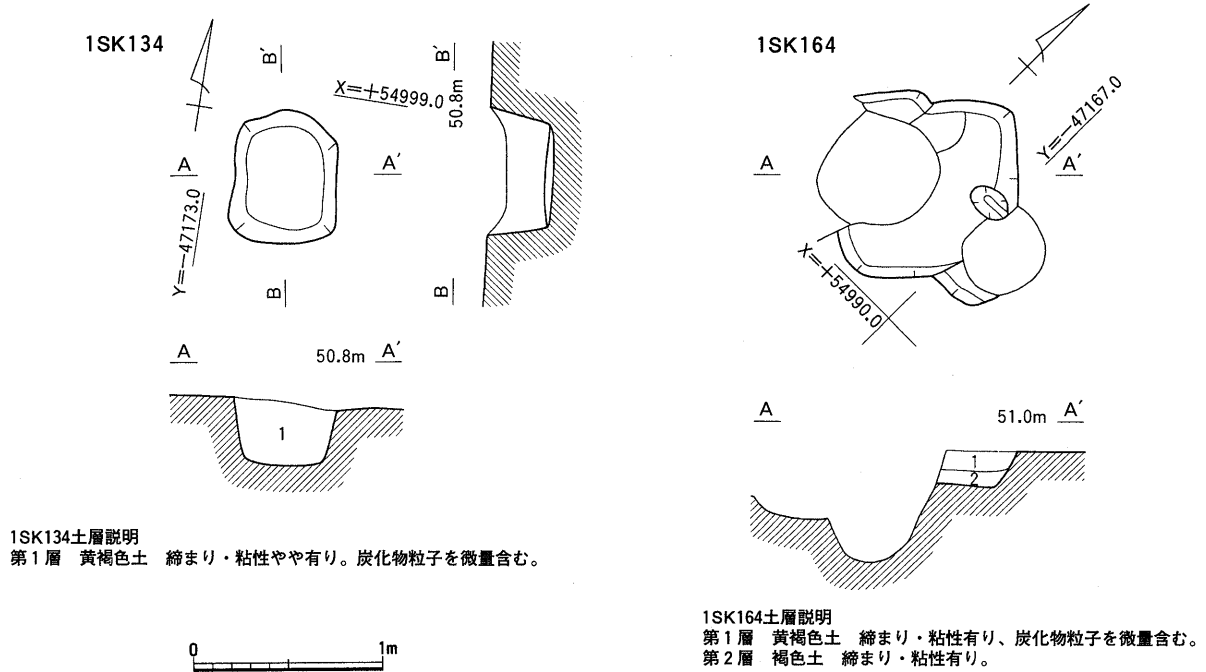
第1層 暗黄褐色土 締まり弱、粘性やや有り。



第25図 1SK118・123・124・128実測図 (1/40)

1SK164 (第26図、図版15)

本跡は調査区中央部、発掘区ではO24区に位置する。1SA065・ピットと重複し、本跡が古い。平面形は方形を呈するものと推定され、坑底は検出された範囲では平坦である。規模は方90cm、深さ18cmを測る。



第26図 1SK134・164実測図 (1/40)

5) 溝

1SD008 (第27図、図版16)

本跡は調査区南西部、発掘区ではE・H29～31区に位置する。ややS字状に屈曲する南北方向の溝で、底面の高低差では北側が低い。G30区では1SD016と重複し、本跡が新しい。規模は総延長12.5m、幅25～100cm、深さ21～26cmを測る。

1SD009 (第27図、図版16)

本跡は調査区南西部から北東部、発掘区ではG～Q25～34区に位置する。南西から南東方向に流れるが1SI001の東側で二俣(9A・B)に分かれる。覆土では、概ね上層に粘土あるいは粘質土が堆積し、以下は褐色砂等がラミナ状に堆積し、底面には凹凸がある。壁際には酸化鉄が濃集していることから、本跡の機能時には流水していたことが考えられる。現代の側溝とほぼ同じ方向であることから、水田化以降(近世以降)のものと考えられる。5つの遺構(1SI015・1SI030・1SB040・1SD013・1SD037)と重複し、1SD037以外では本跡が新しい。なお、1SD037との新旧については本跡と1SD037が重なる部分が攪乱されているため不明だが、配置から見れば、両方の溝は同時期に機能していた可能性が高い。規模は9Aが総延長38m、幅34～280cm、深さ18～45cm、9Bが総延長10.4m、幅25～90cm、深さ23～35cmを測る。

1SD013 (第27図)

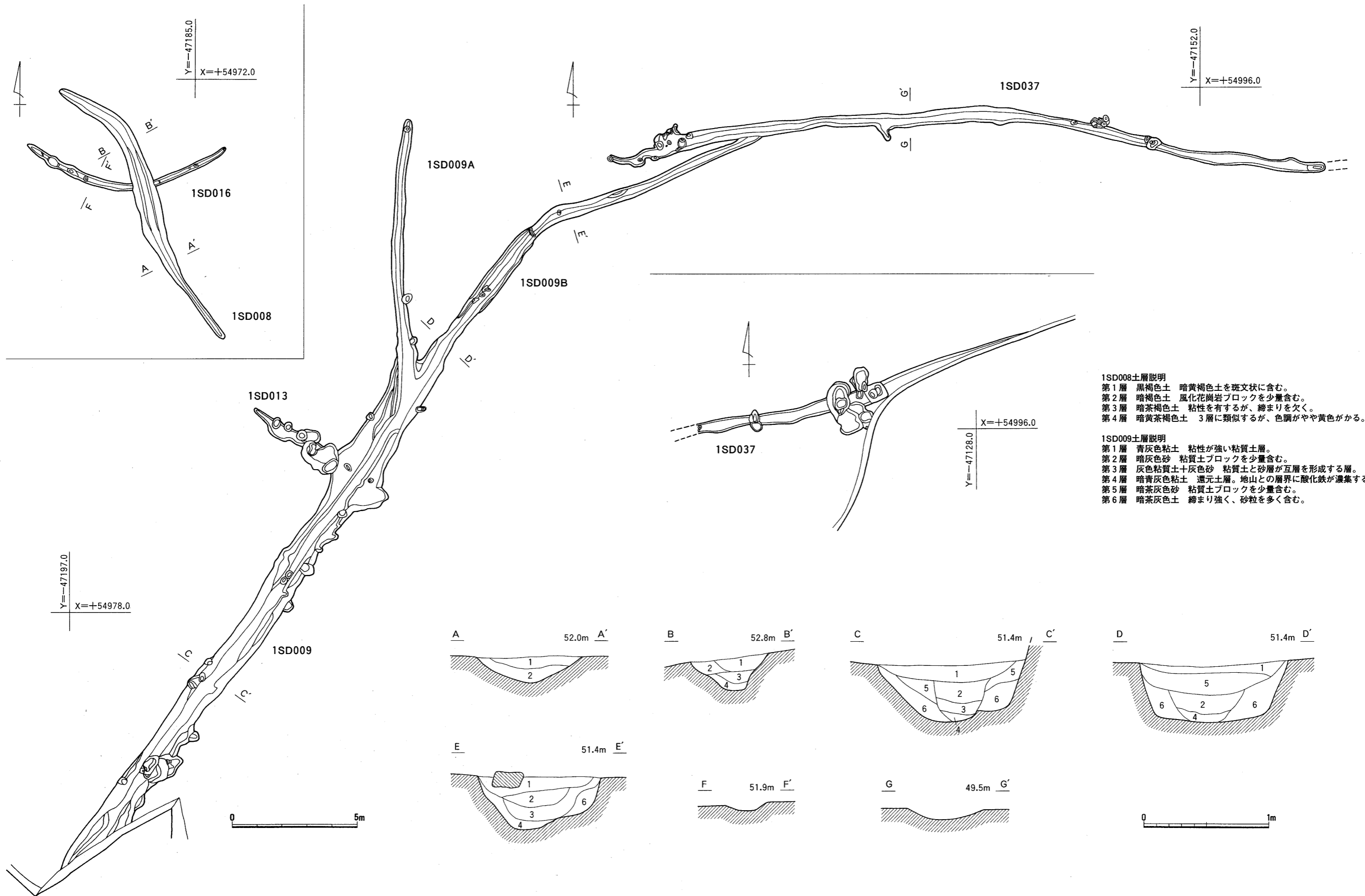
本跡は調査区西部、発掘区ではM30・31区に位置する。3つの遺構(1SI015・1SI030・1SD009)と重複し、1SI015・1SI030より新しく、1SD009より古い。底面は酸化鉄が濃集し、硬化している。規模は総延長3.5m、幅18～63cm、深さ2～16cmを測る。

1SD016 (第27図、図版16)

本跡は調査区南西部、発掘区ではG・H29・32区に位置する。1SD008と重複し、本跡が古い。規模は総延長10.7m、幅10～50cm、深さ0.5～6cmを測る。

1SD037 (第27図)

本跡は調査区北東部から北西部、発掘区ではP・Q10～26区に位置し、1SD009と重複し、本跡が新しい。P14～18区では部分的に消滅しており、全体的に深さも浅い。規模は総延長49.8m、幅30～80cm、深さ2～5cmを測る。



1SD008土層説明
 第1層 黒褐色土 暗黄褐色土を斑文状に含む。
 第2層 暗褐色土 風化花崗岩ブロックを少量含む。
 第3層 暗茶褐色土 粘性を有するが、締まりを欠く。
 第4層 暗黄茶褐色土 3層に類似するが、色調がやや黄色がる。

1SD009土層説明
 第1層 青灰色粘土 粘性が強い粘質土層。
 第2層 暗灰色砂 粘質土ブロックを少量含む。
 第3層 灰色粘質土+灰色砂 粘質土と砂層が互層を形成する層。
 第4層 暗青灰色粘土 還元土層。地山との層界に酸化鉄が濃集する。
 第5層 暗茶灰色砂 粘質土ブロックを少量含む。
 第6層 暗茶灰色土 締まり強く、砂粒を多く含む。

第27図 1SD008・009・013・016・037実測図 (平面図 1/150・断面図 1/30)

6) 陥し穴

1SK006 (第28図、図版17)

本跡は調査区南西端、発掘区ではC・D31区に位置する。平面形は北側が突出する方形を呈し、規模は長軸132cm、短軸80cm、深さ92cmを測る。覆土は黄褐色土を主体に堆積しており、土坑の形状では底部施設の無い陥し穴の形態をとる。

1SK021 (第28図、図版17)

本跡は調査区中央西部、発掘区ではO34区に位置する。平面形は楕円形を呈し、底面にはピットが1基穿たれている。規模は土坑が長軸133cm、短軸85cm、深さ22cm、ピットは径12cm、深さ12cmを測る。陥し穴と考えられる。出土遺物は黒曜石の剥片が1点出土している。

1SK063 (第28図、図版17)

本跡は調査区北東部、発掘区ではR12区に位置する。平面形は隅丸長方形を呈し、底面中央部には楕円形状のピットが3基認められる。規模は土坑が長軸155cm、短軸84cm、深さ51cm、ピットは径20~26cm、深さ12~20cmを測る。

1SK101 (第29図、図版17)

本跡は調査区中央北部、発掘区ではR22区に位置する。平面形は楕円形を呈し、底面中央には楕円形ピットが1基穿たれている。壁面はオーバーハングしているが地山が砂層であるため内側に崩落したものと考えられる。規模は土坑が長軸118cm、短軸110cm、深さ88cm、ピットは32×23cm、深さ44cmを測る。

1SK131 (第29図、図版17)

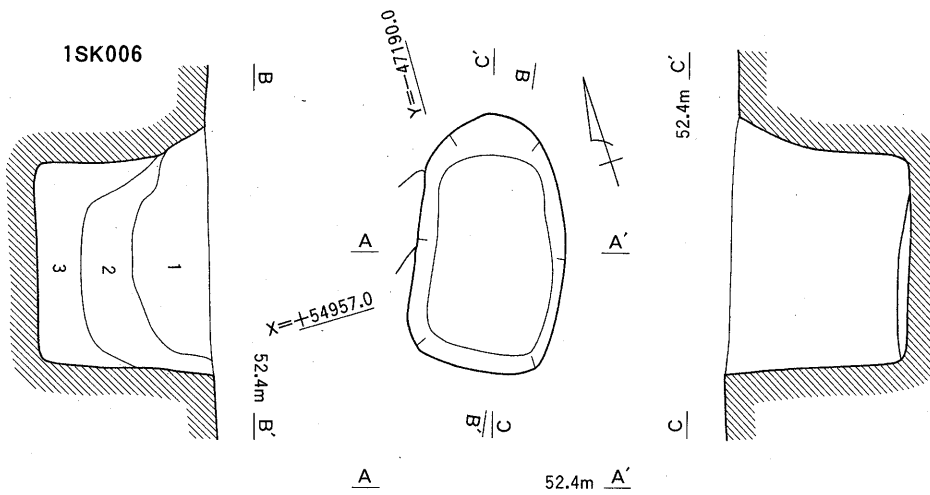
本跡は調査区北西部、発掘区ではQ31・32区に位置する。平面形は隅丸長方形を呈し、底面やや北西寄りにピットが1基穿たれる。規模は土坑が長軸168cm、短軸68cm、深さ64cm、ピットは32×21cm、深さ26cmを測る。

1SK144 (第29図)

本跡は調査区北部やや西寄り、発掘区ではS26区に位置する。平面形は楕円形を呈し、底面やや南西寄りにピットが1基穿たれる。規模は土坑が長軸144cm、短軸112cm、深さ72cm、ピットは径36cm、深さ38cmを測る。

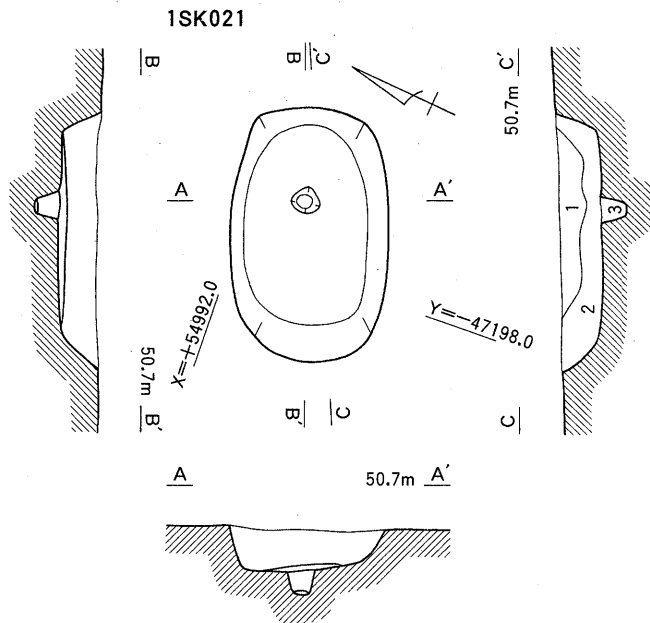
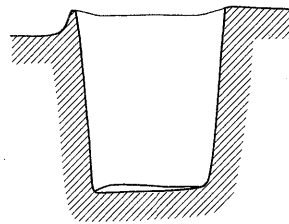
1SK163 (第30図、図版17)

本跡は調査区中央部、発掘区ではM23区に位置する。平面形は隅丸方形を呈し、底面には9基の小ピットが検出された。その内の5基は中央部にまとめられており、さらに外側には円形の掘り方が検出されている。他の4基についてはいずれも杭を直接打ち込んだ痕跡と思われるピットである。規模は土坑が、長軸104cm、短軸84cm、深さ65cmである。ピットの規模は中央部の5基が径8~9cm、深さ47~50cm、外周の掘り方が径28cm、深さ55cm、その他の打ち込みピットは径8~10cm、深さ7~9cmを測る。



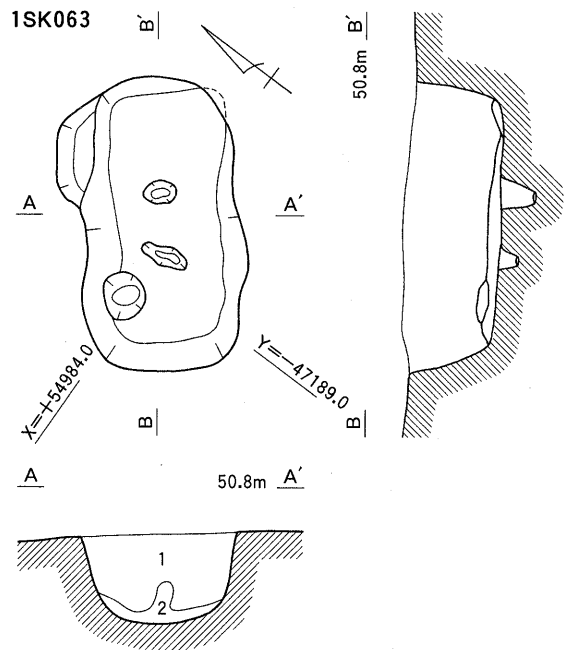
1SK006土層説明

- 第1層 黄褐色土 締まり弱、粘性を有し、花崗岩細片を少量含む。
- 第2層 暗黄褐色土 締まり・粘性やや有り、花崗岩細片を微量含む。
- 第3層 暗黄茶褐色土 締まり・粘性やや有り。花崗岩細片を極微量含む。



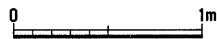
1SK021土層説明

- 第1層 黄褐色土 締まり弱、粘性を有する。
- 第2層 暗黄褐色土 締まり・粘性弱、砂粒を少量含む。
- 第3層 黄褐色砂 締まり弱、砂粒を中量含む。



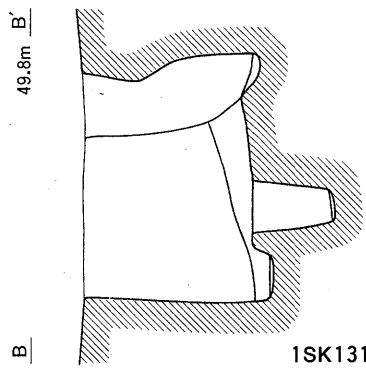
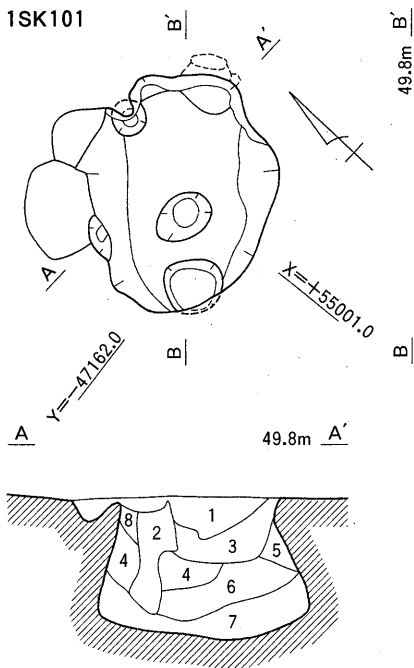
1SK063土層説明

- 第1層 灰白色粘土 締まり弱、粘性有り、花崗岩片を少量含む。
- 第2層 暗褐色土 締まり弱、粘性やや有り、花崗岩片を微量含む。

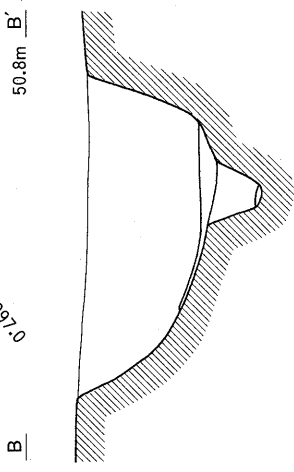
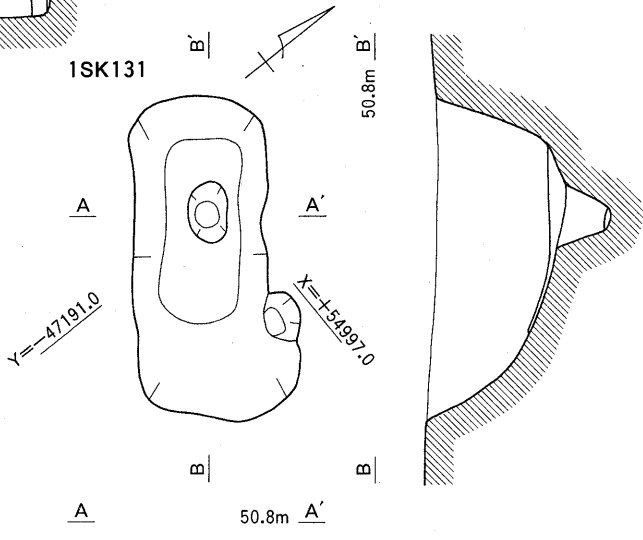


第28図 1SK006・021・063実測図 (1/40)

1SK101



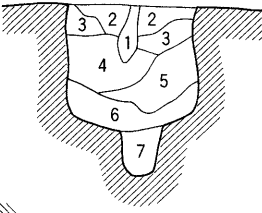
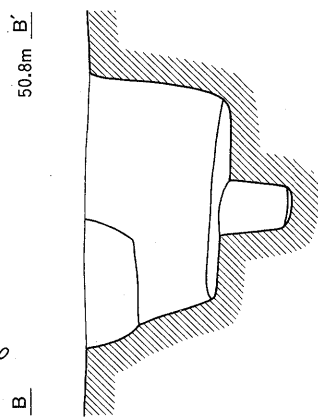
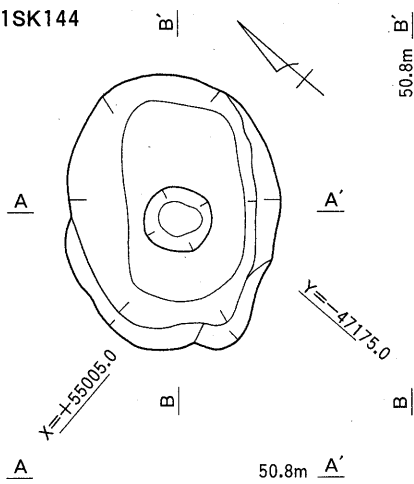
1SK131



1SK101土層説明

- 第1層 黄褐色土 締まり・粘性を有する。
- 第2層 青黄灰色土 締まり弱、粘性を有する。
- 第3層 暗黄色土 締まり弱、粘性を有する。
- 第4層 明黄褐色土 締まり・粘性やや有り。
- 第5層 暗黄色土 締まり・粘性弱。
- 第6層 明黄灰色土 締まり弱、粘性を有する。
- 第7層 黄灰色土 締まり弱、粘性を有する。

1SK144

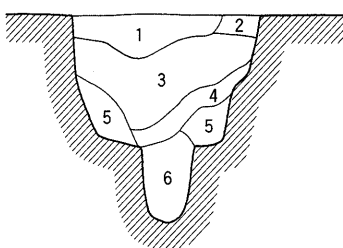


1SK131土層説明

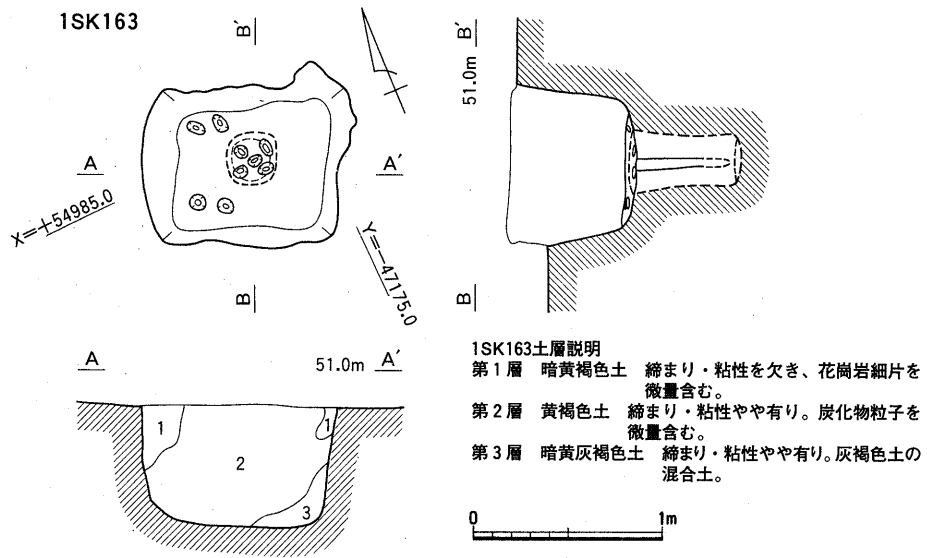
- 第1層 茶褐色土 酸化鉄が濃集した層。
- 第2層 黄褐色土 締まり弱、粘性をやや有する。
- 第3層 暗褐色土 締まり・粘性を有する。
- 第4層 暗茶褐色土 締まり・粘性弱。砂粒を少量含む。
- 第5層 茶色土 締まり弱、粘性をやや有する。
- 第6層 茶灰色土 4層に類似するが、色調が明るい。
- 第7層 暗黄灰色土 締まり・粘性弱。砂粒を中量含む。

1SK144土層説明

- 第1層 黄褐色土 締まりやや有し、粘性弱。
- 第2層 暗黄褐色土 締まりやや有し、粘性弱。暗褐色土粒子を少量含む。
- 第3層 明黄褐色土 締まり・粘性を有する。
- 第4層 暗黄色土 締まり弱、粘性を有する。
- 第5層 黒褐色土 締まり有し、粘性弱。少量の黄色土小塊と砂粒を含む。
- 第6層 暗褐色土 締まり・粘性弱。少量の黄色土小塊と砂粒を含む。



第29図 1SK101・131・144実測図 (1/40)



第30図 1SK163実測図 (1/40)

7) トレンチ調査

トレンチ調査は縄文時代の遺物包含層の存否と旧地形復元を目的として行われた。

1 トレンチ (第31・32図、図版18)

調査区南西部、発掘区ではC～H28・29区に設定した。深さ約20～60cmまで掘り下げ、暗黄褐色土層中より縄文土器が2点出土したが、縄文時代の遺物包含層は確認されなかった。

2 トレンチ (第31・32図、図版18)

調査区南西部、発掘区ではF～H25・26区に設定した。深さ50cm前後まで掘り下げたが、遺物は出土せず、縄文時代の遺物包含層は確認されなかった。

3 トレンチ (第31・32図、図版19・20)

調査区東部、発掘区ではO～Q12～15区に設定した。遺物は出土しなかったが、調査区際付近の深掘り1では、古代の遺構確認面下80cm前後で干裂状地形が検出された。当トレンチで検出された干裂状地形の構成面は硬く締まっている。

4 トレンチ (第31・32図、図版19・20)

調査区東部、発掘区ではL～S14～20区に設定した。遺物は出土しなかったが、調査区際付近の深掘り1とO・P16区に位置する深掘り2において古代の遺構確認面下70cm前後で干裂状地形が検出された。深掘り1・2共に干裂状地形の構成面は硬化が著しいが、深掘り2ではやや軟質である。

5 トレンチ (第31・33図、図版19～22)

調査区中央、発掘区ではK～R21区に設定した。北端部(R21区)では黄褐色土中より黒曜石のチップ類が数点出土している。なお、5トレンチでは南・北端、8トレンチとの接合部において深掘りを設定掘削したが、干裂状地形は確認されなかった。また、南北端の深掘りでは深さ1m以下からシルト土と砂層が互層となる沖積地形の特徴的な土層堆積状況が観察された。

6 トレンチ (第31・33図、図版19・22)

調査区中央、発掘区ではK～S24区に設定した。北端部(R・S25区)では黄褐色土中より黒曜石のチップ類が数点出土している。なお、6トレンチにおいても深掘り部では干裂状地形は確認されなかった。また、各深掘り地点は深さ1m以下からシルト土と砂層が互層となる沖積地形の特徴的な土層堆積状況が観察された。

7 トレンチ (第31・33図、図版23)

調査区西部、発掘区ではR・S28・29区に設定した。出土遺物は皆無であり、古代の遺構確認面直下から、シルト土と砂層が互層となる沖積地形の特徴的な土層堆積状況が観察された。

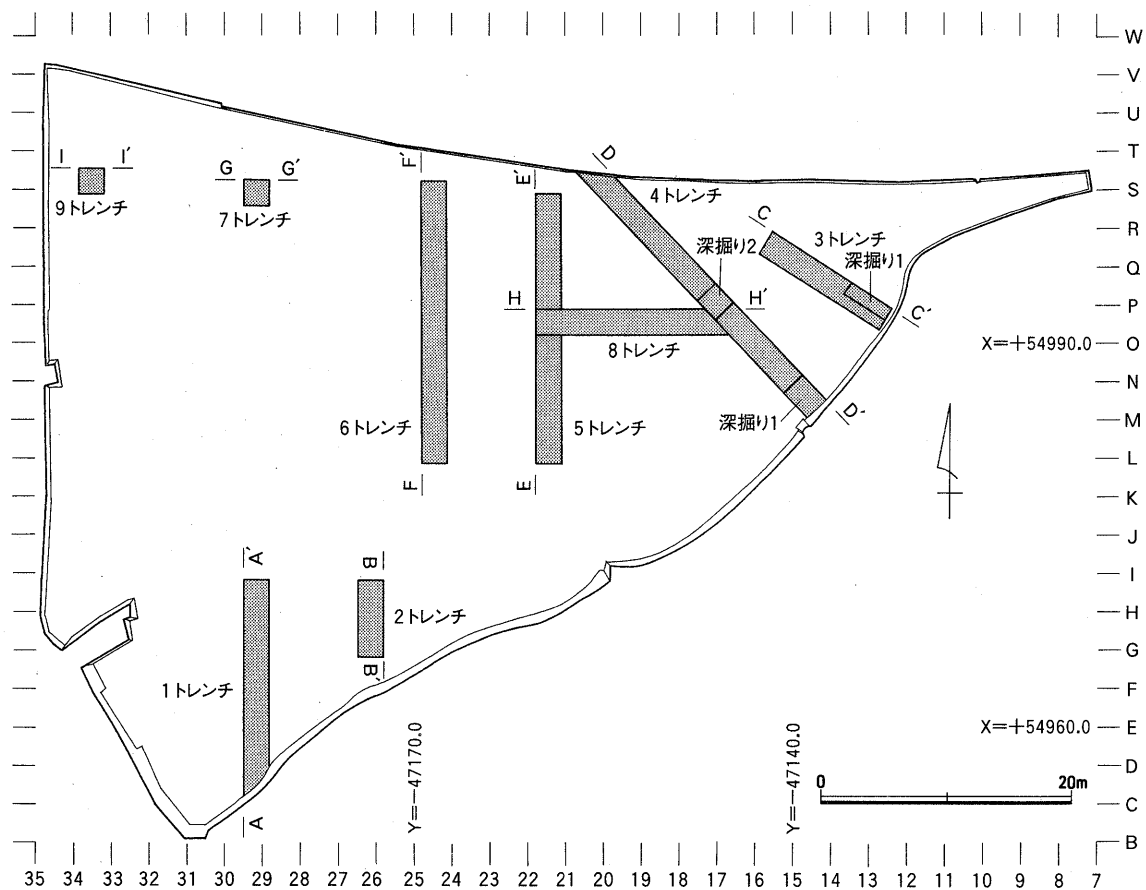
8 トレンチ (第31・33図、図版19・24)

調査区中央部やや東寄り、発掘区ではO15～21区に位置する。4トレンチ深掘り2で干裂状地形が検出されたことから、同地形の東西方向への分布状況を確認する上で、5トレンチに連結する形で設定し

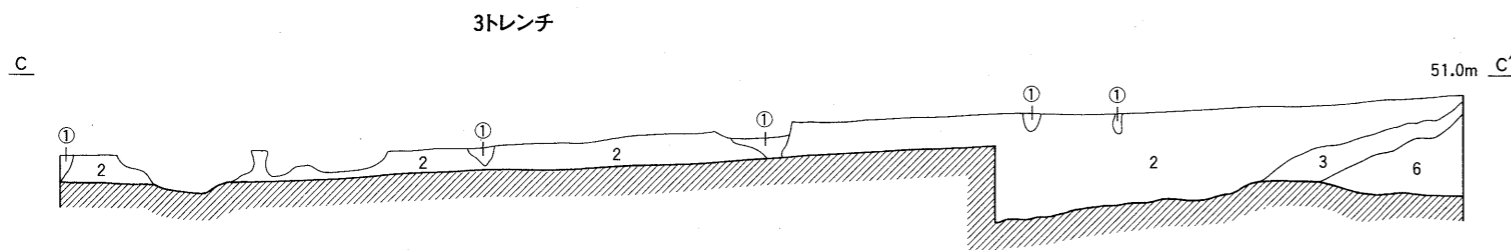
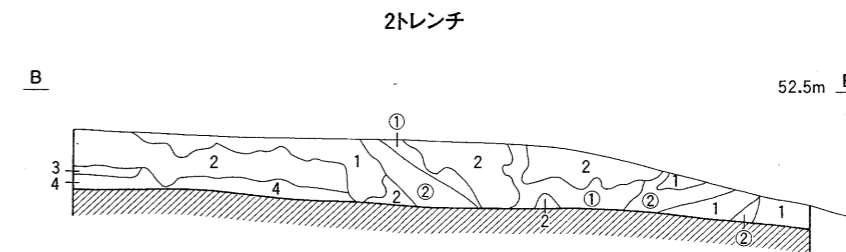
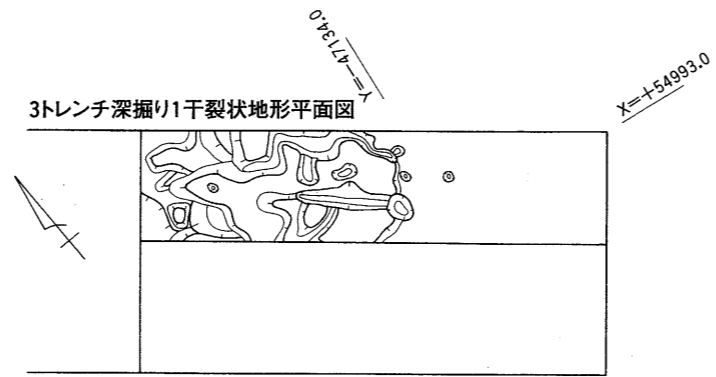
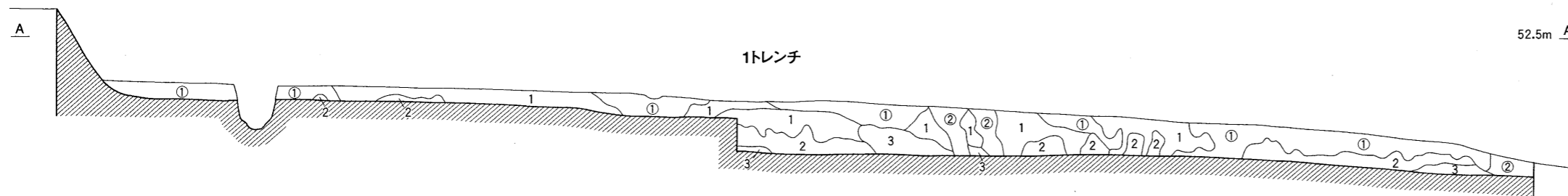
た。遺物は出土しなかったが、O16~18区では古代の遺構確認面下80cm前後で干裂状地形が検出されている。ただし、本トレンチで検出された干裂状地形は干裂の形成が甘く、構成面も軟質で、西方に向かうに従い、暫移的に消滅して行く。

9 トレンチ (第31・33図、図版23)

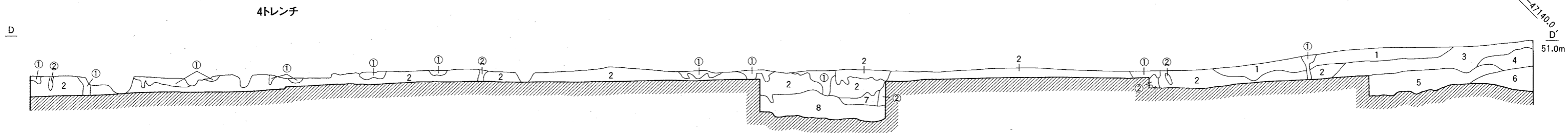
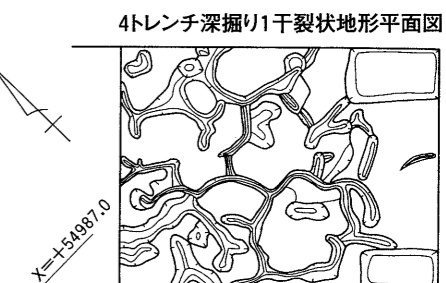
調査区西部、発掘区ではR・S32区に設定した。出土遺物は皆無であり、古代の遺構確認面直下から、シルト土と砂層が互層となる沖積地形の特徴的な土層堆積状況が観察された。



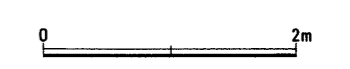
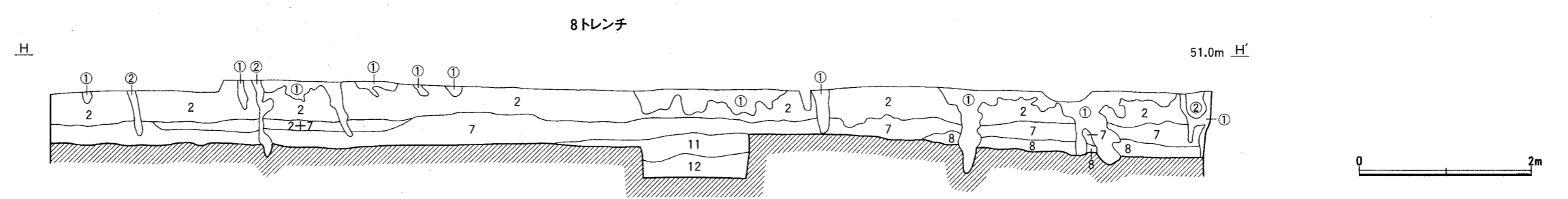
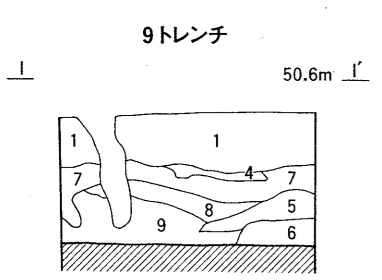
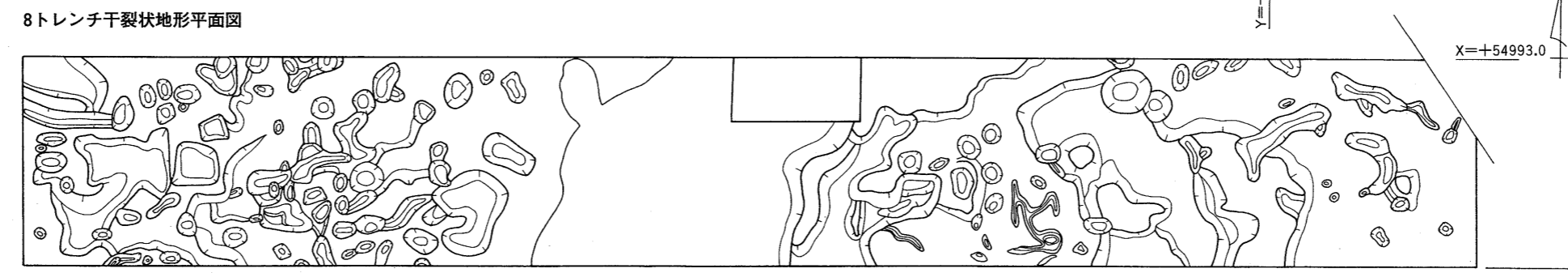
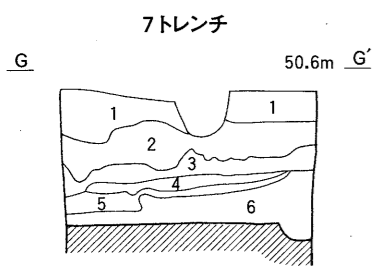
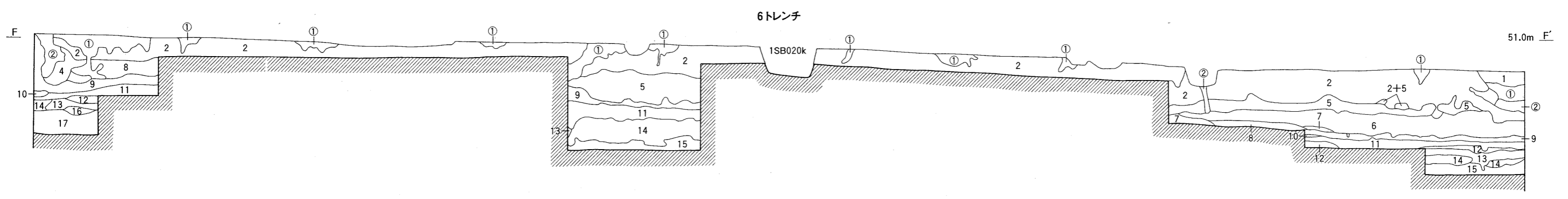
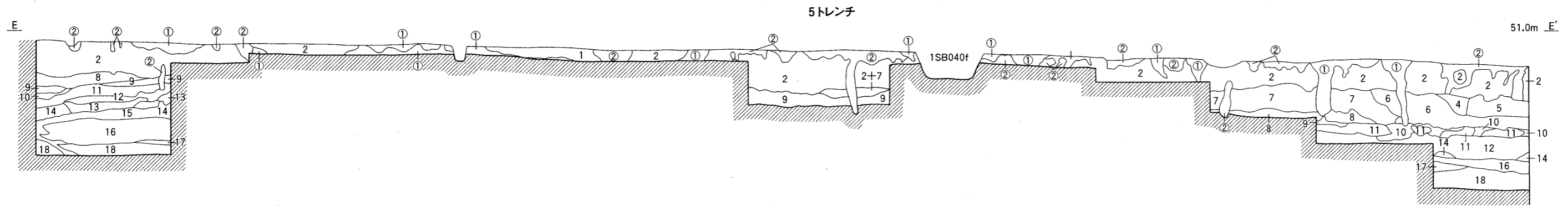
第31図 長ヶ坪遺跡第1次調査トレンチ配置図 (1/600)



- トレンチ土層説明
- ①層 黄褐色土 締まり・粘性やや有り。(植物攪乱)
 - ②層 暗褐色土 締まり弱・粘性やや有り。(植物攪乱)
 - 第1層 黒灰色土 締まり・粘性やや有り。黄褐色土ブロックを少量、風化花崗岩粒子を中量含む。
 - 第2層 黒褐色土 締まり・粘性やや有り。黄褐色土ブロックを微量、風化花崗岩粒子を多量含む。
 - 第3層 黒褐灰色土 締まり・粘性弱。黄褐色土ブロックを中量、風化花崗岩粒子を少量含む。
 - 第4層 褐灰色土 締まり・粘性有り。黄褐色土ブロック・風化花崗岩粒子を少量含む。
 - 第5層 暗黒褐色土 2層に類似するが、風化花崗岩粒子が増加する。
 - 第6層 茶灰褐色土 締まり・粘性強。粘土主体層。
 - 第7層 暗褐灰色土 締まり・粘性弱。黄褐色土ブロックを微量、風化花崗岩粒子を少量含む砂質シルト層。
 - 第8層 暗青灰色土 7層に類似するが、粒子が細かい。
 - 第9層 明灰褐色土 締まり・粘性強。硬化が著しい層。(干裂状地形構成面)
 - 第10層 明褐色砂 締まり・粘性欠く。粒子の粗い砂層。
 - 第11層 黒褐色砂 締まり・粘性欠く。10層に類似するが、色調が暗い。
 - 第12層 明褐灰色砂 締まり・粘性欠く。粒子が粗く、小礫を中量含む。
 - 第13層 明褐灰白色砂 締まり・粘性欠く。粒子が細かい。
 - 第14層 暗褐灰白色砂 13層に類似するが、酸化が目立つ。
 - 第15層 明褐灰白色土 砂質シルト層。
 - 第16層 茶褐灰色砂 締まり・粘性欠く。粒子が粗い砂礫層。
 - 第17層 明青灰色土 締まり弱・粘性有り。還元化している。
 - 第18層 暗茶褐灰色土 締まり・粘性欠く。粒子の粗い砂層。



第32図 長ヶ坪遺跡第1次調査1～4トレンチ断面図及び3・4トレンチ干裂状地形平面図 (1/60)



第33図 長ヶ坪遺跡第1次調査5～9トレンチ断面図及び8トレンチ干裂状地形平面図 (1/60)

2. 遺物

1) 竪穴住居跡出土遺物

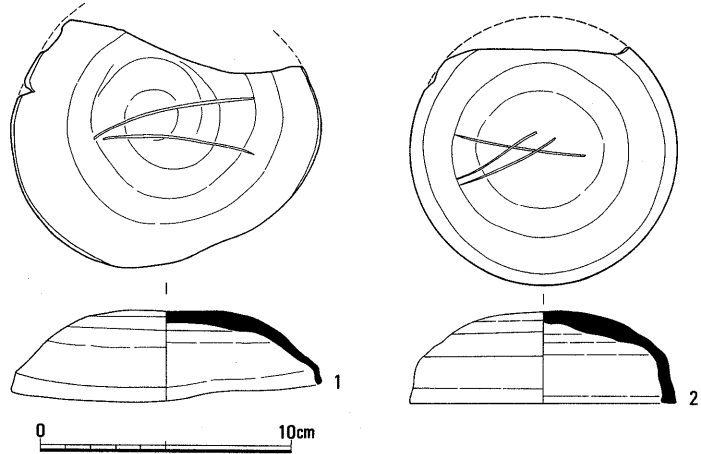
1SI001暗黄褐色土出土遺物 (第34図、図版25)

須恵器

坏蓋 (1) 口径12.2cm、器高3.6cmを測る。器形は天井部がやや丸みを帯び、裾部は緩やかに弧状を呈し、口唇部で直立気味になるが、歪みが著しい。外面調整は回転ナデ成形を基本とし、天井部にはヘラ劃き文が施される。胎土は緻密で灰色を呈し、焼成は良好で硬質に焼き締まる。

坏蓋 (2) 口径10.6cm、器高3.7cmを測る。器形は天井部がやや丸み、裾部は直立気味である。外面調整は回転ナデ調整を基本とし、天井部にはヘラ劃き文が施文される。胎土は緻密で灰色を呈し、焼成は良好で硬質に焼き締まる。

暗黄褐色土



第34図 1SI001出土遺物実測図 (1/3)

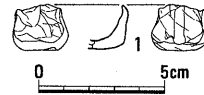
1SI030暗黄褐色土出土遺物 (第35図、図版25)

暗黄褐色土より出土したミニチュア土器1点を図示した。

土師器

ミニチュア土器 (1) 現存高1.7cmを測る。調整は手捏ねにより、胎土はきめ細かく、焼成は良好。

暗黄褐色土



第35図 1SI030出土遺物実測図 (1/3)

1SI035暗黄褐色土出土遺物 (第36図、図版25・26)

須恵器

蓋 1 (1) 復元口径13.6cm、器高3.1cmを測る。器形は天井部が平坦で、裾部は「ハ」の字状に広がり、身受けを持つ。外面調整は回転ナデ成形を基本とし、天井部はヘラ切りの後、ヘラナデが施される。胎土は緻密で灰色を呈し、やや砂質気味である。焼成は良好で硬質に焼き締まる。

蓋 1 (2) 復元口径16.3cm、現存高1.7cmを測る。器形は裾部が扁平に広がり、端部に返りを持つ。外面調整は回転ナデ調整を基本とする。胎土は緻密で灰色を呈し、白色粒子を含む。焼成は良好で硬質に焼き締まる。

坏蓋 (3) 復元口径8.9cm、現存高3.5cmを測る。器形は天井部がやや平坦で、裾部は緩やかな曲線を描く。外面調整は回転ナデ成形を基本とし、天井部はヘラ切りの後、ヘラナデが施される。胎土は緻密で、白色粒子を含む。焼成はやや軟質である。

坏蓋 (4) 口径11.7cm、器高4.0cmを測る。器形は天井部がやや丸みを帯び、裾部は緩やかに弧状を呈し、口唇部で直立気味になる。外面調整は回転ナデ成形を基本とし、体部にはヘラ劃き文が施される。胎土は緻密で灰色を呈し、小礫を多量に含む。焼成は良好で硬質に焼き締まる。

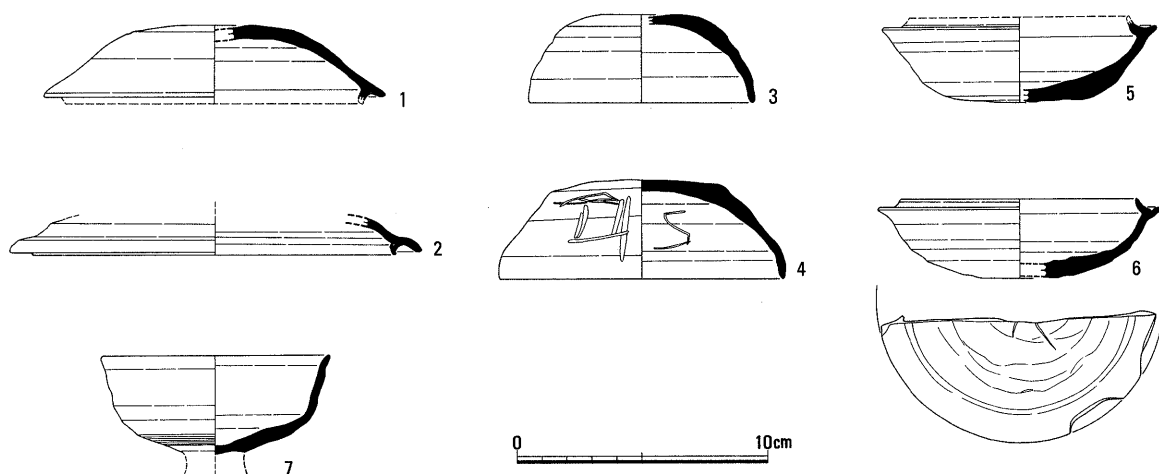
坏身 (5) 復元口径8.7cm、現存高3.4cmを測る。器形は丸底の底部から体部はやや直線的に外傾し

て立ち上がる。外面調整は回転ナデ成形を基本とし、底部はヘラ切りの後、ヘラナデが施される。胎土は緻密で、白色粒子を多量に混入し、焼成はやや軟質である。

坏身(6) 復元口径8.7cm、現存高3.4cmを測る。器形は丸底の底部から体部は丸みを帯びて立ち上がる。外面調整は回転ナデ成形を基本とする。底部はヘラ切りの後にヘラナデ、中央にはヘラ劃き文が施される。胎土は緻密で、白色粒子を多量に混入し、焼成は酸化焰焼成気味である。

高坏a(7) 復元口径9.0cm、現存高3.9cmを測る坏部のみ遺存の高坏破片である。坏部の器形は体部が下半で大きく屈曲してやや直線的に外傾する。外面調整はナデ成形を基本とし、体部下半ではカキメ・ナデが施される。胎土は緻密で、白色粒子を含み、焼成は良好である。

暗黄褐色土



第36図 1SI035出土遺物実測図(1/3)

2) 掘立柱建物跡出土遺物

1SB020-b 暗黄褐色土出土遺物(第37図、図版26)

土師器

甕(1) 現存高5.6cmを測る。頸部は緩やかに屈曲する。調整は頸部外面が縦ハケメ、口縁部内外面にはヨコナデ調整が施される。口唇部には僅かに煤が付着している。胎土は小礫を含み、色調は浅黄橙色を呈する。焼成は良好である。

須恵器

坏身(2)

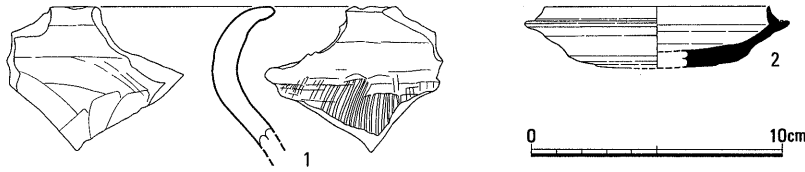
復元口径9.0cm、現存高2.4cmを測る。器形は丸底の底部から体部は丸みを帯びて立ち上がる。外面調整は回転ナデ成形を基本とする。底部はヘラケズリ調整が施される。胎土は緻密で、白色粒子を少量混入し、色調は灰色を呈する。焼成は良好である。

1SB020-I 暗黄褐色土出土遺物(第38図、図版26)

須恵器

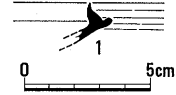
坏身(1) 現存高1.6cmを測る。外面調整は回転ナデ成形を基本とする。胎土は緻密で、白色粒子を少量混入し、色調は灰色を呈する。焼成は良好である。

暗黄褐色土



第37図 1SB020—b 出土遺物実測図 (1/3)

暗黄褐色土



第38図 1SB020—1
出土遺物実測図 (1/3)

1SB040—m 暗黄褐色土出土遺物 (第39図、図版26)

須恵器

蓋 1 (1) 復元口径15.4cm、現存高1.9cmを測る。器形は天井部が平坦で、裾部は「ハ」の字状に広がり、身受けを持つ。外面調整は回転ナデ成形を基本とする。胎土は小礫を微量含み、淡灰黄色を呈する。焼成は酸化焰焼成気味である。

1SB040—m 淡黄褐色土出土遺物 (第39図、図版26)

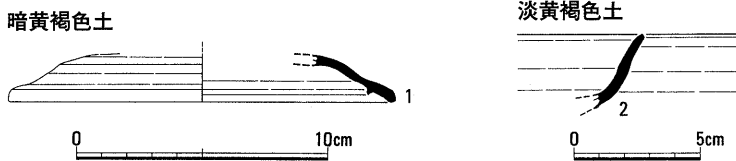
須恵器

坏 (2) 現存高3.0cmを測る。体部は直線的に立ち上がり、口唇部付近で僅かに外反する。外面調整は回転ナデ調整を基本とする。胎土は小礫を含む。色調は灰色を呈し、焼成は良好で硬質に焼き締まる。

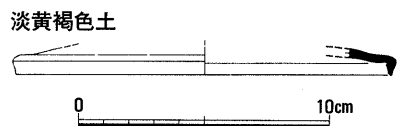
1SB040—n 淡黄褐色土出土遺物 (第40図、図版26)

須恵器

蓋 3 (1) 復元口径15cm、現存高1.1cmを測る。器形は天井部が平坦で、裾部は「ハ」の字状に広がり、口唇部は直線的に屈曲する。外面調整は回転ナデ成形を基本とする。胎土は小礫を多量に含み、色調は暗灰色・灰色を呈する。焼成は良好で硬質に焼き締まる。



第39図 1SB040—m 出土遺物実測図 (1/3)



第40図 1SB040—n 出土遺物実測図 (1/3)

1SB050—b 暗黄褐色土出土遺物 (第41図、図版26)

須恵器

坏蓋 (1) 復元口径11.8cm、現存高2.2cmを測る。器形は天井部がやや丸みを帯び、裾部は口唇部で直立気味になる。外面は回転ヘラケズリ調整を基本とし、内面及び口唇部では回転ナデ調整が施される。胎土は緻密で灰色を呈し、小礫を少量含む。色調は灰色を呈し、焼成は良好で硬質に焼き締まる。

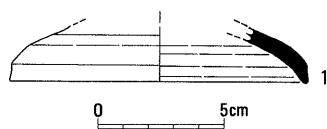
1SB050— d 暗黄褐色土出土遺物 (第42図、図版26)

須恵器

高坏 (1) 復元口径9.7cm、現存高3.6cmを測る。器形は坏部下位に陵を持ち、上半以上は直立気味になる。外面調整は回転ナデ成形を基本とし、回転ヘラケズリ調整が施される。胎土は緻密で灰色を呈し、小礫を少量含む。色調は灰色を呈し、焼成は良好で硬質に焼き締まる。

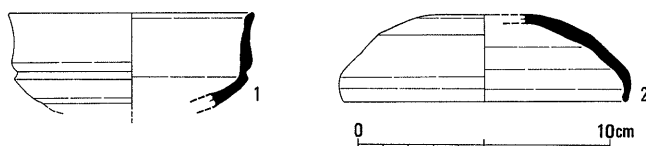
坏蓋 (2) 口径11.7cm、器高4.0cmを測る。器形は天井部がやや丸みを帯び、裾部は緩やかに弧状を呈し、口唇部で直立気味になる。外面調整は回転ナデ成形を基本とし、天井部には回転ヘラケズリ調整が施される。胎土は緻密で小礫を含み、灰色を呈する。焼成は良好で硬質に焼き締まる。

暗黄褐色土



第41図 1SB050— b 出土遺物実測図 (1/3)

暗黄褐色土



第42図 1SB050— d 出土遺物実測図 (1/3)

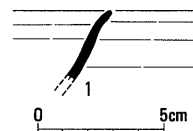
3) 土坑出土遺物

1SK028黒褐色土出土遺物 (第43図、図版26)

須恵器

坏 (1) 現存高2.9cmを測る。外面調整は回転ナデ成形を基本とする。胎土は緻密で、小礫を微量に含み、色調は暗灰色・灰オリーブ色を呈し、焼成は良好である。

黒褐色土



第43図 1SK028出土遺物実測図 (1/3)

1SK071暗黄灰色土出土遺物 (第44図、図版26)

須恵器

坏 (1) 復元口径12.2cm、現存高2.2cmを測る。内・外面には回転ナデ調整が施される。胎土は緻密で、赤色粒子を微量に含み、色調は浅黄色を呈する。焼成は酸化炎焼成気味である。

暗黄灰色土



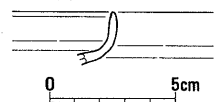
第44図 1SK071出土遺物実測図 (1/3)

1SK073暗黄褐色土出土遺物 (第45図、図版26)

土師器

皿 a (1) 現存高2.1cmを測る。調整は内外面共にヨコナデ・底部付近ではヘラナデ・内面見込み部分ではナデ調整が行われる。胎土は緻密で、白色粒子を微量混入し、色調はにぶい黄橙色を呈する。焼成は良好である。

暗黄褐色土



第45図 1SK073出土遺物実測図 (1/3)

1SK096暗褐色土出土遺物 (第46図、図版26)

土師質土器

播鉢 (1) 現存高12.6cmを測る。内面には2～4条を一単位とする播目が3ヶ所遺存している。調整は外面が不定方向のナデ・斜行方向のハケメ、内面には横・斜行方向のハケメ調整が施される。胎土

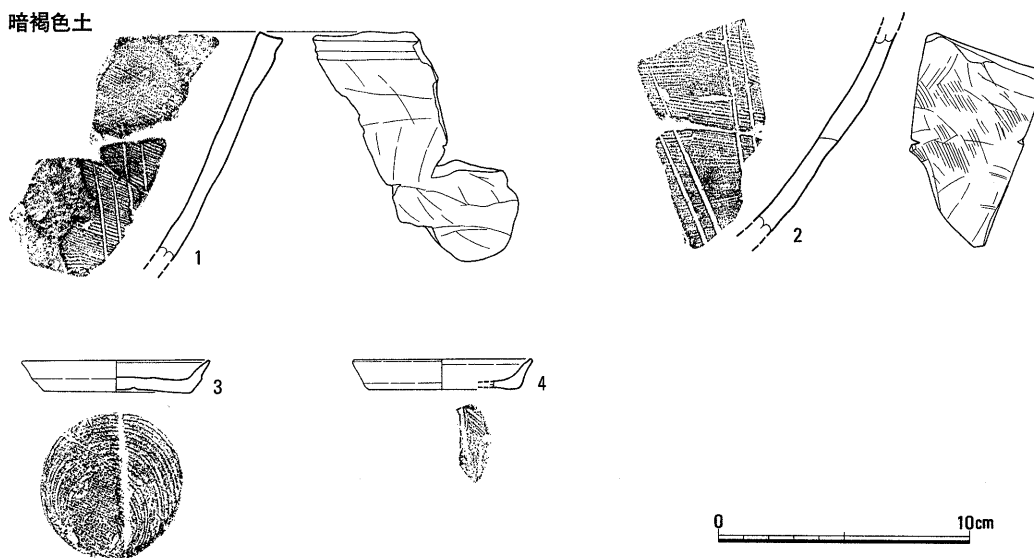
は緻密で赤色粒子を少量含み、色調はにぶい黄褐色を呈する。焼成は良好である。(2) と同一個体である可能性も考えられる。

播鉢 (2) 現存高7.9cmを測る。内面には2条以上を一単位とする播目が2ヶ所遺存している。調整は外面が不定方向のナデ・斜行方向のハケメ、内面には横ハケメ調整が施される。胎土は緻密で、赤色粒子を少量含み、色調はにぶい黄褐色を呈する。焼成は良好である。

土師器

小皿 a (1) 口径7.5cm、底径5.9cm、器高1.3cmを測る。器形は体部が直線的に短く外傾して立ち上がる。調整は回転ナデ成形を基本とし、底部は回転糸切り離し未調整である。胎土は緻密で、色調はにぶい黄橙色を呈する。焼成は良好である。

小皿 a (2) 復元口径7.0cm、復元底径6.0cm、器高1.2cmを測る。器形は体部が直線的に短く外傾し、僅かに端反気味となる。調整は回転ナデ成形を基本とし、底部は回転糸切り離し未調整である。胎土は緻密で、色調はにぶい黄橙色を呈する。焼成は良好である。



第46図 1SK096出土遺物実測図 (1/3)

4) 溝出土遺物

1SD008黒褐色土出土遺物 (第47図、図版27)

須恵器

坏身 (1) 復元口径12.0cm、現存高3.1cmを測る。外面調整は回転ナデ成形を基本とする。胎土は緻密で、白色粒子を多量含み、色調は灰色を呈する。焼成は硬質に焼き締まる。

1SD008暗褐色土出土遺物 (第48図、図版27)

須恵器

坏身 (1) 復元底径9.0cm、現存高2.5cmを測る。外面調整は回転ナデ成形を基本とする。胎土は緻密で、白色粒子を微量含み、色調は暗青灰色を呈する。焼成は良好で硬質に焼き締まる。

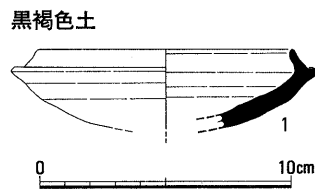
坏 c (2) 復元底径9.0cm、現存高2.5cmを測る坏の底部破片である。外面調整は回転ナデ成形を基本とし、高台を貼り付ける。胎土は緻密で、白色粒子を微量含み、色調は暗青灰色を呈する。焼成は良好で硬質に焼き締まる。

坏c(3) 復元底径7.0、現存高2.4cmを測る。外面調整は回転ナデ成形を基本とし、高台を貼り付ける。胎土は緻密で、白色粒子を少量含み、色調は灰オリーブ色を呈する。焼成は硬質に焼き締まる。

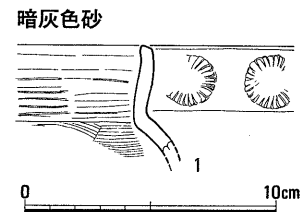
1SD009暗灰色砂出土遺物 (第49図、図版27)

瓦質土器

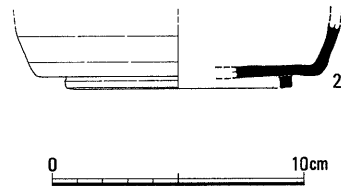
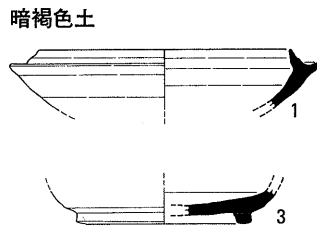
手焙り(1) 現存高4.3cmを測る。頸部はくの字状に屈曲し、調整は外面をヨコナデ、内面には横ハケメ調整が施され、頸部外面には菊花文のスタンプが刻印される。胎土は白色微粒子を微量含み、浅黄色を呈する。焼成は良好である。



第47図 1SD008出土遺物実測図 (1/3)



第49図 1SD009出土遺物実測図 (1/3)



第48図 1SD008出土遺物実測図 (1/3)

5) 縄文時代出土遺物

縄文時代の遺構外及び縄文時代以降の遺構内覆土中に混在していた遺物について報告する。攪乱出土の遺物については遺構外遺物に含めた。縄文時代の遺物は調査区南西域と中央域の2ヶ所で認められたが、いずれも黄褐色土層からの出土を中心とし、稀薄な状態であった。また、縄文時代以降の遺構内覆土に混入した縄文時代遺物も調査区南西域において少なからず認められることから、これらの遊離遺物は調査区南西域の遺物分布域に由来すると考えられる。この遺物分布域の南側調査区外は斜面地となっているので、これらの遺物はその上方からの二次的な流入である可能性がある。

遺構外出土遺物 (第50図1~8、図版27)

縄文土器 (1・2)

1は押型文土器の胴部破片である。比較的大振りの山形文を縦位に密接施文する。内面には横位と縦位の整形痕が観察される。胎土には砂粒、石英、黒色鉱物が含まれ、焼成は比較的堅い。器厚は6~9mmを測る。山形文の在り方と田村式に比定が考えられる2との胎土差から、2の撚糸文土器以前の早水台式段階に位置づけが考えられよう(1SX126明黄褐色土)。2は1トレンチから出土した1段Rもしくは0段rの絡条体を回転した撚糸文が施された土器である。左下へ走行する斜位の施文となる。内面の一部には指頭によるような凹凸が見られ、口縁部内面施文の凹線文になるかもしれない。胎土には砂粒、石英が多量に含まれ粗い。焼成は比較的堅い。器厚は10~11mmを測る。文様の特徵から、縄文時代早期

押型文土器後半期の田村式に比定できると考えられる（1トレンチ暗黄褐色土）。

石器（3～8）

遺構外からは計14点の石器が出土した。内訳は石鏃3点、剥片類11点である。その内、調査区南西域から石鏃3点と剥片類5点、調査区中央域から剥片類6点が出土している。剥片類は黒曜石製が8点、安山岩製が3点で、縦長の剥片を含んでいる。

石鏃（3～5） 3～5は凹基無茎石鏃である。3は三角形状を呈する小形品で、基部の抉りは浅い。4・5は基部の抉りが深く、先端部あるいは脚部を欠損する。いずれも丁寧な両面加工によって作出されている。石材は3が黒曜石、4・5が安山岩である。重量は3が0.52g、4が1.15g、5が1.52gを量る。4は縄文時代早期に多く見られる基部形態を呈している（3～5、黄褐色土）。

剥片類（6～8） 6・7は使用痕のある剥片である。6は下端の小さな抉り部分、7は右側縁に微細な剥離痕が観察される（矢印部分）。6の上端には小剥離が見られる。いずれも自然面を打面とする。8は剥片である。剥離面を打面とし、下端に自然面が残存する。正面のネガティブな剥離面の在り方を見ると、7・8は主要剥離面とほぼ同一方向からの連続的な剥離となるが、6は90°の打面転移が行われている。石材はいずれも安山岩である。重量は6が6.3g、7が6.2g、8が22.2gを量る。この3点は他の安山岩製品に比べ著しい風化が認められる（6～8、暗灰白色土）。

1SD008黒褐色土出土遺物（第50図9、図版27）

石器

石鏃（9） 石鏃1点が出土している。9は凹基無茎石鏃である。基部の抉りは比較的深い。約半分を欠損する。丁寧な両面加工が施される。石材は黒曜石、重量は0.82gを量る。

1SB005-c淡黄褐色土出土遺物（第50図12、図版27）

石器

凹石（12） 凹石1点が出土している。12は分厚い扁平円礫を素材とする凹石で、両面に敲打による浅い窪みが見られる。上下、左右端も敲打されており、敲打に分類することも可能である。裏面に縦位の粗い3条の線条痕が観察されるが、後世のキズかもしれない。石材は安山岩、重量は650gを量る。

1SB005-h暗褐色土出土遺物（第50図10、図版27）

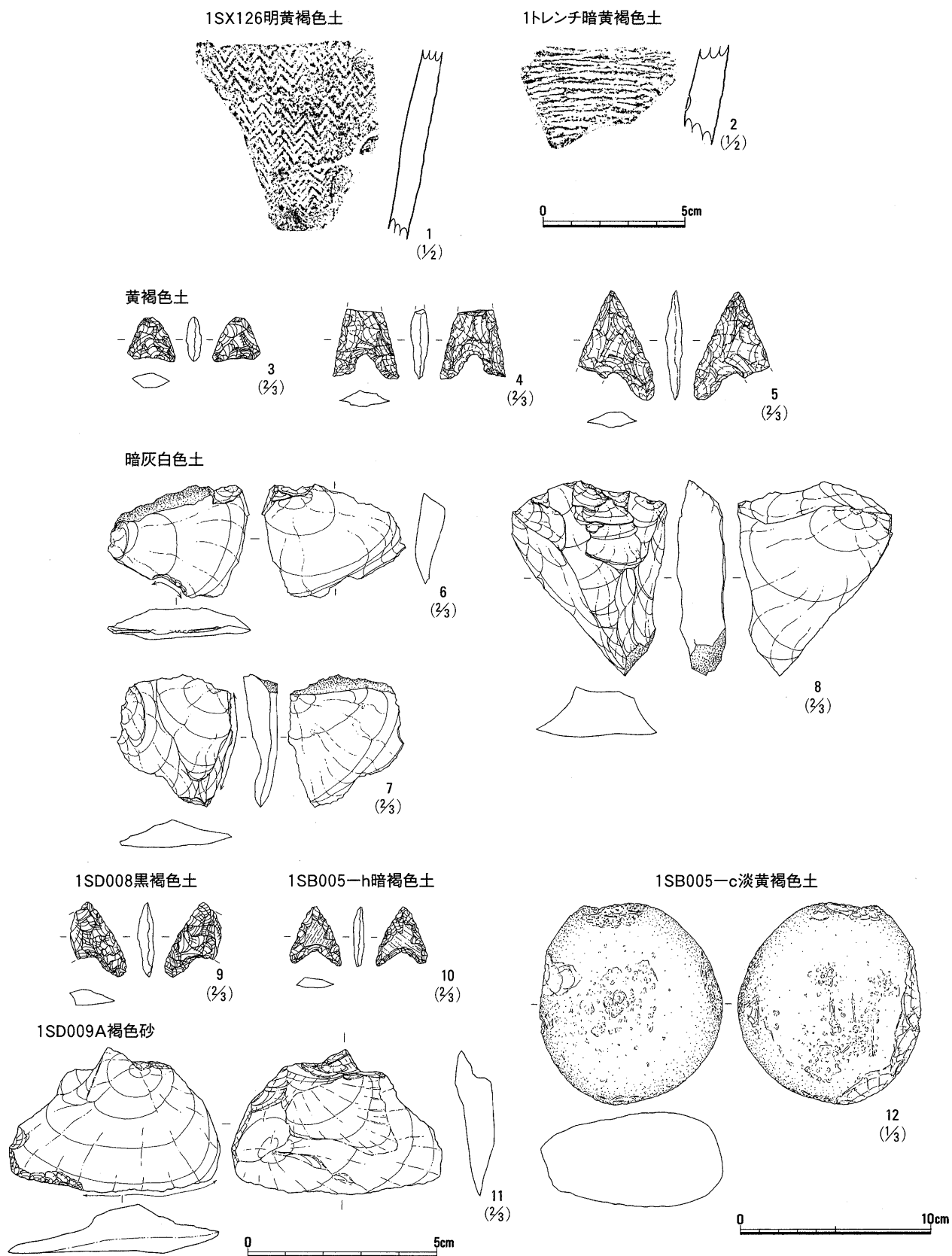
石器

石鏃（10） 混在した縄文時代の石鏃1点が出土している。10は凹基無茎の局部磨製石鏃である。基部の抉りは比較的深く、器厚は薄い。両面とも、細かい両面加工が施された後に、中央部を中心として良く磨かれ、平坦面が作出される。平坦面には緻密な斜位の線条痕が観察される。石材は黒曜石、重量は0.44gを量る。局部磨製石鏃は縄文時代早期に特徴的な石器である。

1SD009A褐色砂出土遺物（第50図11、図版27）

石器

スクレイパー（11） スクレイパー1点が出土している。11は扇形を呈するスクレイパーである。下辺を刃部とし、主要剥離面側の左端に二次加工、中央から右端に使用痕と考えられる微細剥離が観察される（矢印部分）。素材の形状を大きく変えない製品である。石材は安山岩、重量は14.72gを量る。



第50図 縄文時代遺物実測図 (1/2・2/3・1/3)

VI. 長ヶ坪遺跡第1次調査に伴う自然科学分析調査

はじめに

長ヶ坪遺跡から検出された土坑(1SK071)は、遺構検出時に配石状の集石が一部認められたことから、石棺墓の可能性が指摘されている。1SK071は、覆土中から出土した遺物より、古代と考えられている。また、土坑底面の乱れは木の根など自然作用による攪乱の可能性も考えられている。今回は、石棺墓の検証を目的として、骨類抽出、リン・炭素分析、脂質分析を行う。

1. 試料

試料は、土坑内の覆土・地山から採取された試料10点(第24図参照)である。今回は、目的を考慮して、骨類抽出は4点(1、2、2'、3)、脂質分析は9点(1、2、2'、3、5、7、11、13、14)、リン・炭素分析は全点分析を行う。

2. 分析方法

(1) 骨類抽出・同定

試料中には、2～3mm微細な白色物質が点在するほか、炭化物も若干認められる。ただし、いずれも脆く、土壌を水洗すると壊れる状況であった。そこで、試料を40℃で2～3分乾燥させたあと、双眼実体顕微鏡を用いて、炭化物や白色物質を直接観察することにより、その状態を調べた。

(2) 脂質分析

分析は、坂井ほか(1996)に基づき、脂肪酸及びステロール成分の含量測定を行う。試料は100g程度秤量し、試料が浸るに十分なクロロホルム：メタノール(2：1)を入れ、超音波をかけながら脂質を抽出する。ロータリーエバポレーターにより、溶媒を除去し、抽出物を塩酸-メタノールでメチル化を行う。ヘキサンにより脂質を再抽出し、セップパックシリカを使用して脂肪酸メチルエステル、ステロールを分離する。脂肪酸のメチルエステルの分離は、キャピラリーカラム(ULBON, HR-SS-10, 内径0.25mm, 長さ30m)を装着したガスクロマトグラフィー(GC-14A, SHIMADZU)を使用した。注入口温度は250℃、検出器は水素炎イオン化検出器を使用する。ステロールの分析は、キャピラリーカラム(J&W SCIENFIC, DB-1, 内径0.36mm, 長さ30m)を装着する。注入口温度は320℃、カラム温度は270℃恒温で分析を行う。キャリアガスは窒素を、検出器は水素炎イオン化検出器を使用する。

(3) リン・炭素分析

リン酸は硝酸・過塩素酸分解-バナドモリブデン酸比色法、腐植はチューリン法でそれぞれ行った(土壤養分測定法委員会 1981)。以下に、各項目の操作工程を示す。

試料を風乾後、軽く粉碎して、2.00mmの篩を通過させる(風乾細土試料)。風乾細土試料の水分を、加熱減量法(105℃、5時間)により測定する。風乾細土試料2.00gをケルダール分解フラスコに秤量し、はじめに硝酸(HNO₃)約5mlを加えて、加熱分解する。放冷後、過塩素酸(HClO₄)約10mlを加えて、再び加熱分解を行う。分解終了後、水で100mlに定容してろ過する。ろ液の一定量を試験管に採取し、リン酸発色液を加えて、分光光度計によりリン酸(P205)濃度を測定する。測定値と加熱減量法で求めた水分量から乾土あたりのリン酸含量(P205mg/g)を求める。

一方腐植含量は、先に述べた風乾細土試料の一部をタングステンカーバイド粉碎機で粉碎し、微粉碎試料を作成する。風粉碎土試料0.100～0.500gを100ml三角フラスコに正確に秤りとり、0.4Nクロム酸・硫酸混液10mlを正確に加え、約200℃の砂浴上で正確に5分間煮沸する。冷却後、0.2%フェニルアン

トラニル酸液を指示薬に0.2N硫酸第1鉄アンモニウム液で滴定した。滴定値及び加熱減量法で求めた水分量から乾土あたりの全炭素量(T-C乾土%)を求めた。

3. 結果

(1) 骨類抽出・同定

白色物質は、4点すべての試料で認められた。白色物質は大きさ1～3mm程度。風化が進んで非常に脆く、粉状になっており、組織等は観察できない。中に石英粒を包有している。このような形状から、白色物質は風化した岩石片と思われる。太宰府市周辺の山地には花崗岩が分布していることから、花崗岩に含まれる長石類が風化したものと思われる(図版-自然科学)。一方炭化物は、試料番号2で若干多いが、全体として少ない。大きなものでも2mm程度であり、木材等に由来すると思われるが風化が著しく、明瞭な組織は残っていない。

(2) 脂質分析

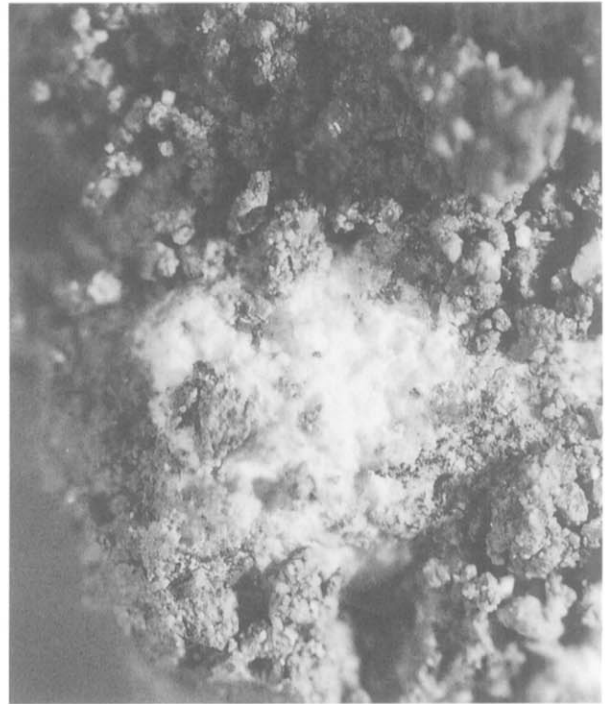
結果を第2表、第51図に示す。脂肪酸組成を見ると、すべて類似した組成になっている。C18以下の脂肪酸ではパルミチン酸(C16)が非常に多く、約半数を占める。その他ミリスチン酸(C14)、パルミトレイン酸(C16:1)、ステアリン酸(C18)、オレイン酸(C18:1)などが検出される。また、C20以上の脂肪酸では、アラキジン酸(C20)、ベヘン酸(C22)、ドコサヘキサエン酸(C22:6)などが見られるが、C18以下の脂肪酸と比べると割合はかなり低い。一方ステロール組成を見ると、試料番号1、2、2'ではコプロスタノールとコレステロールからなり、その中でもコレステロールの含量が高い。それ以外の試料では、エルゴステロール、カンペステロールが加わるが、試料番号1などと同様コレステロールの割合が高くなっている。

図版-自然科学 白色物質の状況



1. 花崗岩片(1SK071;試料番号2)

1.0mm



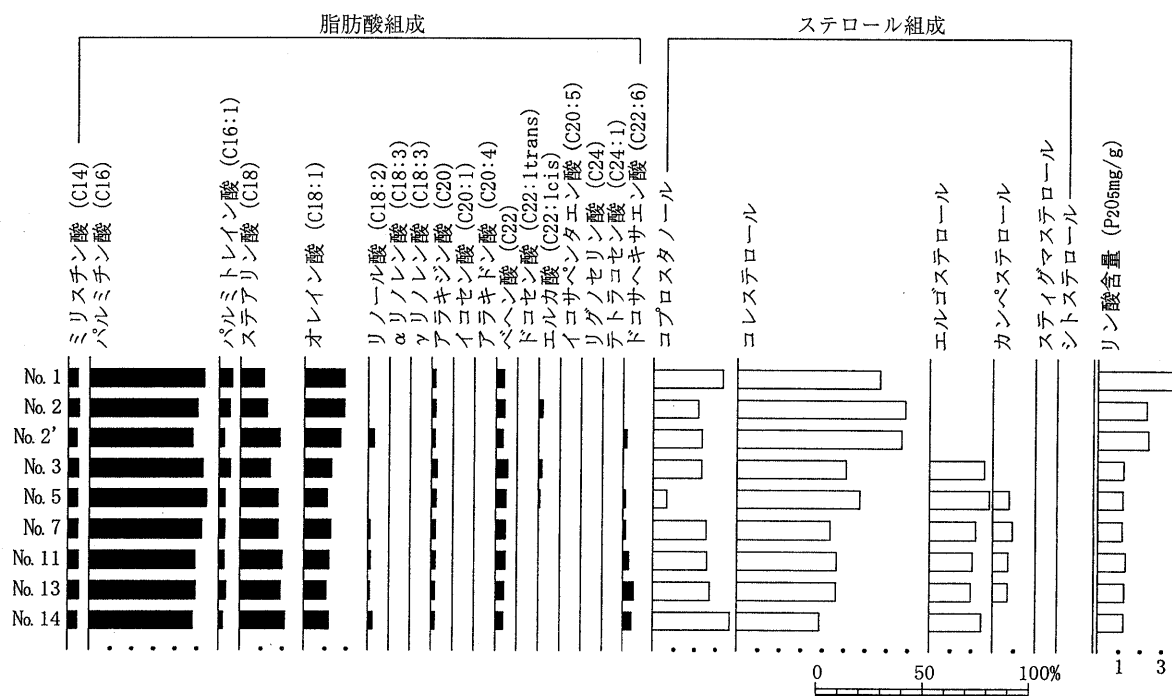
2. 花崗岩片(1SK071;試料番号2)

1.0mm

第2表 脂質分析結果

種類	試料番号	No1	No2	No2'	No3	No5	No7	No11	No13	No14
脂肪酸組成										
ミリスチン酸 (C14)		4.60	5.21	4.19	4.94	4.53	4.82	4.96	5.43	4.52
パルミチン酸 (C16)		53.29	50.10	47.80	52.65	54.35	52.25	49.24	49.38	48.09
パルミトレイン酸 (C16:1)		6.24	5.12	2.38	5.30	2.94	2.87	2.65	3.35	2.08
ステアリン酸 (C18)		11.10	12.50	18.64	14.15	17.81	17.95	19.97	19.05	21.22
オレイン酸 (C18:1)		18.96	18.92	17.09	13.04	10.99	12.68	11.90	10.56	11.79
リノール酸 (C18:2)		—	—	3.05	—	—	1.22	1.37	1.03	2.42
γリノレン酸 (C18:3)		—	—	—	—	—	—	—	—	—
αリノレン酸 (C18:3)		—	—	—	—	—	—	—	—	—
アラキジン酸 (C20)		1.93	2.02	1.59	2.68	2.29	2.14	2.14	1.84	1.88
イコセン酸 (C20:1)		—	—	—	—	—	—	—	—	—
アラキドン酸 (C20:4)		—	—	—	—	—	—	—	—	—
ベヘン酸 (C22)		3.88	4.15	3.45	5.67	5.09	4.78	4.76	4.14	3.77
ドコセン酸 (C22:1trans)		—	—	—	—	—	—	—	—	—
エルカ酸 (C22:1cis)		—	1.98	—	1.58	0.85	—	—	—	—
イコサペンタエン酸 (C20:5)		—	—	—	—	—	—	—	—	—
リグノセリン酸 (C24)		—	—	—	—	—	—	—	—	—
テトラコセン酸 (C24:1)		—	—	—	—	—	—	—	—	—
ドコサヘキサエン酸 (C22:6)		—	—	1.83	—	1.15	1.29	3.02	5.23	4.23
ステロール組成										
コプロスタノール		33.34	21.38	23.24	22.97	6.54	25.29	25.71	27.04	36.80
コレステロール		66.66	78.62	76.76	50.96	57.31	43.47	46.57	46.31	38.50
エルゴステロール		—	—	—	26.07	28.40	22.04	20.53	19.67	24.70
カンペステロール		—	—	—	—	7.75	9.20	7.19	6.98	—
ステイグマステロール		—	—	—	—	—	—	—	—	—
シトステロール		—	—	—	—	—	—	—	—	—
分析試料の重量 (g)		101.5	101.5	101.2	101.2	101.3	101.7	101.2	101.4	101.7

* 分析試料の重量は土壌は湿重量、“—”は未検出を示す。



第51図 脂肪酸・ステロール組成とリン酸含量

(3) リン・炭素分析

結果を第3表に示す。脂質分析を行っている試料に関しては、リン酸含量を脂肪酸組成とともに図に表している。覆土のリン酸含量は、試料番号3で1.2mg/g程度であるが、他の試料は2.0mg/gを超える値になっている。一方地山のリン酸含量は1.2mg/g前後のものが多いが、試料番号9と12は、覆土と同様2.0mg/gを超える値となっている。一方炭素含量は、いずれの試料も平均値(1.4%)前後の値をとっている。

第3表 リン・炭素分析結果

番号	採取位置	土性	土色	腐植含量(%)	P205(mg/g)
1SK071	1 覆土 2層	CL	10YR3/2 黒褐	1.97	3.48
	2 覆土 3層	CL	10YR3/3 暗褐	1.33	2.28
	2' 覆土 3層	CL	10YR3/3 暗褐	1.46	2.36
	3 覆土 4層	CL	10YR3/3 暗褐	1.31	1.22
	5 確認面の地山	CL	10YR3/2 黒褐	1.46	1.18
	6 確認面の地山	CL	10YR4/4 褐	1.14	0.99
	7 確認面の地山	CL	10YR3/3 暗褐	1.35	1.14
	8 確認面の地山	CL	10YR3/3 暗褐	1.37	1.18
	9 土坑壁面の地山	CL	10YR3/3 暗褐	1.24	2.24
	10 土坑底面の地山	CL	10YR2/2 黒褐	1.29	1.06
	11 土坑底面の地山	CL	10YR2/2 黒褐	1.42	1.29
	12 土坑壁面の地山	CL	10YR3/3 暗褐	1.34	3.43
	13 土坑底面の地山	CL	10YR3/2 黒褐	1.43	1.23
	14 土坑底面の地山	CL	10YR2/2 黒褐	1.58	1.21

注. (1) 土色: マンセル表色系に準じた新版標準土色帖(農林省農林水産技術会議監修, 1967)による。

(2) 土性: 土壤調査ハンドブック(ペドロジスト懇談会編, 1984)の野外土性による。
CL: 埴壤土(粘土15~25% シルト20~45% 砂3~65%)

4. 考察

C18以下の脂肪酸を見ると、すべての試料においてパルミチン酸の割合が高い。一般的に考古遺物にはパルミチン酸の分布割合が高いが、これは長い年月の間にオレイン酸・リノール酸といった不飽和脂肪酸の一部が酸化されてパルミチン酸を生成するため、主として植物遺体の土壌化に伴う腐植物に由来すると推定されている(中野ほか 1993)。また、坂井・小林(1995)は、既存の基礎実験結果を検討し、熱や経年変化によりオレイン酸に対するパルミチン酸の割合が増加することなどから、解析の際に脂肪酸組成の経年変化について考慮する必要性を指摘している。これらのことから、パルチミン酸は経年変化により増加したと考えられ、内容物を検討する指標にはなりにくい。パルミチン酸に次いで多く検出されるオレイン酸やステアリン酸は、動物油、植物油ともに含まれる脂肪酸である(島菌 1988)。一方植物油に多いリノール酸がほとんど見られないが、リノール酸は二重結合が多く化学的に不安定であることから(坂井・小林 1995)、土壌中で分解された可能性がある。このため、これらの脂肪酸の割合からも内容物の種類を検討することは難しい。

C20以上の脂肪酸を解析するにあたっては、分析精度を考慮する必要がある。図の右側にある脂肪酸ほど、検出器に到達するまでに時間を要することから、測定誤差が大きくなる。最も右側に位置するドコサヘキサエン酸は二重結合を多く持つ脂肪酸であるため科学的に不安定である。このため、今回のようなパルチミン酸の割合が多く、分解の進んだ試料で安定して存在するとは考えにくい。おそらく測定誤差による分解能が低くなり、未知の脂溶性成分との分離ができなかったものと考えられる。このため、ドコサヘキサエン酸に関しては、解析の際に考慮しないものとする。C20以上の脂肪酸の内、アラキジン酸、ベヘン酸、リグノセリン酸は動物の脳や神経に多く含まれる脂肪酸とされ(中野 1993)、これが検出されることにより動物の関与が推定できるとされている(中野 1995)。一方、筒木・近藤(1997、1998)は泥炭の成因と脂質組成に関する調査を行い、泥炭層中に含まれるC20以上の脂質を、分解されにくいワックスや樹脂に由来するとしている。このことから、土壌中に含まれているC20以上の脂肪酸の中にも、樹脂やワックスなど植物に由来するものが多少は含まれていると推定される。今回の組成を見ると、いずれの試料からもアラキジン酸とベヘン酸が検出されている。これらは覆土、地山ともに低率で、かつばらつきが少ないことから、筒木・近藤(1997、1998)で指摘しているような、土壌中の腐

植に由来する可能性が高い。

ステロールの内、コレステロールは動物に、エルゴステロールはキノコなどに、カンベステロール、ステイグマステロール、シトステロールは植物にそれぞれ由来する(菅原ほか 1987)。また、コプロスタノールはコレステロールが大腸菌などによって分解されて生じたもので、動物に由来する(中野 1995)。試料 1、2、2' に関してはコレステロールとコプロスタノールのみからなり、動物由来のステロール以外は検出されていない。一方、ステロールの含量が少なく機器の検出限界近くにある場合、偶発的に検出された一部のステロールが過大に評価される場合がある。このため、今回のように 1~2 種類のステロールのみ組成を示す場合、その検証を行うためには、他の結果も含めて慎重に検討する必要がある。以上のことから、覆土、地山ともに動物質の関与が推定されるが、特に覆土中で濃集しているかどうかに関しては、他の結果も含めて検討する必要がある。

一方リン酸量を見ると、地山を中心に 1.2mg/g 前後を示す試料が多く、これが周辺土壌が持っている自然状態のリン酸量であると考えられる。これの 2 倍を超える値を示している試料は、試料番号 1、2、2'、9、12 であることから、これらに関してはリン酸の濃集が示唆される。覆土は 4 点中 3 点において、リン酸の富化が見られたことから、遺体埋納の可能性があると見える。また、地山で高かった 2 試料は土坑壁面の試料で、覆土に隣接している。リン酸は、地下水の影響により、粘土などとともに移動することが指摘されていることから(バーンズほか 1986)、覆土に含まれていたリン酸が拡散した可能性もある。

今回の結果を見ると、脂肪酸組成は、経年変化による分解が進んで、覆土と地山との差がほとんど見られなくなっているが、ステロールとリン酸量においては、遺体埋納を示唆する値が得られた。今回ステロールの方が、脂肪酸と比較して動物質埋納に関して強く反映している。これはステロールの方が、脂肪酸に比べて分解に強い(中野 1993)ことに由来しているためと見られる。

(パリノ・サーヴェイ株式会社)

引用文献

- ジナ・バーンズ, ルール・プラント, サイモン・ケーナ, デイビット・ロリガー, 西田史朗 1986 「日本の土壌中での磷酸塩の挙動」『考古学と自然科学』19 p.57-68
- 土壤養分測定法委員会編 1981 『土壤養分分析法』養賢堂 440p.
- 中野益男 1993 「脂肪酸分析法」『第四紀試料研究法2 研究対象別分析法』東京大学出版会 p.388-403
- 中野益男 1995 「脂肪酸分析の現状と課題」『考古学ジャーナル』386 p.2-8
- 中野益男・福島道広・中野寛子・明瀬雅子・長田正宏 1993 「西隆寺跡から出土した土器に残存する脂肪の分析」『奈良国立文化財研究所学報52 西隆寺発掘調査報告書』奈良国立文化財研究所 p.94-100
- 農林省農林水産技術会議事務局監修 1967 『新版標準土色帖』
- ペドロジスト懇談会 1984 「野外土性の判定」『土壌調査ハンドブック』ペドロジスト懇談会編 p.39-40
- 坂井良輔・小林正史・藤田邦雄 1996 「灯明皿の脂質分析」『富山県文化振興財団埋蔵文化財発掘調査報告第7集 梅原胡摩堂遺跡発掘調査報告(遺物編) 第二分冊』財団法人富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所 p.24-37
- 坂井良輔・小林正史 1995 「脂肪酸分析の方法と問題点」『考古学ジャーナル』386 p.9-16
- 菅原龍幸・加藤隆夫・高宮和彦・三浦 洋・田所忠弘・國崎直道 1987 『食品学各論』建帛社 270p.
- 島菌順雄 1988 『標準栄養化学・生化学』医歯薬出版株式会社 205p.
- 筒木 潔・近藤連三 1997 「泥炭地植物のフェノール性化合物, 脂肪酸, ステロール組成」『日本土壌肥科学雑誌』68 p.37-44
- 筒木 潔・近藤連三 1998 「泥炭地の乾燥化と植生変化に伴う泥炭の脂質組成の変化」『日本土壌肥科学雑誌』69 p.12-20

Ⅶ. ま と め

今回調査を行った長ヶ坪遺跡第1次調査地点は、長ヶ坪遺跡としては最初の調査となり、北にはカヤノ遺跡第3・8次調査区が県道を境に隣接している。カヤノ遺跡群では、縄文時代早期の押型文土器が出土しているほか、7世紀を中心とする数多くの掘立柱建物跡・竪穴住居跡が検出されており、本調査地点との関連性が注目される。以下、長ヶ坪遺跡の変遷を概略してみる。

縄文時代

縄文時代の古い段階に形成されたと考えられる干裂状地形が、3・4トレンチの南東斜面において顕著に認められ、西方（5～9トレンチ側）に向かうに従い消滅して行く。形成要因としては、西側で沖積地形の土層堆積が観察されることから、調査区西部には旧流路が存在し、流路際付近が干上がった結果形成されたものと考えられる。また、本遺跡の干裂状地形から遺物は出土しなかったが、長ヶ坪遺跡第1次調査地点の北東約600mに位置するカヤノ遺跡第4次調査地点では、本遺跡と同じ層位で確認された干裂状地形から縄文時代早期の遺物が出土していること、縄文時代早期押型文土器を出土する黄褐色土層が干裂状地形の上層であることにより、干裂状地形が少なくとも縄文時代早期以前の地形であるものと認識されよう。

縄文時代の遺構としては、平面形が楕円・円形を呈する陥し穴が7基あげられる。これら陥し穴の構築時期は、時代を示す遺構伴出遺物が皆無であることから、明確には決定できない。ただし、1トレンチ及び1SX126の暗黄褐色土層からは、早期押型文土器、撚糸文土器、石鏃・チップ類が出土しており、また、暗黄褐色土層は陥し穴（1SK006・1SK021・1SK101・1SK131・1SK144・1SK163）の覆土を形成している土層でもあることから、陥し穴が縄文時代早期に構築された可能性が考えられる。

調査区に広がる黄褐色土層から出土した押型文土器、石器類などの分布状況は、調査区南端部と中央北部において散漫な出土状態を呈しており、遺物が集中する様相は看取されなかった。さらに、調査区内では、陥し穴以外に生活の痕跡を示す遺構等が認められないことから、これら出土遺物は近接する生活場よりの持ち込み、あるいは混入等が考えられ、その場合には調査区外南側の丘陵斜面部上での生活域を想定することが出来る。

古墳時代以降

当該期の遺構としては、竪穴住居跡5軒（1SI001・1SI015・1SI025・1SI030・1SI035）、掘立柱建物跡5棟（1SB005・1SB020・1SB040・1SB045・1SB050・1SB055）、柵列1列（1SA065）、溝5条（1SD008・1SD009・1SD013・1SD016・1SD037）、土坑20基（1SK003・1SK007・1SK012・1SK014・1SK027・1SK028・1SK032・1SK033・1SK048・1SK059・1SK071・1SK072・1SK073・1SK096・1SK118・1SK123・1SK134・1SK164）が検出された。

時期の特定は、竪穴住居跡については床面直上の遺物から、掘立柱建物跡群は柱穴掘り方や柱痕に相当する土層からの出土遺物をもって判断したが、掘立柱建物跡の柱穴掘り方から出土した遺物は前代の竪穴住居跡からの混入遺物である可能性も考え得るので、特定した時期はあくまでも最終埋没年代とした。また、遺物が僅少な遺構や掘立柱建物跡については大卒の時期で判断したが、遺物が皆無のため時期を詳細には特定出来ない遺構（1SI025・1SB005・1SB050・1SB055）も存在する。以上のことを加味した上で、古代以降における遺構変遷は概ね3期に区分出来得るものと推定された。

第1期は、竪穴住居跡1SI001の時期で、出土した須恵器は小田編年ではⅣ期（6世紀末～7世紀初頭）

に当たる時期である。集落は調査地点内においては住居跡1軒と、遺構密度が閑散とした時期である。

第2期は、住居跡が3軒(1SI015・1SI030・1SI035)と掘立柱建物跡3棟(1SB020・1SB040・1SB045)、柵列1列(1SA065)の時期である。時期は、小田編年のVI期(7世紀後半～8世紀前半)に当たる。なお、1SI035についてはVI期の遺物を含むが、使用時はIV期と推測した。また、掘立柱建物跡は重複しているため、これらの建物の中で建て替えられたものと思われる。

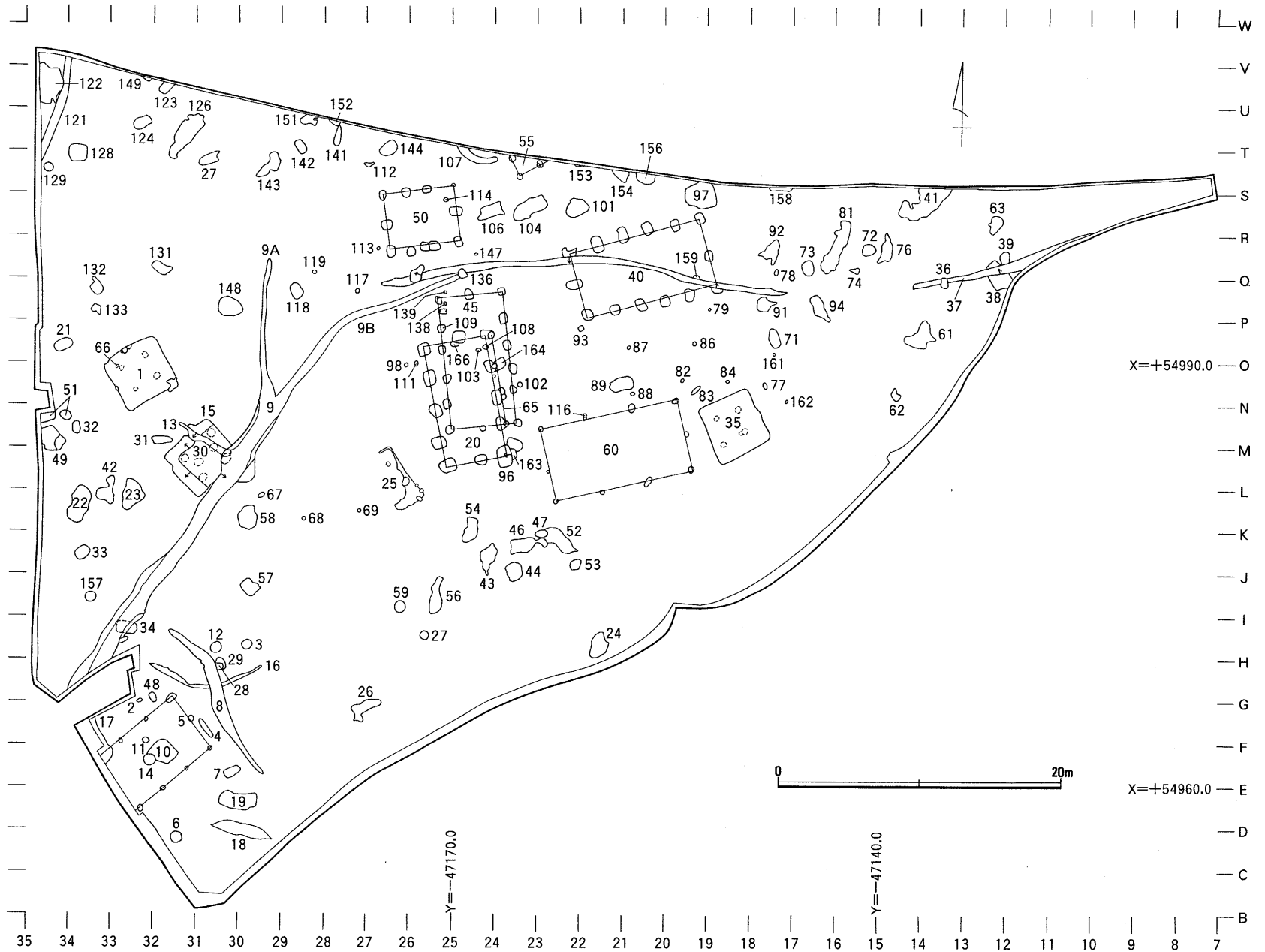
カヤノ遺跡はまだ整理中なので、報告段階では所見の変更もあり得るが、現場の所見では、カヤノ遺跡群で検出された7世紀～8世紀初頭の掘立柱建物跡群の多くは本遺跡と同様に、主軸方位が南北方向をとる遺構は若干西に、東西方向をとる遺構は若干北に偏針する傾向を示し、両遺跡間の遺構群が有機的関係にあることを強く想定させる。

第3期は、中世以降に比定される時期で、当該期に比定され得る遺構は土坑(1SK096)1基である。詳細な時期は、出土遺物から15世紀代に比定される。カヤノ遺跡では、中世に含まれる遺構・遺物が検出されておらず、当地域では中世期の遺構は極めて希薄な状況であったことが窺えよう。

以上、長ヶ坪遺跡の変遷を概略してみたが、検出された古墳時代から古代の集落跡は、実質的には隣接するカヤノ遺跡の集落跡の延長線上にあり、本遺跡のみをもって当地域の古墳時代から古代の集落を俯瞰することはできない。今後は、長ヶ坪遺跡第1次調査区とカヤノ遺跡の分析を併せることにより、当地域での歴史的景観が明らかになるものと思われる。

引用参考文献

- 小田富士雄 1969「筑後における須恵器の編年」『塚ノ谷窯跡群』八女市教育委員会
- 小田富士雄 1979「九州の須恵器」『世界陶磁器全集2 日本古代』
- 小田富士雄 1996「九州地方の古墳時代の土器」『日本土器事典』
- 北九州市埋蔵文化財調査会 1977『天観寺山窯跡群』
- 坂本嘉弘 1998「東九州の押型文土器の現状と課題」『九州の押型文土器—論攷編—』
- 狭川真一 1983「付編・土器の分類」『大宰府条坊跡Ⅱ』太宰府市教育委員会
- 山村信榮 1999『古代の土器研究会主催シンポジウム 飛鳥・白鳳の瓦と土器—年代論—』帝塚山大学考古学研究所歴史考古学研究会
- 山本信夫 1992『古代の土器シンポジウム 古代の土器研究—律令的土器様式の西・東—』



第52図 長ヶ坪遺跡第1次調査略測図 (1/400)

第4表 長ヶ坪遺跡第1次調査遺構一覧表

S-番号	遺構番号	種 別	位 置
1	1SI001	竪穴住居 6c末	O・N31~33
2		ピット	G32
3	1SK003	土坑	H29・30
4	1SD004	溝	F30・31
5	1SB005	掘立柱建物跡 柱穴1~8は整理段階でa~hに変更	F・G30~32
6	1SK006	土坑	C・D31
7	1SK007	土坑	E30
8	1SD008	溝	E~H29~31
9	1SD009	溝	G~Q25~34
10		窪み	E・F31・32
11		窪み	F32
12	1SK012	土坑	H30
13	1SD013	溝	M30・31
14	1SD014	溝	E32
15	1SI015	竪穴住居 30→15→9 7c後半~8c前半	L・M30・31
16	1SD016	溝	G・H29~32
17		攪乱	F33
18		窪み	D29・30
19		窪み	D・E29・30
20	1SB020	掘立柱建物跡 柱穴1~12は整理段階でa~lに変更 65→20→96 7c後半~8c前半	L~P23~25
21	1SK021	土坑	O34
22		窪み	K・L33・34
23		窪み	K・L32
24		窪み	H21
25	1SI025	竪穴住居	L・M26
26		窪み	F・G26~28
27	1SK027	土坑	H25
28	1SK028	土坑	G・H30
29		ピット	L・M30・31
30	1SI030	竪穴住居 30→15→9 7c後半~8c前半	L・M30・31
31		窪み	M31・32
32	1SK032	土坑	M34
33	1SK033	土坑	J33
34		土坑	H32
35	1SI035	竪穴住居 遺物①~③は整理段階で暗黄褐色土に変更 7c後半~8c前半	L~N17~19
36		ピット	Q13
37	1SD037	溝	P・Q10~26
38		不明遺構	Q12
39		不明遺構	Q12
40	1SB040	掘立柱建物跡 柱穴1~14は整理段階でa~nに変更 7c後半~8c前半	P~R18~22
41		風倒木痕	R・S13・14
42		窪み	K・L33

S-番号	遺構番号	種 別	位 置
43		窪み	J24
44		窪み	J23
45	1SB045	掘立柱建物跡 柱穴1～14は整理段階でa～nに変更 7c後半～8c前半	M～P23～25
46		窪み	J・K23
47		窪み	K23
48	1SK048	土坑	G32
49		窪み	M34
50	1SB050	掘立柱建物跡 柱穴1～10は整理段階でa～jに変更	Q～S25・26
51		窪み	M34
52		窪み	J・K22・23
53		窪み	J23
54		窪み	K24
55	1SB055	掘立柱建物跡 柱穴1～3は整理段階でa～cに変更	S23
56		窪み	I・J
57		窪み	I・J29・30
58		窪み	K・L29・30
59	1SK059	土坑	I26
60	1SB060	掘立柱建物跡 柱穴1～10は整理段階でa～jに変更	L～N19～23
61		窪み	O・P14
62		窪み	N・O14・15
63	1SK063	土坑	R12
64		ピット	N31
65	1SA065	柵列 柱穴1～4は整理段階でa～dに変更 7c後半～8c前半	65→20 M～O23・24
66		ピット	O32
67		ピット	L29
68		ピット	K28
69		ピット	K27
70			
71	1SK071	土坑	O17
72	1SK072	土坑	Q15
73	1SK073	土坑	Q16
74		ピット	Q15
75			
76		窪み	Q・R15
77		ピット	N17・18
78		ピット	Q17
79		ピット	P19
80			
81		風倒木痕	Q・R16
82		ピット	N20
83		窪み	N19
84		ピット	N18
85			

S-番号	遺構番号	種 別	位 置
86		ピット	O19
87		ピット	O21
88		ピット	N20・21
89		風倒木痕	N21
90			
91		風倒木痕	P17・18
92		風倒木痕	Q・R17・18
93		ピット	O・P22
94		風倒木痕	P16
95			
96	1SK096	土坑 15c代	L・M23・24
97		風倒木痕	S19
98		ピット	O26
99		ピット	Q・R22
100			
101	1SK101	土坑	R22
102		ピット	N23
103		ピット	O24
104		風倒木痕	R23
105			
106		風倒木痕	R24
107		風倒木痕	S・T24・25
108		ピット	O24
109		ピット	P25
110			
111		ピット	N・O25
112		ピット	S27
113		ピット	Q27
114		ピット	Q・R25
115			
116		ピット	N23
117		ピット	P27
118	1SK118	土坑	P28
119		ピット	Q28
120			
121	1SD121	溝	S～V34
122		攪乱	U34
123	1SK123	土坑	U31
124	1SK124	土坑	T32
125			
126		窪み	S・T31
127		窪み	S30・31
128	1SK128	土坑	S・T33・34
129		ピット	S34

S-番号	遺構番号	種 別	位 置
130			
131			Q31・32
132		窪み	P33
133		窪み	P33
134	1SK134	土坑	Q25
135			
136		攪乱	Q24・25
137		攪乱	Q25・26
138		ピット	P25
139		ピット	P25
140			
141		ピット	S・T27
142		ピット	T28
143		ピット	S29
144	1SK144	土坑	S26
145			
146		ピット	Q25
147		ピット	Q24
148		風倒木痕	P30
149		風倒木痕	U32
150			
151		風倒木痕	T28
152		風倒木痕	T27・28
153		風倒木痕	S22
154		風倒木痕	S21
155			
156		風倒木痕	S20
157		ピット	I37
158		風倒木痕	S17
159		ピット	Q19
160			
161		ピット	O17
162		ピット	N17
163	1SK163	土坑	M23
164	1SK164	土坑	O24
165			
166		ピット	O25

第5表 長ヶ坪遺跡第1次調査遺物一覧表

S-1①暗黄褐色土

須 恵 器	坏蓋
-------	----

S-1②暗黄褐色土

須 恵 器	坏蓋
-------	----

S-1③暗黄褐色土

土 師 器	甕
-------	---

S-1暗黄褐色土

須 恵 器	甕、坏身×坏蓋、坏片
土 師 器	甕

S-1-b黄褐色土

土 師 器	甕、片
そ の 他	スラッグ

S-1淡黄褐色土

土 師 器	甕、片
-------	-----

S-2黒褐色土

土 師 器	坏、片
-------	-----

S-3暗褐色土

須 恵 器	片
土 師 器	甕

S-4暗青灰色粘土

土 師 器	甕
縄文土器	片

S-4暗褐色土

土 師 器	甕
-------	---

S-5-1暗褐色土

須 恵 器	甕
土 師 器	片

S-5-3淡黄褐色土

石 製 品	凹石
-------	----

S-5-5暗黄褐色土

土 師 器	片
-------	---

S-5-8暗褐色土

石 製 品	石鏃
-------	----

S-7暗褐色土

土 師 器	片、小坏 a
瓦 類	平瓦(縄)

S-7暗黄褐色土

土 師 器	甕
-------	---

S-8黒褐色土

須 恵 器	甕、坏、坏身、片
土 師 器	甕、片
黒色土器 A	片
石 製 品	石鏃
弥生土器	片(丹塗り)

S-8暗褐色土

須 恵 器	坏身、坏蓋、坏 c、片
土 師 器	甕、片
黒色土器 A	片
弥生土器	片(丹塗り)
縄文土器	押型文深鉢片

S-9褐色砂

須 恵 器	坏蓋
土 師 器	甕、小坏 a、片
石 製 品	フレーク

S-9暗灰色土

土 師 器	片
-------	---

S-9淡青灰色粘土

須 恵 器	坏
土 師 器	甕、坏 a?、片

S-9灰白色粘土・灰色砂

須 恵 器	壺、坏、片
土 師 器	甕

S-9白灰色砂

土 師 器	甕、片
-------	-----

S-9青灰色粘土

須 恵 器	甕、坏 c、坏蓋、片
土 師 器	甕、片

S-9暗灰色砂

須 恵 器	甕、坏身、坏蓋、片
土 師 器	甕、把手、坏 a、坏 c、坏、片
瓦 類	平瓦(縄)
石 製 品	フレーク(黒曜石)、チップ(黒曜石)
瓦 質 土 器	手焙り
縄文土器	押型文深鉢片

S-9暗茶褐色砂

須 恵 器	甕、片
土 師 器	甕、高坏、把手、片
瓦 類	平瓦(縄)

S-9暗青灰色粘土

須 恵 器	甕
土 師 器	甕、鉢、片、小皿 a

S-9 A

須 惠 器	坏 a、蓋
土 師 器	片

S-9 A 褐色砂

土 師 器	甕、片
石 製 品	スクレイパー (安山岩)

S-9 A 灰色粘土

須 惠 器	坏蓋
土 師 器	片

S-9 A 灰色砂

須 惠 器	片
土 師 器	甕、片

S-9 B 暗灰色土

須 惠 器	甕
土 師 器	片

S-10 暗褐色土

須 惠 器	坏身、坏蓋
土 師 器	甕、片

S-13 暗黄茶褐色土

土 師 器	甕、片
-------	-----

S-14 黒褐色土

土 師 器	片
-------	---

S-15 暗黄褐色土

土 師 器	甕
-------	---

S-15-b 暗黄褐色土

土 師 器	甕
-------	---

S-15-C

須 惠 器	甕
-------	---

S-15 カマド 暗橙褐色土

土 師 器	片
-------	---

S-16 黒褐色土

須 惠 器	片
土 師 器	片

S-17 黒褐色土

土 師 器	片
縄 文 土 器	押型文深鉢片

S-20-a 暗黄褐色土

土 師 器	甕、片
-------	-----

S-20-b 暗黄褐色土

須 惠 器	坏身、片
土 師 器	甕、片

S-20-c 暗黄褐色土

須 惠 器	坏蓋
土 師 器	甕、片

S-20-d 暗黄褐色土

土 師 器	甕、片
石 製 品	チップ (黒曜石)

S-20-f 暗黄褐色土

土 師 器	片
-------	---

S-20-g 暗黄褐色土

須 惠 器	片
土 師 器	片

S-20-g 淡黄褐色土

須 惠 器	甕、片
土 師 器	甕

S-20-h 暗黄褐色土

土 師 器	甕、片
-------	-----

S-20-i 暗黄褐色土

土 師 器	甕、片
-------	-----

S-20-i 黄褐色土

土 師 器	片
-------	---

S-20-i 淡黄褐色土

土 師 器	甕、片
石 製 品	チップ (黒曜石)

S-20-j 黄褐色土

土 師 器	片
-------	---

S-20-j 暗黄褐色土

土 師 器	甕、片
-------	-----

S-20-k 暗黄褐色土

須 惠 器	甕?
石 製 品	石鏃 (黒曜石)

S-20-k 淡黄褐色土

須 惠 器	片
土 師 器	片
石 製 品	チップ (黒曜石・安山岩)

S-20-l 暗黄褐色土

須 惠 器	坏身
土 師 器	甕、片

S-21 暗黄褐色土

石 製 品	チップ (黒曜石)
-------	-----------

S-28 黒褐色土

須 惠 器	坏
土 師 器	坏 d?、片

S-29 暗黄褐色土

弥 生 土 器	片 (丹塗り)
---------	---------

S-29 淡黄褐色土

須 惠 器	片
土 師 器	片

S-30暗黄褐色土

須 惠 器	甕
土 師 器	甕、片、ミニチュア
石 製 品	チップ

S-34暗褐色土

土 師 器	片
石 製 品	ブレード (黒曜石)

S-35淡黒褐色土

土 師 器	片
-------	---

S-34暗黄褐色土

土 師 器	片
石 製 品	フレーク (黒曜石)

S-35①

須 惠 器	坏蓋
-------	----

S-35②

須 惠 器	坏身
-------	----

S-35③

須 惠 器	高坏 a
-------	------

S-35④

須 惠 器	坏身
-------	----

S-35⑤

須 惠 器	坏蓋
-------	----

S-35⑥

石 製 品	不明石製品
-------	-------

S-35カマド暗灰褐色土

須 惠 器	甕
-------	---

S-35暗黄褐色土

須 惠 器	甕、蓋 1、片
土 師 器	甕、坏、片

S-35淡黄褐色土

須 惠 器	甕
土 師 器	片

S-35-C

土 師 器	片
石 製 品	フレーク

S-36青灰色砂

須 惠 器	坏 c、坏、蓋 3、片
土 師 器	片
肥前系陶磁器	染付椀
国産陶器	播鉢

S-37白色粘土

土 師 器	片
国産陶器	片

S-37明灰褐色粘土

須 惠 器	坏蓋、片
土 師 器	片

S-38暗灰色砂質土

須 惠 器	甕、坏蓋
石 製 品	不明石製品
瓦 質 土 器	甕
肥前系陶磁器	染付椀
国産陶器	椀・小坏・甕?

S-38暗灰色粘質土

須 惠 器	甕、蓋 3
土 師 器	片
肥前系陶磁器	染付椀、染付皿?
国産陶器	椀、甕?

S-38灰色粘質土

須 惠 器	甕、片
国産陶器	片

S-40-c 淡黄褐色土

土 師 器	坏
-------	---

S-40-e 淡黄褐色土

須 惠 器	片
-------	---

S-40-f 暗黄褐色土

土 師 器	片
-------	---

S-40-g 暗黄褐色土

須 惠 器	壺×鉢
-------	-----

S-40-h 暗黄褐色土

土 師 器	甕、片
-------	-----

S-40-h 淡黄褐色土

土 師 器	片
-------	---

S-40-i 暗黄褐色土

土 師 器	甕
-------	---

S-40-l 淡黄褐色土

土 師 器	甕
-------	---

S-40-l 暗黄褐色土

土 師 器	甕、片
-------	-----

S-40-m 淡黄褐色土

須 惠 器	甕、坏、片
-------	-------

S-40-m 暗黄褐色土

須 惠 器	坏、蓋 1
-------	-------

S-40-n 暗黄褐色土

須 惠 器	蓋
-------	---

S-40-n 淡黄褐色土

須 惠 器	蓋 3
土 師 器	甕

S-45-a 暗黄褐色土

土 師 器	片
-------	---

S-45-b 暗黄褐色土

須 惠 器	片
-------	---

土 師 器	片
-------	---

S-45-b 淡黄褐色土

土 師 器	坏d
-------	----

S-45-c 暗黄褐色土

須 惠 器	甕
-------	---

土 師 器	甕、片
-------	-----

S-45-c 淡黄褐色土

土 師 器	片
-------	---

S-45-d 暗黄褐色土

須 惠 器	片
-------	---

土 師 器	片
-------	---

S-45-h 暗黄褐色土

須 惠 器	壺?
-------	----

土 師 器	甕
-------	---

S-45-i 暗黄褐色土

土 師 器	甕
-------	---

S-45-j 暗黄灰色土

土 師 器	甕
-------	---

S-45-j 暗黄褐色土

須 惠 器	坏身
-------	----

土 師 器	甕
-------	---

S-45-k 暗黄褐色土

土 師 器	片
-------	---

S-45-l 淡黄褐色土

土 師 器	片
-------	---

S-45-m 暗褐色土

土 師 器	甕
-------	---

S-45-m 暗黄褐色土

土 師 器	片
-------	---

S-45-n 淡黄褐色土

土 師 器	甕、片
-------	-----

S-45-n 暗黄褐色土

須 惠 器	片
-------	---

土 師 器	片
-------	---

S-47 暗灰色粘土

須 惠 器	坏?
-------	----

S-50-a 暗黄褐色土

須 惠 器	坏
-------	---

土 師 器	甕
-------	---

S-50-b 暗黄褐色土

須 惠 器	坏蓋
-------	----

S-50-c 暗黄褐色土

須 惠 器	片
-------	---

S-50-d 暗黄褐色土

須 惠 器	高坏、坏蓋
-------	-------

土 師 器	甕
-------	---

S-50-d 黄褐色土

土 師 器	片
-------	---

S-50-j 暗黄褐色土

須 惠 器	坏蓋、
-------	-----

土 師 器	片
-------	---

S-50-j 暗茶褐色土

土 師 器	甕
-------	---

S-50-j 暗黄褐色粘土

土 師 器	片
-------	---

S-55-b 暗黄色土

土 師 器	片
-------	---

S-55-c 暗黄褐色土

土 師 器	片
-------	---

S-58 暗黄褐色土

石 製 品	フレーク (黒曜石)
-------	------------

S-59 暗黄褐色土

土 師 器	甕
-------	---

S-64 暗黄褐色土・暗灰色砂

土 師 器	片
-------	---

S-65-b 黄褐色土

土 師 器	壺
-------	---

S-65-b 淡黄灰色土

土 師 器	甕、片
-------	-----

S-65-c 暗黄灰色土

須 惠 器	片
-------	---

S-66 明黄褐色土

須 惠 器	坏身×坏蓋
-------	-------

土 師 器	甕、片
-------	-----

S-67 暗黄褐色土

繩 文 土 器	片
---------	---

S-68 黄褐色土

土 師 器	片
-------	---

S-69 茶褐色土

土 師 器	片
-------	---

S-71淡青灰色土

須 惠 器	甕
土 師 器	甕、坏 a (糸)、坏
国 産 陶 器	捏鉢
金 属 製 品	鉄滓

S-71暗黄灰色土

須 惠 器	片、坏
土 師 器	甕、坏 a (糸) 片

S-71暗黒灰色土

土 師 器	甕、片
-------	-----

S-72暗黄褐色土

土 師 器	甕
黒色土器 B	片

S-73暗黄褐色土

土 師 器	甕、皿 a、皿 b、片
-------	-------------

S-74暗黄灰色土

須 惠 器	蓋 1
土 師 器	甕

S-76黄褐色土

石 製 品	フレーク (黒曜石)
-------	------------

S-76

石 製 品	フレーク (黒曜石)
-------	------------

S-77暗黄褐色土

須 惠 器	甕
-------	---

S-78灰色粘土

須 惠 器	壺×鉢
土 師 器	片

S-79黄褐色土

須 惠 器	片
-------	---

S-82黄褐色土

土 師 器	甕
-------	---

S-83黄褐色土

須 惠 器	坏
-------	---

S-84黄褐色土

土 師 器	甕
-------	---

S-86暗黄褐色土

須 惠 器	甕?
-------	----

S-87暗黄褐色

須 惠 器	甕
-------	---

S-88暗黄褐色土

須 惠 器	坏
土 師 器	片

S-89黄褐色土

須 惠 器	片
土 師 器	片

S-93黄褐色土

須 惠 器	坏身
土 師 器	片

S-96-①

土 師 器	小皿 a
-------	------

S-96-②

須 惠 器	高坏
-------	----

S-96-③

土 師 器	甕
-------	---

S-96暗褐色土

須 惠 器	高坏
土 師 器	甕、坏 a、鉢、小皿 a (糸)
石 製 品	フレーク (黒曜石)
土 師 質 土 器	播鉢
弥 生 土 器	甕

S-97灰白色土

須 惠 器	坏 c 1
-------	-------

S-98暗黄褐色土

土 師 器	甕
-------	---

S-102黄褐色土

土 師 器	甕、片
-------	-----

S-103暗黄褐色土

土 師 器	片
-------	---

S-106黄褐色土

土 師 器	甕?
-------	----

S-108暗黄褐色土

須 惠 器	坏身
土 師 器	片

S-109暗黄褐色土

須 惠 器	片
土 師 器	片

S-111暗黄褐色土

土 師 器	甕、片
-------	-----

S-112黄褐色土

土 師 器	片
-------	---

S-113黄褐色土

須 惠 器	片
土 師 器	片

S-114黄褐色粘土

土 師 器	甕、片
-------	-----

S-116暗褐色土

土 師 器	片
-------	---

S-117暗灰色粘土

須 恵 器	甕
土 師 器	甕、片
瓦 類	平瓦（縄）

S-118黄褐色土

縄 文 土 器	押型文深鉢片
---------	--------

S-119暗黄褐色土

土 師 器	片
-------	---

S-121黒褐色土

土 師 器	甕、片
-------	-----

S-122黒褐色土

須 恵 器	甕、蓋3
土 師 器	甕、坏?、片
石 製 品	チップ（黒曜石）

S-126明黄褐色土

縄 文 土 器	押型文深鉢片
---------	--------

S-134暗褐色土

土 師 器	片
-------	---

S-137白色砂

須 恵 器	坏蓋
土 師 器	甕、坏、片

S-138黄褐色土

土 師 器	甕、片
-------	-----

S-139黄褐色土

土 師 器	片
-------	---

S-146灰色砂

須 恵 器	坏蓋
土 師 器	高坏、片
肥前系陶磁器	皿

S-147褐色砂

土 師 器	甕、坏
-------	-----

S-159灰色砂

須 恵 器	甕?
土 師 器	片

S-161暗黄褐色土

須 恵 器	坏c
-------	----

S-162暗黄褐色土

土 師 器	甕
-------	---

S-164黄褐色土

須 恵 器	蓋身
土 師 器	片

1 T①暗黄褐色土

縄 文 土 器	条痕文深鉢片?
---------	---------

1 T②暗黄褐色土

縄 文 土 器	押型文深鉢片?
---------	---------

1 T暗黄褐色土

須 恵 器	蓋
土 師 器	片

4 T明褐色土

土 師 器	片
-------	---

5 T暗黄褐色土

土 師 器	片
-------	---

5 T

石 製 品	チップ（黒曜石）、フレーク（黒曜石）
-------	--------------------

6 T

石 製 品	チップ（黒曜石）、フレーク（黒曜石）
縄 文 土 器	押型文深鉢片?

暗黄褐色土

須 恵 器	坏蓋、片
土 師 器	甕
石 製 品	チップ（黒曜石）、フレーク（黒曜石）
縄 文 土 器	片

黄褐色土

土 師 器	片
石 製 品	石鏃（黒曜石）、チップ（黒曜石）

茶色土

土 師 器	片
肥前系陶磁器	椀

黄灰色土

須 恵 器	甕、壺、坏
弥生土器	壺?、片
縄 文 土 器	片?

暗灰白色土

石 製 品	フレーク（黒曜石）
-------	-----------

黄灰色粘土

土 師 器	甕
-------	---

青灰色粘土

土 師 器	甕、片
-------	-----

表土

須 恵 器	甕、壺、坏身、片
土 師 器	鉢、把手、片
瓦 類	平瓦（縄）
肥前系陶磁器	椀、皿
国産陶器	播鉢
弥生土器	甕、片

圖 版



長ヶ坪遺跡第1次調査区遠景（北から）



長ヶ坪遺跡第1次調査区調査前現況（北東から）



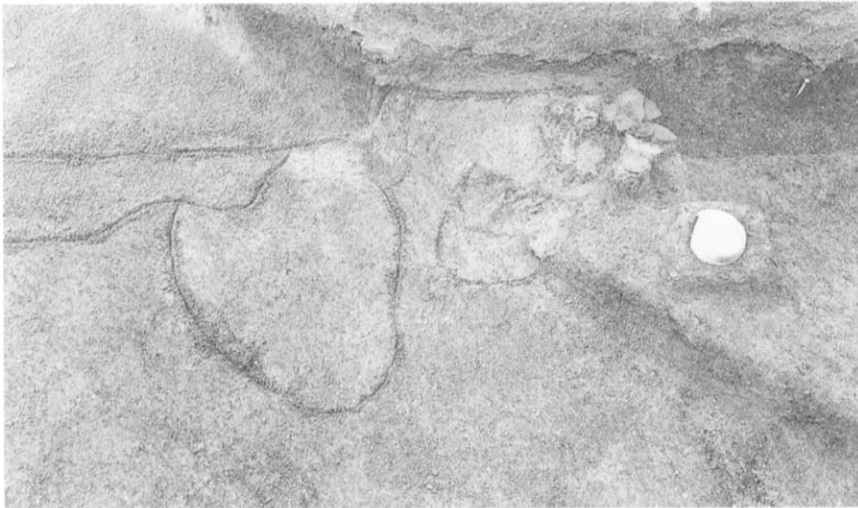
長ヶ坪遺跡第1次調査区南部全景（上空から）



長ヶ坪遺跡第1次調査区北部全景（上空から）



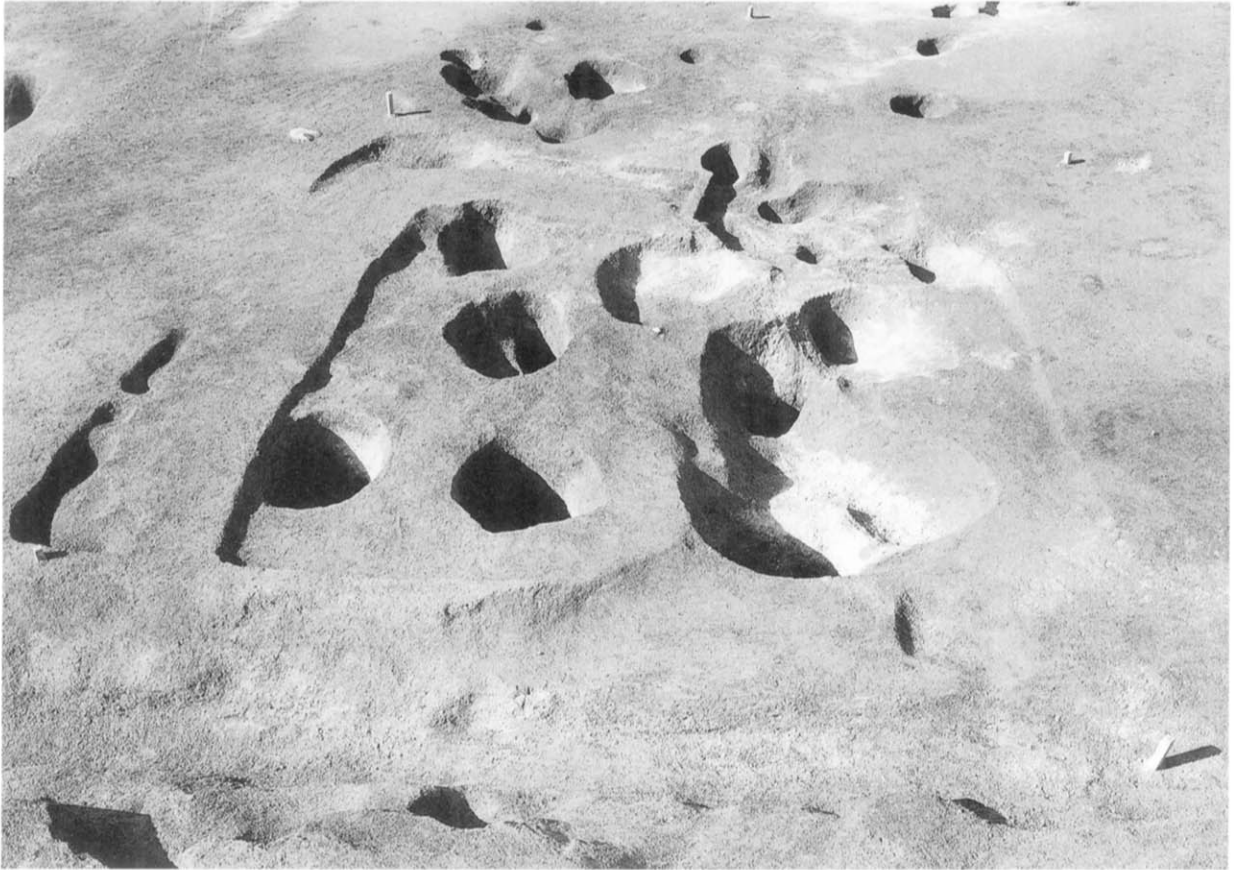
1SI001全景（南東から）



1SI001カマド完掘（南東から）



1SI001カマド掘り方（南東から）



1SI015・1SI030全景（南東から）



1SI025全景（南西から）



1SI035全景（南西から）



1SI035カマド完掘（南西から）



1SI035カマド掘り方（南西から）

図版 6



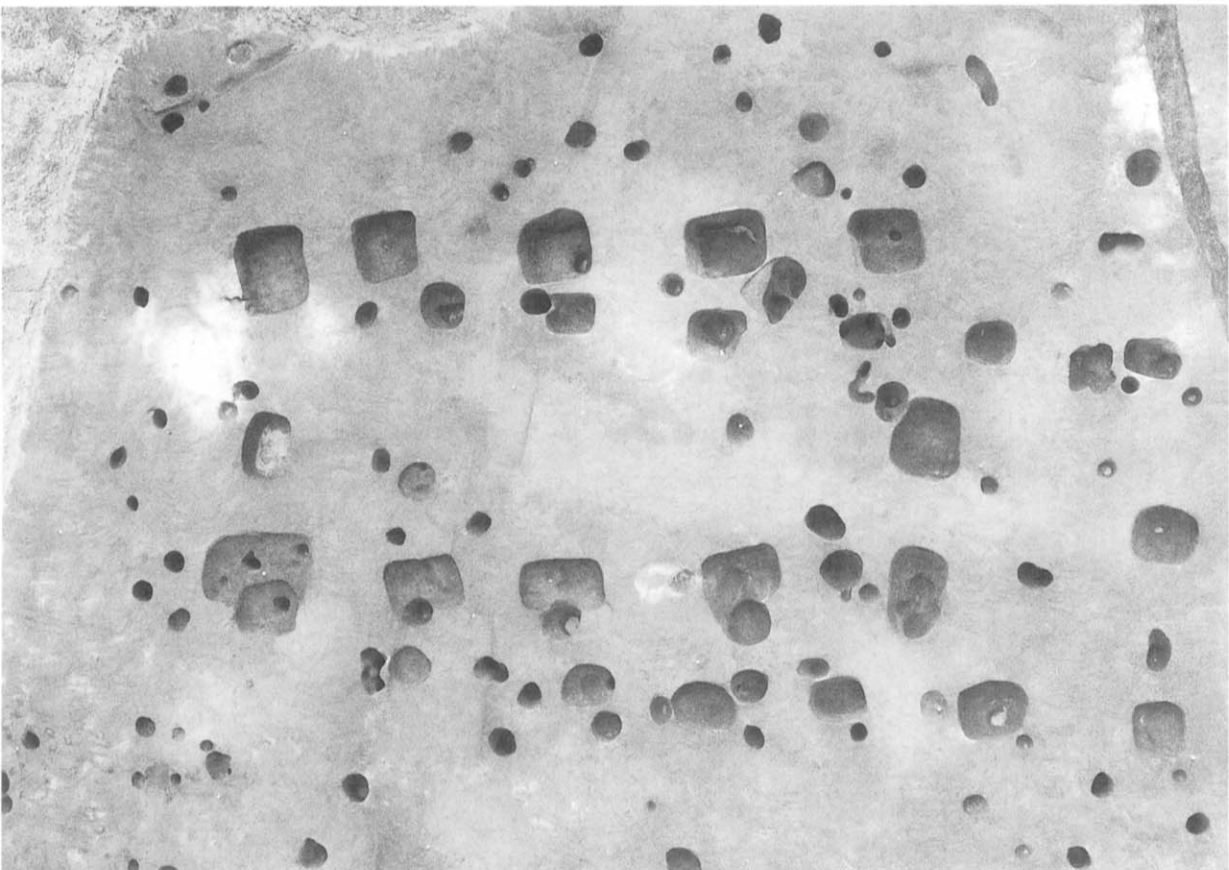
1SB005掘り方全景（東から）



調査区東側の掘立柱建物跡群（西から）



1SB020・1SB045柱痕検出状況（南から）

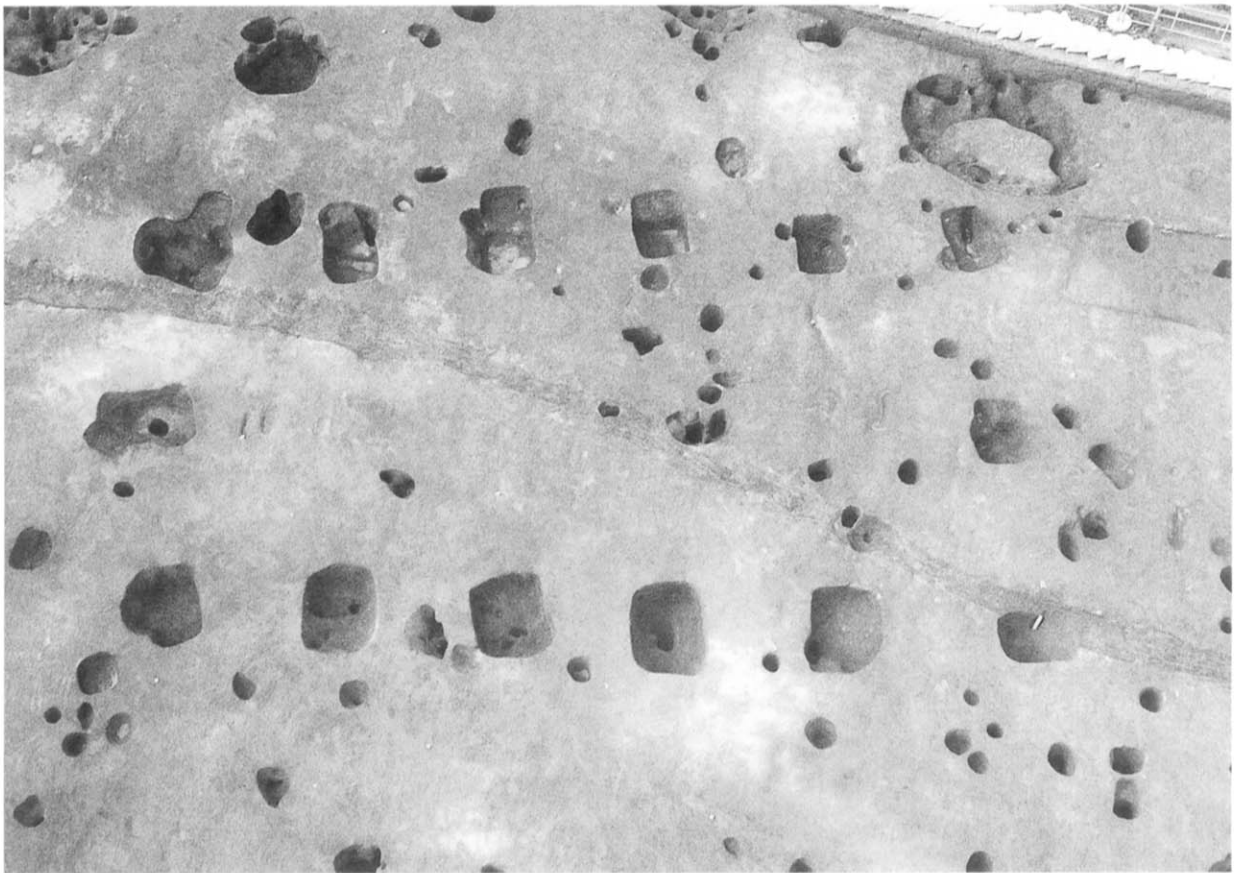


1SB020・1SB045・1SA065掘り方全景（上空から）

図版 8



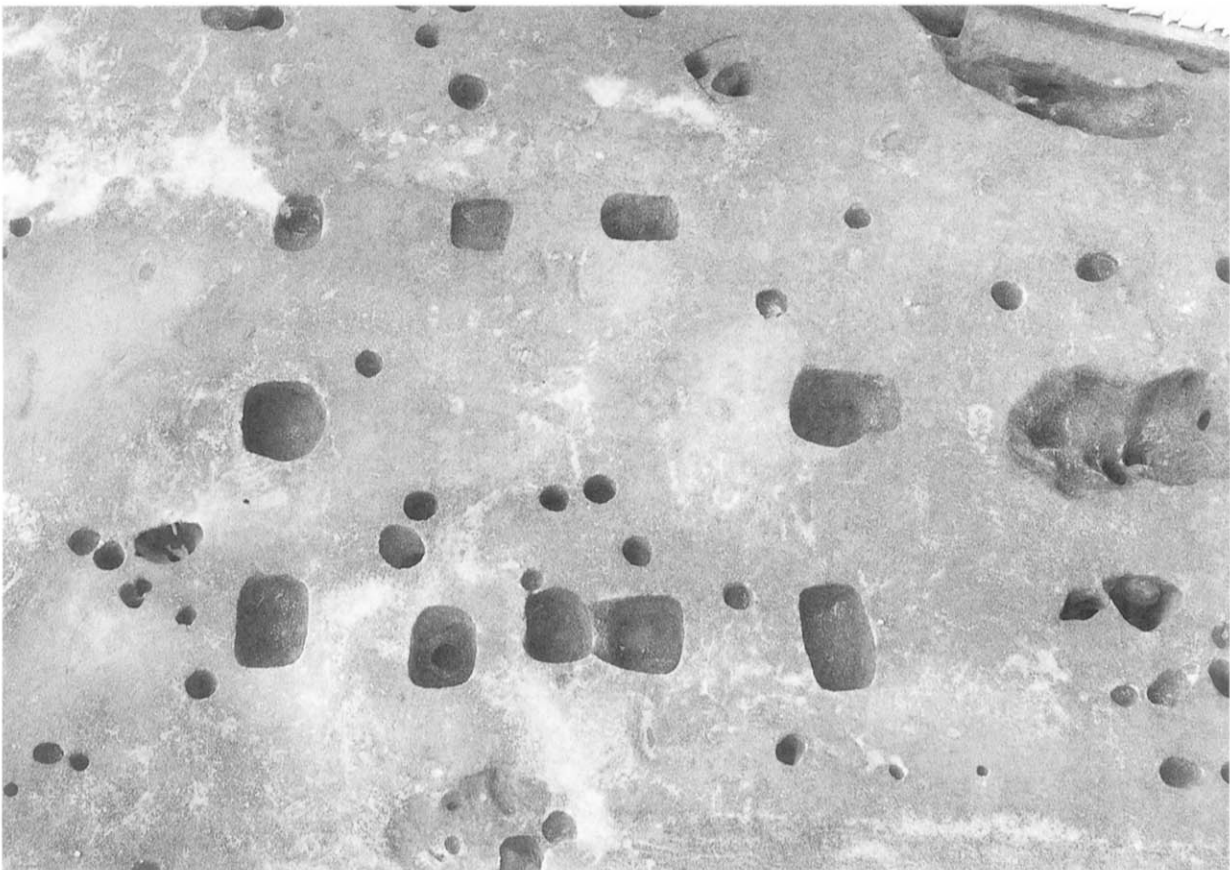
1SB040柱痕検出状況（東から）



1SB040掘り方全景（上空から）



1SB050柱痕検出状況（南から）



1SB050掘り方全景（上空から）



1SB055柱痕検出状況（南西から）



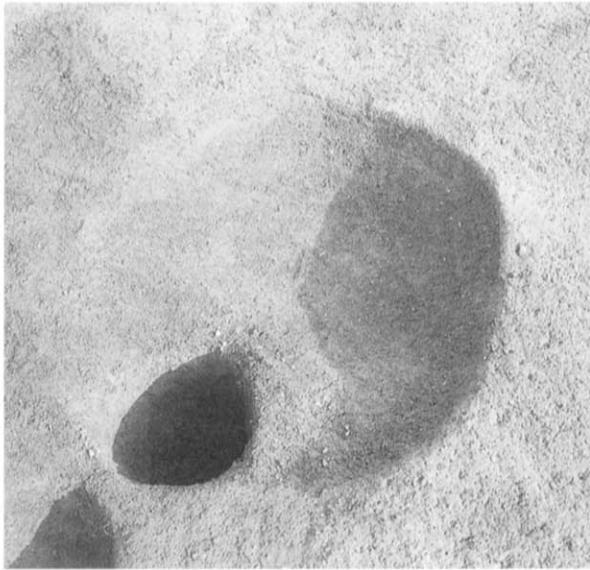
1SB055掘り方全景（南東から）



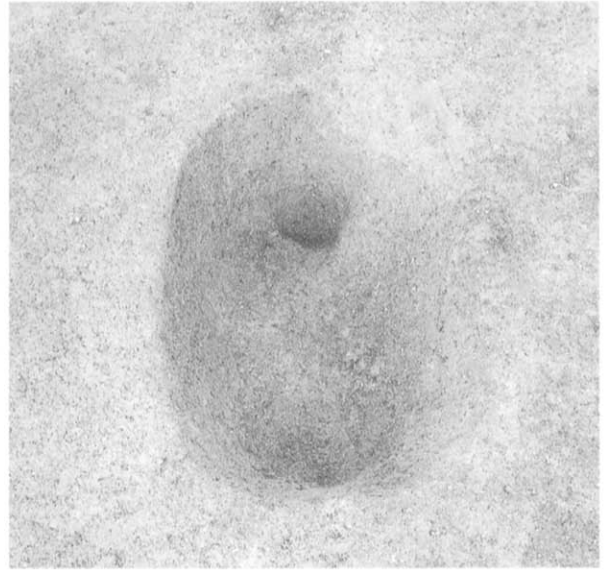
1SB060掘り方全景（西から）



1SA065掘り方全景（南から）



1SK003全景（西から）



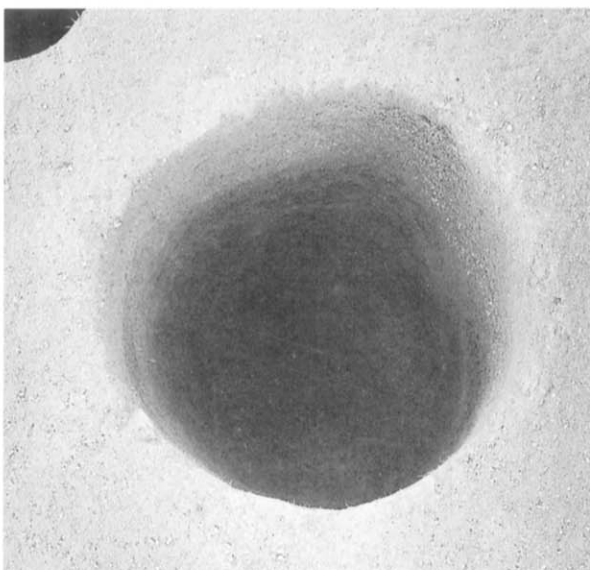
1SK007全景（西から）



1SK012全景（西から）



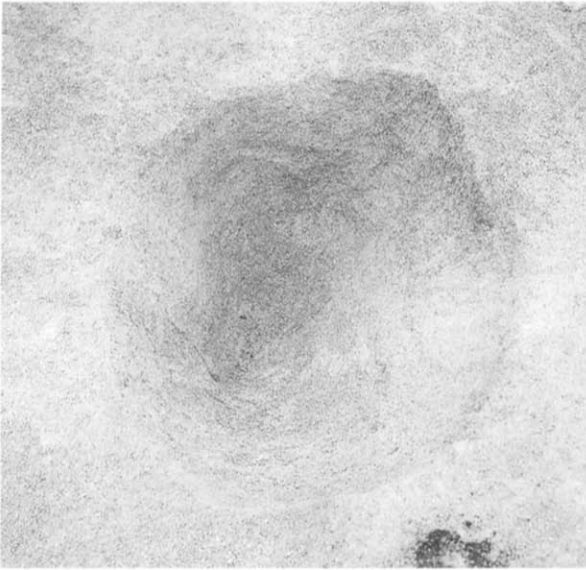
1SK014全景（北から）



1SK027全景（北から）



1SK028全景（西から）



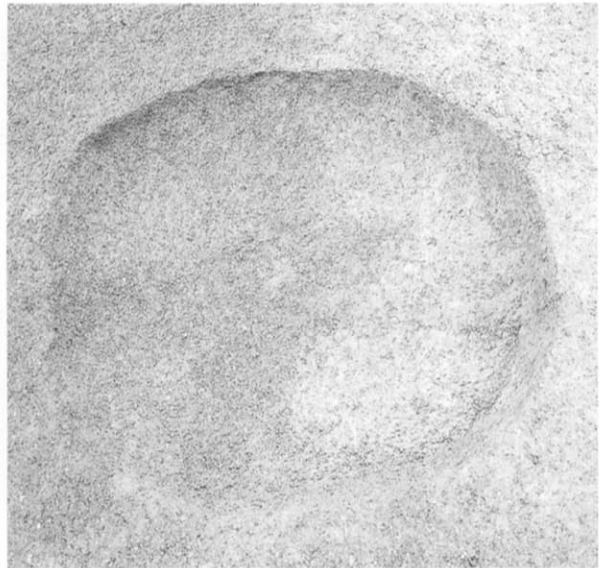
1SK032全景 (南から)



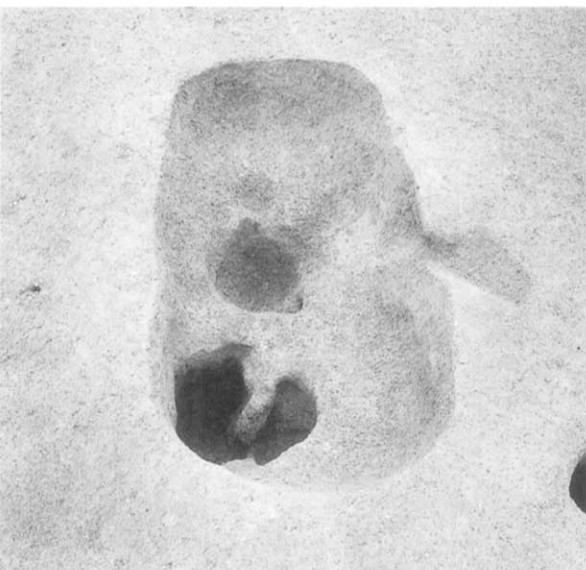
1SK033全景 (西から)



1SK048全景 (南から)



1SK059全景 (東から)



1SK071全景 (西から)



1SK096全景 (東から)



1SK118全景（西から）



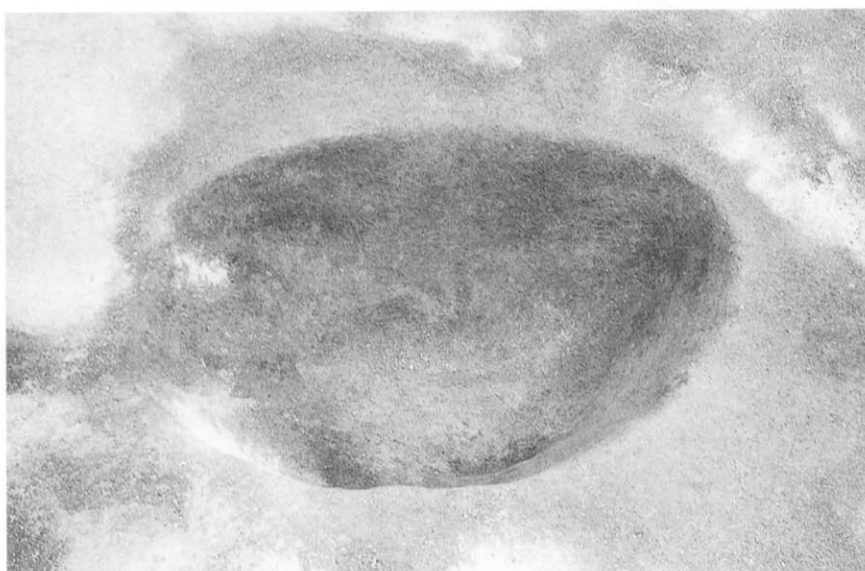
1SK123全景（南から）



1SK124全景（北西から）



1SK128全景（西から）



1SK134全景（南から）



1SK164全景（南西から）



調査区南部1SD008・1SD016全景（北から）



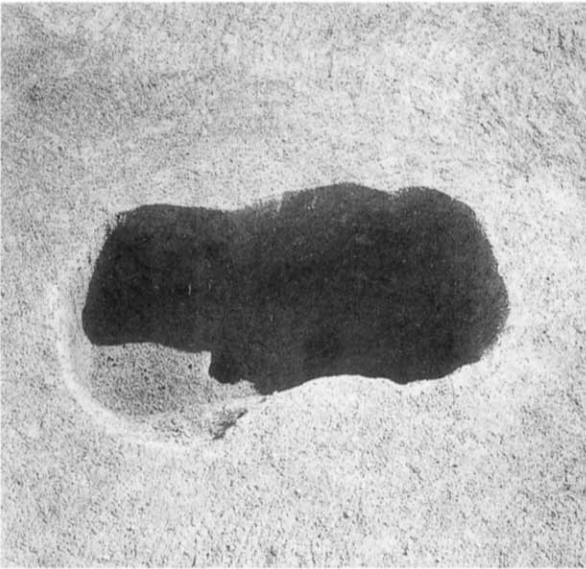
調査区南部1SD009全景（北から）



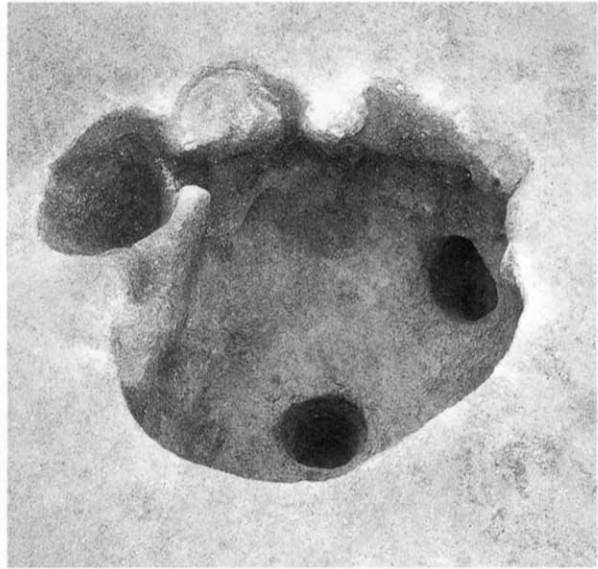
1SK006全景（東から）



1SK021全景（西から）



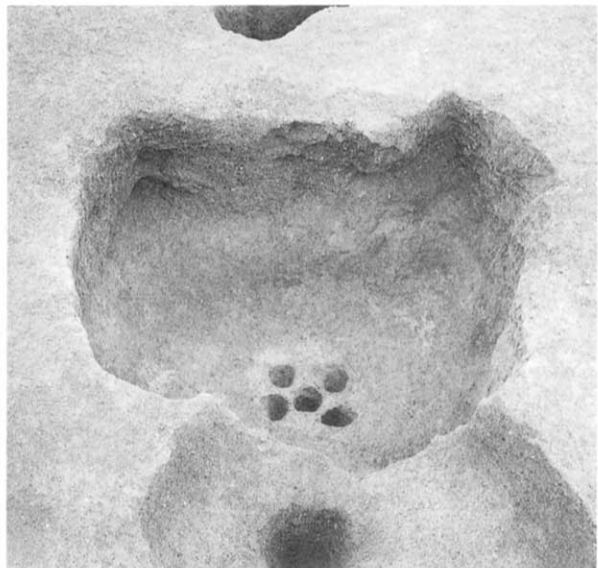
1SK063全景（北から）



1SK101全景（北から）



1SK131全景（北から）



1SK163全景（南から）



1 トレンチ全景 (北から)



2 トレンチ全景 (北から)



調査区北部 3・4・5・8 トレンチ全景 (南から)



調査区北部 5・6 トレンチ全景 (南から)



3 トレンチ干裂状地形検出状況（南東から）



4 トレンチ深掘り土層堆積状況（南東から）



4 トレンチ干裂状地形検出状況（北西から）



5 トレンチ深掘り 1 土層堆積状況 (東から)



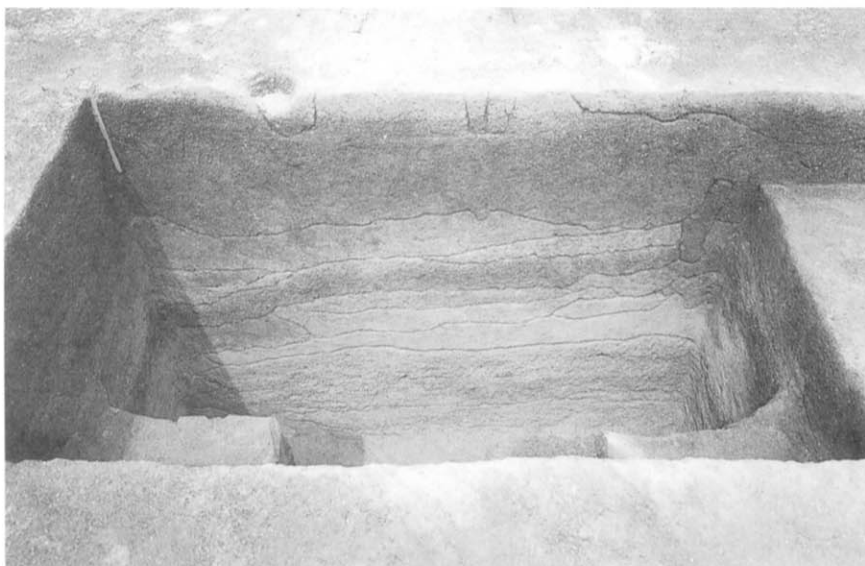
5 トレンチ深掘り 2 土層堆積状況 (東から)



5 トレンチ深掘り 3 土層堆積状況 (東から)



5 トレンチ深掘り1 干裂状地形検出状況 (西から)



6 トレンチ深掘り1 土層堆積状況 (西から)



6 トレンチ深掘り2 土層堆積状況 (西から)



7 トレンチ土層堆積状況（東から）



9 トレンチ土層堆積状況（南から）



8 トレンチ全景 (西から)



8 トレンチ全景 (東から)

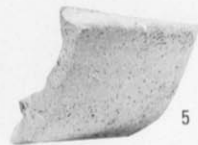
1SI001暗黄褐色土



1SI030暗黄褐色土

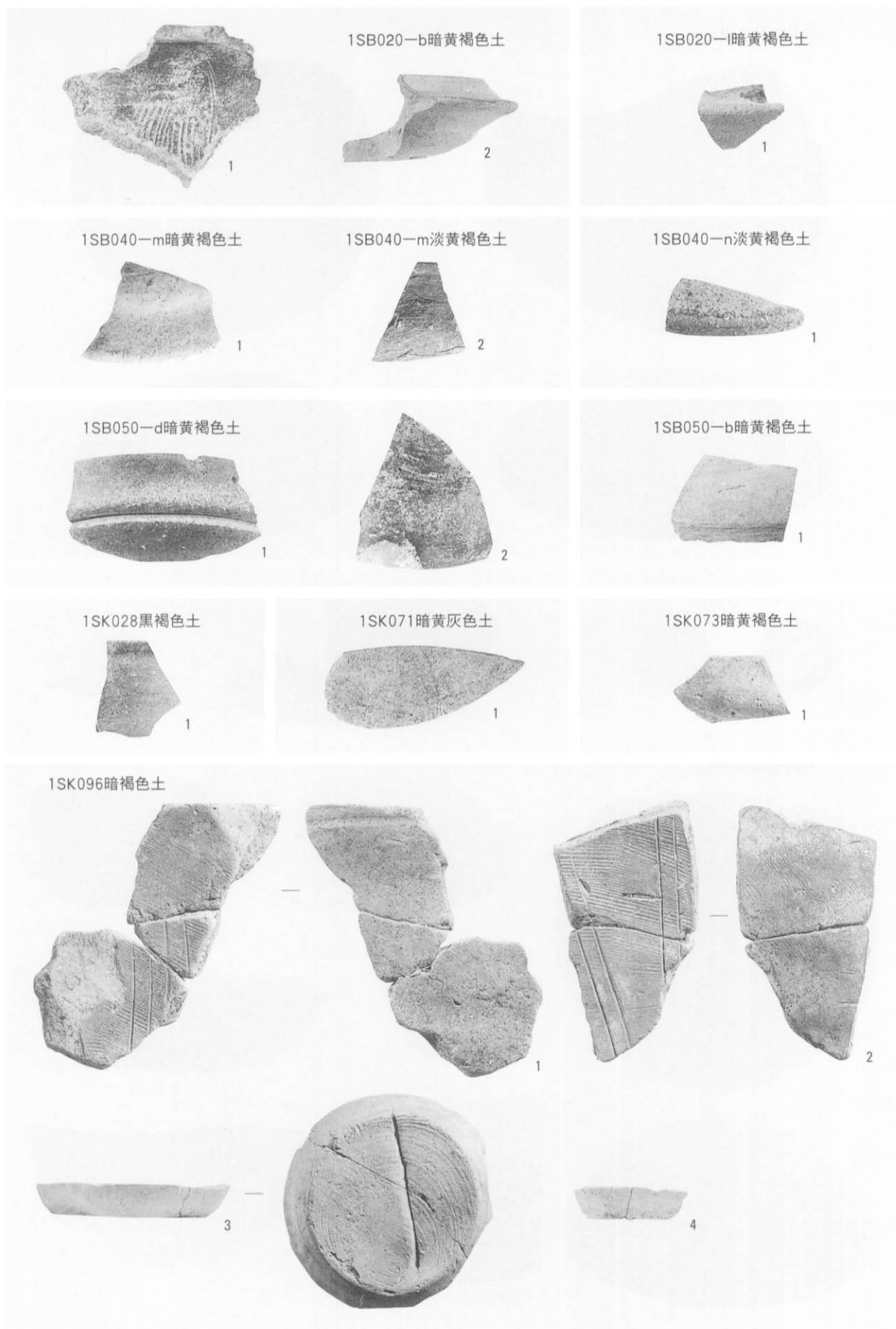


1SI035暗黄褐色土

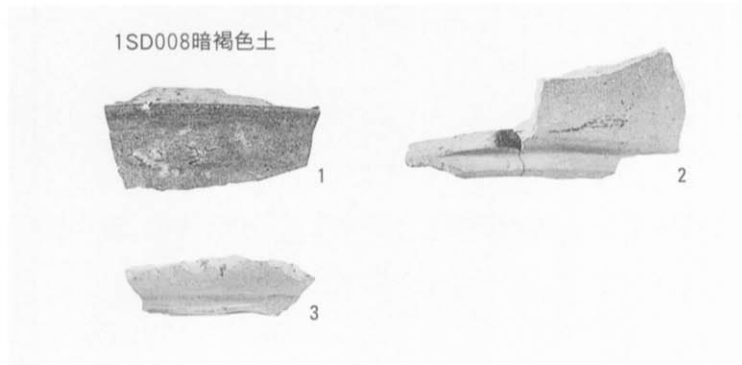
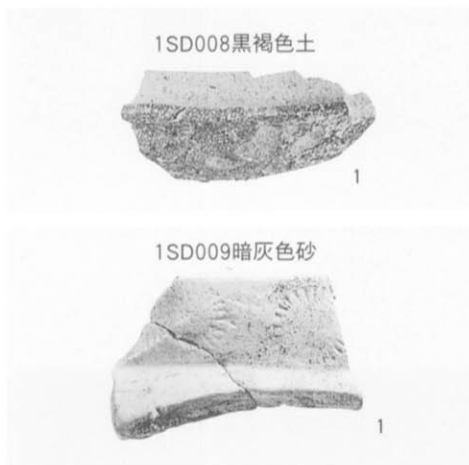


4 体部外面へラ劃き文

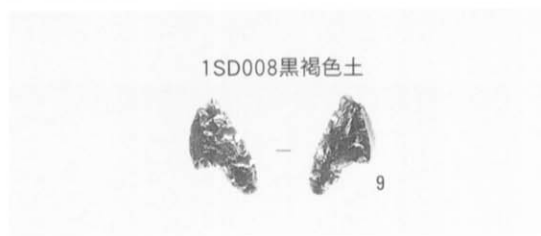
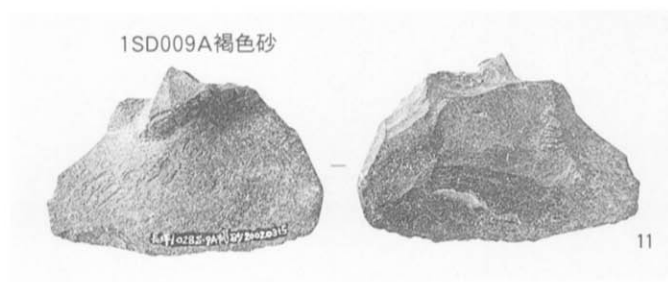
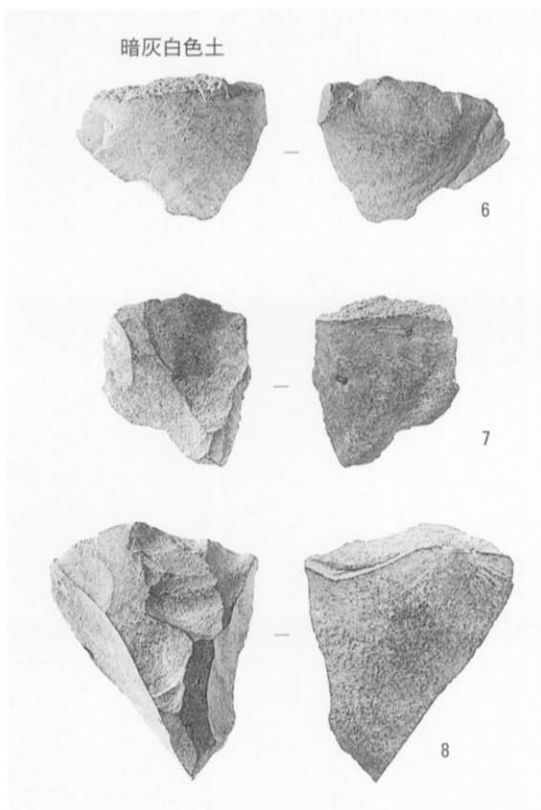
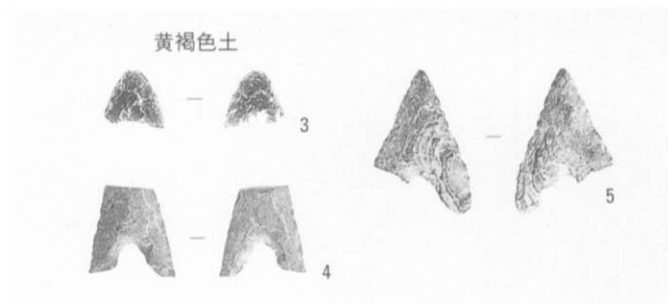
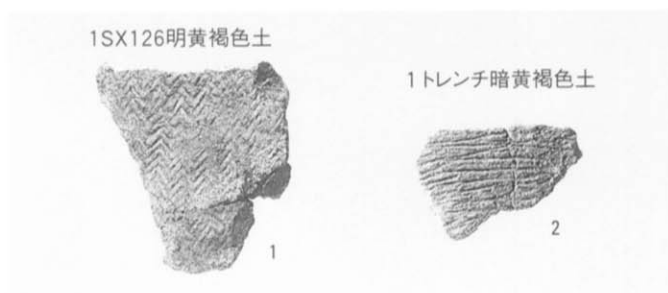




1SB020 · 040 · 050、1SK028 · 071 · 073 · 096出土遺物



1SD008・009出土遺物



縄文時代出土遺物

報告書抄録

ふりがな	だざいふ・さのちくいせきぐん15										
書名	太宰府・佐野地区遺跡群15										
副書名	長ヶ坪遺跡第1次調査										
シリーズ名	太宰府市の文化財										
シリーズ番号	第65集										
編著者	小山裕之、中山 豊、佐々木竜郎										
編集機関	太宰府市教育委員会・玉川文化財研究所										
所在地	太宰府市教育委員会 〒818-0198 福岡県太宰府市観世音寺1丁目1-1			TEL092-921-2121			玉川文化財研究所 〒221-0822 神奈川県横浜市神奈川区西神奈川1-8-9			TEL045-321-5565	
発行年月日	2002（平成14）年12月25日										
所収遺跡名 ふりがな	条坊 【鏡山推定案】	所在地 ふりがな	コード		座標		調査期間		調査面積 m ²	調査原因	
			市町村	遺跡番号	X	Y	開始	終了			
ちょうがつほいせき 長ヶ坪遺跡 だい1じちようさ 第1次調査	条坊外	ふくおかけんだざいふし 福岡県太宰府市 おおおざおおざの 大字大佐野 461-1、465-1、 467-1他 ほか	402214		54953.000	-47170.000	20011112	20020610	2,480	佐野土地 区画整理	
所収遺跡名	遺跡種別	時代	主要遺構		主要遺物		特記事項				
長ヶ坪遺跡 第1次調査	集落	縄文時代 ～近世	竪穴住居跡・ 掘立柱建物跡・ 土坑		縄文土器・石器・ 土師器・須恵器						

太宰府市の文化財第65集
太宰府・佐野地区遺跡群 15
—長ヶ坪遺跡第1次調査—

平成14年（2002）12月

編集 玉川文化財研究所
〒221-0822 神奈川県横浜市神奈川区西神奈川1-8-9
発行 太宰府市教育委員会
〒818-0198 福岡県太宰府市観世音寺1丁目1-1
印刷 株式会社アルファ
〒250-0001 神奈川県小田原市扇町5-25-23